

へ行かゝりけるに、九鬼の家來人を留て、一人も通さゝりける諸士大に仰天して、いかせんと思ける所に、騎馬之士下知していけるは、火難を遁んとするに道を通さず、斯する内に火來、火中に焼死は目前なり、とても死すべき命之、主人をたすけ、大勢の婦人を助、我壹人腹切もなんの事か有んと、皆刀を抜き九鬼之家來へ打てかゝる、九鬼の人數、此體に避易して八方へ引退きける、仍而兩家の奥方の輿をはしめ下女下男もなく橋を渡り、本庄の方へのかれける、是を幸に數萬の大勢、一同に橋へ押込渡りける、さする内餘焰さかんに橋きて迄燒來り、川へ飛込者も有、火に包れ煙にむせひ、水に溺死する者幾百人といふとをしらす。其時火橋杭にもへうつりければ、諸人ふせかんとすれとも、橋の上數萬の人にて透間なく、防へき様もなかりし内、橋板らんかんにもへつきければ、人の上へ乗こへ又は川へ飛込も有、歴々の鋌打し乗物など、目より高く差上げられ共、もみ合打たおし、かこをみちんにふみくたき、身に疵を請たる者、幾人といふ事なく、其時橋中半々燒落ければ、數百之男女小兒一時に川へ落て水底に沈み、壹人とし助る者なし、中にも十間計燒落ける故、跡成人は知らず、前成人は跡を押しわらゝと川に落死ける。橋

不揃〇殘。燒落此時爰にて死者、貳千六百餘人、夫々無緣寺火移り、二ツ目南本庄をやき拂ひ、翌月朔日已上刻に火は漸鎮りける。大小名の屋形三百餘軒、町も貳萬軒餘、其外社堂寺院其數をしらす、南北二里ほと、東西三里餘之所、眇々として邊りもなく、荒芒たる野原となれり。翌日十二月朔日之、夫々親を尋、子を失ひ、主人を失ひ、妻をなくし、男を尋る人、兩國の川端に來りてなげきかなしみ尋ける。たんゝに死骸を引込、つみかさねならへ置たる有様、肴川岸に鹽肴をつみしかことく、おそろしし共あはれ成有様之。主人は死骸を持行、數萬男女なきかなしみ、壹人ゝに尋改、目もあてられぬ斗之。西の年〇明曆三年。大火事如斯のよし申傳へけれ共、あまり夫にもおとるましき天變之。主知れぬは皆無緣寺に葬る。海へ流れ出たる死骸も幾百人といふ事を知らす。二三日過て水底を浮上りて川流に成も夥し。其中に盜入來りて、う口うぐなきになきかなしみ、人を尋るふりして、死骸を壹人ゝさくり、懷中の鼻紙袋、守袋、首にかけたる金財布など皆取たるこそ、誠に正眞の鬼之と人々いゝあへり。夫々大小名町々迄、相應ゝにかり小屋を建、雨風をしのぎける。金銀をちりはめたる舊殿一期の土灰に變して淺ましかりし有様なり。富貴の町人も家藏



を焼、妻子を失ひ、親を失ひ、子を殺し、手と身からに成も有せひなく本國へ行も有。又は出家に成も有。亂心して自滅するも有。かゝる事を見なからも、此時焼ぬ所の町人共は悦び、竹木を高賣して金銀をもふけ、むしろこも百文に貳まい、そうり壹足廿文にうりかひす。小屋之内に親族うち集り、日夜なきかなしむ。其上十二月廿二日酉刻を大雨之日之夜しやくを流しければ、かり小屋に住ける者とも、寒雨もり氷りて衣服はなし、温方をすへき食物なければ、女童又は虚弱のもの多凍死、病死せるもの家々に多かりける。廿五日かあめやみぬ。明曆年中酉のとしの大火事より五十年にあたり、かゝる天變地妖に人多く滅亡する事、過去一葉のかんする所之、平生心かくへき第一也。

元祿變異記

此災ニ關シテ諸家傳フル所ハ、

十一月廿九日元祿十六年。小石川第中七川ヨリ火起ル。邸殿悉ク烏有トナル。士人ノ亭宅モ大半焼亡ス。此日本郷丸山ヨリ火又起ル。駒籠ノ莊士人亭宅過半延焼ス。公及夫人公子ミナ松平筑後守頼道君高田邸ニ入テ火ヲサケ玉フ。台使一柳土佐守來ル、公ヲ存問セラル。

水戸紀年

廿九日元祿十六年十一月。同前、地震。大風、酉ノ中刻水戸サマ上屋シキヨリ失火不殘焼失。夫ヨリ御弓町湯島本郷谷中下野上野寺中聖堂神田柳原兩國本所深川焼失。朔日元祿十六年十二月。未ノ刻火消云々。○右ノ節下谷御ヤシキニテ類火ノ面々二百四十三人、外宅ノ分ハ不記之。

櫻田記

同元祿十六年十一月。廿九日、快天、晝ハ風靜也。暮六時過カ烈風。于時同刻、小石川水戸様御上邸カ出火、本郷此方御上邸も火移、御成御殿、本宅下小屋一時ニ焼失、兩御隣様も不殘焼失、其餘下谷茅町、谷中三崎町邊、天澤寺之方は、柳原淺草邊迄、筋違橋之内カ通り町すた町、本町濱町、鐵炮洲、靈岸島迄焼失。御前も、御乗廻御下知、御家中一統雖防、中々大風難防。其時上野に御人數可被遣哉之旨、聞番近藤治右衛門を以秋元但馬守殿迄御伺被遊ひ處、御尤之旨申來カ付、奥村丹波、奥村伊豫御人數召連罷越ひ様被仰出、御前も御作事方御門カ御出、御茶之水ヨリ富坂下御廻リ、竹町御退、上野に爲御見分、御出、御門主様御勤、御上邸焼跡に被爲入、追分口カ御中邸に被爲入、御居住也。御上邸焼跡カハ、御大小將横目堀平馬熊谷半助等相殘、夜中御屋敷中御土藏廻等相廻、大御門跡カハ、大組足輕頭原田又右衛門長矩組召連固之、御作事方御門跡カハ、御大小將馬淵



友之進有之、往來を改、同夜方御假小屋被仰付。

——政鄰記

同元十六癸未年十一月廿九日泰護日記

一、淺草御屋敷、西御屋敷、深川御屋敷共ニ御類焼、當御上屋敷共御門前西南之方迄焼ハ得共、別條無之ハ。

同日廣頼平右衛門有族御留守居勤中日記

一、淺草中御屋敷類焼、辻番焼失申ハ。依之假辻番立番入指置ハ由、御目付久松忠二郎様に新五郎出ハる相伺ハ。御返答成程左様可仕由御差圖也。

——國典類抄田久保

萬年記・慶寬私記・續談海・歷代炎上鑑其他記ス所モ、概シテ異事無シ。

〔附記〕

一、十八日元祿十六年十二月。

一、辰ノ刻芝金杉南三町目ヨリ出火、安樂寺ト云寺ニテ燒鎮ル。

——天享吾妻鑑

十二月元祿十六年。江戸新田島御屋鋪燒失。

——御當家年代略記高知藩。

寶永二年乙酉元二紀元二五三六五年。閏四月朔甲午甲午三正綜覽。芝増上寺市火有リ。

元祿十六年十二月  
火災

寶永二年火  
災

○柳營日次記。御徒方萬年記。月堂見聞集。十一月四日甲子寶永二年紀元二五三六五年。○甲子三正綜覽。吳服橋市鍛冶橋市間燒夕年代炎上鑑。

寶永二年火災 寶永二年ノ重ナル火災ハ、兩回也。即チ

一、閏四月二日火災 相傳フ、

閏四月二日寶永二年。昨夜芝増上寺方丈火災、御裝束所御殿并尾州靈仙院殿紀

州明心院殿御靈屋類焼、御佛殿并本堂山門以下は無別條。

——柳營日次記

一、同夜寶永二年閏四月朔日。亥上刻、増上寺出火ニ付、御老中方下乗橋迄出ハ様、御目付衆御達有之ハニ付、本御番御徒六人組壹人差添差遣申ハ。

——御徒方萬年記

寶永二年閏卯月朔日江戸出火

閏四月朔日未ノ上刻方雷鳴、大雨降、申ノ上刻晴、酉ノ中刻方雨降、子刻迄降。亥ノ上刻増上寺庫裡方出火、方丈御成御殿不殘燒失、鶴姬様徳川綱吉長女、徳川綱教室。御佛殿御位牌燒失、千代姫様徳川家光長女、徳川光友室。御佛殿燒、御位牌殘ル。右御佛殿兩所預リ坊主衆二人、小姓衆一人、玄關番一人、右四人火中相果、細川越中守利綱。御家

閏四月二日火災

寶永二年火災  
閏四月二日火災



來多く怪我仕ひ。本堂山門御靈魂屋ニケ所残り申ひ。——月堂見聞集

閏四月二日○寶永二年大雷雨、水戸侯小石川御殿御器具部屋へ雷落申ひ。昨一日

ノ夜大雨、惣上寺ノクリヨリ出火、徳松様御佛殿ヲ初、三御佛殿ヤケ、御位牌ト

モニ、御成御殿モヤク。台徳公御佛殿無之上様二萬兩ノ御ソウサト云フ。細川

越中守殿働ニテケガアリシ位也。

——中村雜記

〔參考〕 武野八代集ニ、

一、閏四月朔日○寶永二年夜増上寺方丈より出火、殿宇不殘燒失しければ、

火宅をばはだかになりて逃給ふ、衣はやけてひゆほんよのふ。

又、

雨の夜はまだ宵ながらやけぬるを、寺のいづこに火事やどるらん。

二十一日火災 左ノ如シ。

一、同○寶永二年十一月四日夜寅ノ刻、吳服橋より鍛冶橋之間二丁程、長六丁燒ル。

南北六丁ニ幅三丁計、五日朝辰ノ中刻鎮ル。武家八ヶ所燒。

——年代炎上鑑○歴代災鑑略同。

大名坊前邸

十一月四日火災

寶永二年十一月五日、小石川松平讃岐守ノ邸ヨリ失火シテ大火トナリ、尙屋敷東ノ方過半燒失ス。西ノ方長屋ハ殘レリ。——備藩邸考

三年丙戌○寶永三年正月十四日癸酉○癸酉、三正綜覽。夜、神田連雀町○市内

須田町○須田町火ヲ失シ、延燒堺町、大坂町○市内邊ニ至ル。○柳營日次記、年代

院殿御實紀。二月十九日戊申○寶永三年紀元二三六鍛冶橋通○市内火有

リ。○柳營日次記、御徒方萬年記、常憲院殿御實紀。十一月十六日庚午○寶永三年紀元二三六四谷

竹町○市内火有リ、延テ鹽町○市内ニ及フ。○文露叢、續日本王廿日甲戌

○寶永三年紀元二三六和泉町○市内火ヲ失シ、靈岸島○市内マテ

延燒ス。○文露叢、續日本王

寶永三年火災 寶永三年ニハ、稍重ナル火災四回有リ。

一、正月十四日火災 左ノ如シ。

十四日○寶永三年中略。

今夜已上刻神田連雀町○一ニ須田町ニ作ル。カ是ナルヲ知ラス。カ出火、及大火、堺町、大坂丁邊悉

延燒、及翌辰下刻鎮。

——朝都時代ノ火災

寶永三年火災

正月十四日火災

二月十九日火災

十一月十六日火災

十一月廿一日火災

十一月廿一日火災

十一月廿一日火災

寶永三年火災

正月十四日火災

正月十四日火災



右ニ付、増防被仰付。

——柳營日次記

一、二月十七日○寶永三年。

寅之刻、神田明神下カ出火ニ付、下乗迄本御番カ御徒差遣、阿部飛驒守○正に御奉書御使ニ罷越。

——御徒方萬年記

一、寶永三丙戌年正月十四日夜子ノ刻、神田須田町○武江カ出火、神田見附土手町家、新下谷白銀町土手を越、石町通り三丁目カ小傳馬町、本町通りは、四丁目カ油町迄、新大坂町大門通り、長谷川町富澤町和泉町堺町住吉町大坂町元葎原不殘、新材木町小網町壹丁目東關堀限、翌十五日鎮ル。晝大體町家計、南北壹里、横十町餘。○歴代炎上鑑ニハ、正月十四日(○寶永三年)夜子刻、須田町より出火、谷川町和泉町堺町葎屋町住吉町富澤町邊、新大坂町新材木町、どうか堀に至る七十餘町焼、翌十五日辰刻鎮ルト有り。

——年代炎上鑑

此外續日本王代一覽武江年表其他ニモ見ユレト、之ヲ略ス。

〔參考〕大成令ニ、

一、今度火事ニ付、諸商賣諸職人、并日雇大八車駄賃、其他之品々、高直ニ仕間敷旨、被仰渡ハ、間、急度可相守ハ。若相背者於有之者、曲事可申付者也。

附記

寶永三戌年二月朔日

〔附記〕柳營日次記云フ、

十八日○寶永三年二月。

今晚神田明神下福原刑部屋敷カ出火ニ付、増火消被仰付。

二、二月十九日火災ハ、

十九日○寶永三年

今酉後刻、鍛冶橋御門之外鍛冶町二丁目カ出火、町屋敷多燒失、亥刻鎮。火事場へ稻垣對馬守○重相越、増火消數輩被仰付。

——御徒方萬年記

歴代炎上鑑ハ此時、南北四町、東西貳町餘燒亡すト爲ス。常憲院殿御實紀亦此災ヲ記ス。同書又云フ、廿日○寶永三年二月。此日、火消役の輩に令せらるハ、昨夜の火災、風もなく、深夜にもあらず、遠地にもあらざるに、大火に及へり、小火の中すみやかに馳つけ撲滅すへき旨、前にも令せられしに、御不審少からず、今より後いよ／＼おこたらすとみに馳つけ、小火の中に打消へしとなり。又この火災により、警火の事いよいよ心いれ、下賤までも曉諭すへき旨ふれらる。日記。若夫續日本

朝都時代ノ火災

五四九

寶永三年  
二月十八日  
火災  
二月十九日  
火災



十一月十六日火災

王代一覽武江年表ノ類此災ヲ廿日トスルハ誤ナル可シ。  
三、十一月十六日火災ハ、文露叢妻天享吾ニ左ノ如ク見ユ。

十一月廿日火災

十一月十六日三寶永四谷竹町ヨリ出火、乾風烈、鹽町迄類焼。  
續日本王代一覽武江年表其他亦此災ヲ記ス。武江年表ニハ四町半餘焼ト有リ。  
四、十一月廿日火災ハ、  
二十日三寶永和泉町ヨリ出火、乾風烈、靈岸島迄焼失。

文露叢天享吾妻鑑同。

一、十一月廿日三寶永

夜九時、泉町方出火ニ付、増火消大名衆七箇所に御奉書出。御使當番御徒勤之。

御徒方萬年記

一、同三寶永十一月廿日、夜子ノ刻和泉町方出火、大坂町住吉町甚右衛門町堺

町、吹矢町、人形町、乗物町、長谷川町、此外武士屋敷六、七軒、幅三丁長サ十五六町

類焼、依之今年芝居二度類焼、廿一日朝辰ノ刻鎮ル。

年代炎上鑑

武江年表續日本王代一覽ノ類、皆略ス。

四年丁亥三〇紀元二正月十五日己巳正〇己巳、三

濱町〇市内日

火ヲ失シ、

本橋區。

火ヲ失シ、

寶永四年火災

正月十五日火災  
三月八日火災  
八月朔日火災

數街ニ延及ス。

〇文露叢武江年表。

三月八日辛酉

〇寶永四年紀元二三六

神田〇市内

火有リ、亦數町ヲ焼ク。

〇文露叢御徒方萬年記。

八月朔日庚辰

二〇寶永四年紀元

辰、三正小日向〇市内

邊里許焼失ス。

〇文露叢年代炎上鑑。

寶永四年火災

前後三回ヲ重ナル者トス。其始末左ノ如シ。

一、正月十五日火災ハ、

正月十五日四〇寶永申刻、濱町新同心町ヨリ出火、水野隼人正〇忠長屋者ヨリ、

本所一ノ橋辨才天門前へ火飛、小梅迄大火。

文露叢天享吾妻鑑同。

武江年表ニハ、正月十五日四〇寶永申刻、濱町新同心町ヨリ出火、本所一の橋辨

才天前より中の郷業平天神の社邊、元小梅に至る。寅下刻消る。ト有リ。元祿寶永

珍話モ略同シ。

〔附記〕

一、寶永四年正月十六日晝、四谷伊賀町邊ヨリ出火仕、鹽町竹町、四谷の傳馬町七橋  
はた迄焼、十六日夕方方火留リ。尾州様御中屋敷類火之由。大方六町四方計焼申ハ

朝都時代ノ火災

附記

寶永四年正月十六日火災

寶永四年火災事蹟  
正月十五日火災



由同廿日夕九ツより、長谷川町・和泉町新道より出火、靈巖寺迄焼い。其より北新堀  
鐵砲州迄焼申い。廿一日の朝六ツ迄焼留り申い。

——月堂見聞集

二十九日(寶永四年正月。)

卯下刻、麻布從内藤主殿頭居宅(○御徒方萬年記、麻布百姓町内藤主税屋敷)出火、  
一本松邊家屋焼亡、巳下刻鍋島岩松宅(○火鏡。  
右ニ付、増火消數輩被仰付。)

——柳營日記

二、三月八日火災

ハ、

三月八日(寶永四年。)  
龜井町ヨリ出火、乾風烈、靈岸島邊焼失。

——文露叢妻鑑同。

三月八日(寶永四年。)  
午下刻、小傳馬町邊々出火ニ付、御奉書御使出、大名増火消九  
人被仰付。本御番加御番組ニ而持參之。何ニ御受來ル。

——御徒方萬年記

一、同(寶永四年。)  
三月八日晝九ツ時分、龜井町より出火、折節大風にて、小傳馬町二  
丁目・大傳馬町二丁目・油町・田所町・堀留町四丁目・小舟町三丁目・大門通富澤町・花町  
濱町・高砂町・住吉町・難波町・堺町・芝居不殘焼申い。よし町・乗物町・新材木町・小網  
町三丁目・箱崎町・永代橋・靈巖寺島にて火留り申い。

三、八月朔日火災

ハ、

八月朔日(寶永四年。)  
龍慶橋邊ヨリ火出、小日向築地、御簞笥町邊小石川末迄、長サ  
壹里餘類焼。

——月堂見聞集(○年代炎鑑略)

一、同(寶永四年。)  
八月朔日之晝午刻、小石川隆慶橋之後、筑摩(○土)明神之下、旗本衆

——文露叢妻鑑同。

御屋敷より出火、馬場より上水之上、切支丹屋敷の後、五六町程焼申い。夫より  
段々御簞笥町不殘焼、其外さきの町屋敷二三丁程焼、水戸播磨様御屋敷不殘  
焼、白山御殿の前にて火留り申い。傳通院は別條無之い。屋敷方は餘程焼申い。  
大方幅三町餘、長さ廿町程焼申い。

——月堂見聞集

一、八月朔日(寶永四年。)

未上刻過、築戸明神下戸張源五郎宅々出火ニ付、増火消大名六人被仰付、御奉  
書出、御使本番中山權左衛門組勤之。

——御徒方萬年記

一、同年(寶永四年。)  
八月朔日未ノ刻、小日向戸張源五右衛門宅々出火、大塚迄焼。幅  
四五町、長さ三十町焼ル。

——年代炎上鑑

二日(寶永四年八月。)

關都時代ノ火災



一、德雲寺一圓來、昨日寺内ニ有之ハ觀音堂、并門番所塀等類焼仕ハ由、繪圖略之。口上書持參也。至管寺三宅備牧添手紙遣之、具記左。

小日向德雲寺類焼之所、再造之義申上ハ、被聞召届可被下。以上。

八月六日

金地院役者  
札西堂

寺社御奉行所

口上之覺

一、貳間三間之觀音堂。

一、壹間九尺之裏門番屋。

一、東北之方外圍板塀竹垣七拾間餘。

右之通、去朔日類焼仕ハニ付、如有來再造之義奉願ハ以上。

寶永四丁亥年八月六日

禪宗五山派市谷月桂寺末

德雲寺

寺社御奉行所

—金地院記錄

〔附記〕

寶永四年  
十二月火災

一、同年(○寶永四年)十二月七日午ノ刻過、小日向金剛寺坂町家方出火、北西大風、牛天神之宮殘リ、社内近所、傳通院前火消役屋敷等焼失、未之下刻鎮ル(○御徒方萬年

寶永五年  
三月後火災

記ニハ、十二月七日、小日向金剛寺坂邊方出火ニ付、増火消大名拾人被ニ仰付、御奉書出。御使本番朽木彌左衛門、加番中山權右衛門組相勤。一、同月(○寶永四年十二月)廿八日、今夜寅ノ刻前、京橋出火、八丁堀之方ハ燒ル。

—年代炎上鑑

七日(○寶永五年三月○中略)

一、昨夜子下刻、表六番町横町安部彌一郎小普請大久保淡路守組正木甚五兵衛屋敷堺方出火、麴町壹丁目堀端御書院番頭大久保豐前守屋敷ニ燒留。増火消被ニ仰付。

—柳營日記

一、同年(○寶永五年)十二月廿二日卯ノ上刻、永田馬場出火、長二町横半町燒(○御徒

—年代炎上鑑

方萬年記ニモ見ユ。

寶永六年火災

六年己丑(○寶永○紀元)三月九日庚辰(○庚辰、三正綜覽)下谷車坂(○市内)火有リ、

三月九日火災

上野山内(○市内)下谷區。二延燒ス。○柳營日記。文露。十二月廿九日乙丑(○寶永

十二月廿九日火災

乙丑、三正綜覽)村松町(○市内)日。出火、延燒有リ。○月堂見聞集。

寶永六年火災事蹟

寶永六年火災 重ナル者二回也。

三月九日火災

一、三月九日火災 ハ、三月九日(○寶永六年)。

— 關都時代ノ火災



今曉、下谷車坂法花宗大久寺々出火、上野寺内火入、寺家吉祥院、宗勝院、楞伽院、東漸院焼失、一乘院過半焼ル。廿日御佛殿火ノ粉來ル。上杉民部大輔憲、吉人數ニテ防之、御供所火消堀田牧太郎手防留ハ。久世大和守之。重場所ニ罷出ル。

——柳營日記

三月八日〇寶永六年。曉七時、下谷屏風坂邊々出火、付増火消御奉書御使出ル。

——御徒方萬年記

三月九日〇寶永六年。

下谷大久寺ヨリ出火、上野坊中へ火移リ、法性院、吉祥院、楞伽院、東漸院マテ類焼、御佛殿ハ無別條、依之准后御方へ上使中條山城守ヲ被遣。——文露叢

二、十二月廿九日火災ハ、

極月廿九日〇寶永六年。之夜五ツ時、江戸濱町、村松町東側六軒目ヨリ出火、夫々東

南へ焼、富澤町新堀端辨天ノ方廣瀬三左衛門、江森條助、岡野六左衛門、皆川惣十郎、服部一齋、島田九鶴、太田友巳、此外醫師小普請方六軒焼、九鬼長門守、殿屋敷ハ濱表残り、裏門之分不殘焼申ハ。荒川陸意、熊澤彌九郎、吉野市太夫、藤野藤助、美濃部藤左衛門、右町數四十町餘焼申ハ。牧野備後守〇成。殿屋敷ハ、別條

無之ハ。

——月堂見聞集

一、寶永六己丑年十二月廿九日戌ノ中刻、村松町々出火、二三町焼ル。

——年代炎上鑑

〔附記〕

一、寶永七庚寅年正月元日夜子ノ刻、小日向諏訪町々出火、二町程焼ル。

——年代炎上鑑

廿二日〇寶永七年四月。夜半麻布出火、町屋三四町焼亡。

——金地院雜記

十日〇寶永七年十月。今夜戌刻、池上本門寺出火、本堂祖師堂庫裏書院大坊悉災失、

及翌日黎明消。山門塔婆寶藏寺家無恙云々。

——萬年記

七年庚寅〇寶永紀元。十二月十九日己卯〇己卯三。柳原〇市内。出火、

延テ靈岸島〇京橋區。邊二燒及ス。〇文露叢。天享吾妻鑑。月堂見聞集。基

寶永七年火災 傳フル所、左ノ如シ。

十二月十九日〇寶永七年。柳原ヨリ出火、誓願寺前紺屋町、小傳馬町、小網町、伊勢町、

北八丁堀、靈岸島マテ燒。——文露叢

十二月十九日〇寶永七年。今日柳原松平伊豆守〇信。中屋布ヨリ出火、乾風烈、靈嚴

島永代橋邊迄類燒。——天享吾妻鑑

霸都時代ノ火災

五五七

附記

寶永七年  
正月後火  
災

寶永七年火  
災

寶永七年火  
災事蹟



十二月十九日○寶永七年丑天晴風烈申刻地小震未下刻丑寅方有燒亡元誓願寺前柳原ト松平伊豆守中屋鋪出火云々。即時及大火至辰巳方三十五六丁横平均八九丁云々。亥刻火消了。自御臺用人三人用達兩人侍十人早々來依西北風旅館無恙。頗近年大火云々。男女多集旅館不便之體也。仍施餽等了。諸人感悅云々。歡喜々々。十二月廿二日壬辰天晴時々陰有所思所々令代泰通罷向類燒之邊可見廻旨相示歸來書付進之如此。

當地諸民安穩之故歎可悅々々。

別紙

神田明神湯島天神御代參相勤夫々通町筋燒跡一覽罷歸也。本町石町傳馬丁邊所々取早普請仕移商賣仕也者後相見へんかたはしか普請仕也。尤小屋かけ致しれ者も相見申也。餘りごみ吹たて通りかたかく故罷歸也。

——基熙公記○編年史料收。

十二月二十三日○寶永七年十九日申刻於神田火災アリ。境町邊ヨリ永代橋近所ニ到リ延燒シ。亥刻滅。深川第へ人數ヲ遣ストイへ。無恙旨各淺井隼人言上。十二月二十九日去十九日江府災アリ。延燒ノ者ニ前例米穀ヲ賜ハル旨金須

藏人告達ス。

——伊達治家記錄

此外基長卿記○編年史料收。ニモ江府大火云々ト見エ。月堂見聞集ニハ○寶永七年十二月十九日申刻より江戶神田松平伊豆守様中屋敷より出火。明る卯刻に火留る。初は北風夫より西風に成り申也。凡類燒之分は紺屋町二丁三丁四丁日本銀町二丁三丁四丁五丁目白銀町三丁四丁目大傳馬丁本石町三丁四丁鐵炮丁小傳馬一丁二丁三丁目瀬戸物町堀留町田所町小田原町伊勢町小舟町堀江町塚町大船町小網町カヤバ町一丁二丁同心屋敷靈巖寺島にて火留る。ト有リ。其他萬年記年代炎上鑑ノ類今之ヲ略ス。

中御門天皇寶永八年辛卯○五月七日改元正德元年正月四日癸巳○癸巳正綜覽。

土器町○市内麻布區。火ヲ失シ延燒新堀○市内ヲ越エ東芝魚店○市内芝區。二

至リ南海岸ニ至ル。○日本堂見聞集。年代炎上鑑。武江年表。十九日戊申○寶永八年正月。

新和泉町○市内本橋區。失火靈巖島○市内京橋區。マテ延燒ス。○月堂見聞集。年代炎上鑑。武

正德元年辛卯○紀元二一七一年十一月十一日乙丑○乙丑三神田

連雀町○市内火有リ延テ靈巖島○市内京橋區。ヲ燒ク。○年代炎上鑑。武江年表。續日本王代一覽。

霸都時代ノ火災

五五九

正德元年火災

正月四日

正月十九日

十二月十一日



正徳元年火災事蹟  
正月四日

正徳元年火災 重ナル者ヲ左ニ舉ク。

一、正月四日火災 ハ、

一、當月○正徳元年正月四日、芝土器町四丁目ヨリ出火、乾風烈ニテ、海手マテ燒。

——天享吾妻鑑

一、正月四日○正徳元年

未下刻、土器町ヲ出火に付、大名衆四人に増火消被仰付、御奉書御使、本番菅沼圖書組御徒衆勤之。

——御徒方萬年記

寶永八年卯正月四日晝七ツ時より、土器町四ツ辻より出火、三田町通西へ少

少入申○鳥津。東芝三丁目少東迄、松平土佐守様○山内、同淡路守様○蜂須、同薩摩

守様○吉貴、有馬玄蕃様○則久、留島信濃守様○光通、石川主殿頭様○義孝、瀧川越

前守様不殘燒申○大分幅十町、長さ一里程の由。

四日○正徳元年申刻、西窪土器町出火、至新堀邊、芝筋燒亡。○有馬玄蕃頭居亭、松平淡路守、松平土佐守

下屋敷等災失。正月四日○寶永八年巳、天晴風烈、今日夕飯程、南方燒亡、芝カワラケ町出火、風烈及大火、雖

然爲町家云々、未半刻出火、申之下刻消了、薩摩中將宅危云々、後聞無難、長屋少

——萬年記

々燒失云々。

——基熙公記○編年史料收。

正月四日○正徳元年東都芝濱町三郎羅池魚之災、吉武君○須賀、暫移于鍛冶橋邸○俵、

目黒邸修造落成、二月二十九日移而居焉。

——渭水見聞錄

正月四日○正徳元年申刻前、三田土器町出火、風烈、芝本札辻迄幅三町餘長十七

町餘燒失、於御中邸ハ、番町○見違、大火ニ付、三ノ手御人數御上邸○被遣、御前

本御行列○被爲入○所遠火ニ付御歸。

——政鄰記

正月四日○正徳元年赤坂ヨリ出火、芝御屋鋪類燒。或云土器坂ヨリ出火。

——御當家年代略記○高知藩。

歷代炎上鑑年代炎上鑑武江年表續日本王代一覽ノ類傳○所大略相同。

二、正月十九日火災 ハ、

正月十九日○寶永八年和泉町ヨリ出火、乾風烈、舊冬十九日燒失ノ處、又十町計類

燒、右二度燒ノ町屋十町○米高一萬千二十俵、二斗五升拜借、十ヶ年ニ返納可

仕旨、千俵拜借、右同斷一度燒町年寄喜多村彦右衛門。

——文露叢

一、正月十九日○正徳元年申下刻過、和泉町出火ニ付、大名衆六人○増火消被仰付、御奉書御使本番土

霸都時代ノ火災

正月十九日火災



岐内記丑勤之。

同八年寶永八年正月十九日夕、大門通和泉町より出火小網町、坂町、堺町、住吉町、高砂町へつつい川岸、靈岸島迄、東は濱町新大橋迄焼貫け申ひ。

——月堂見聞集

一、同年寶永八年正月十九日晝、深川出火、夜暮時、泉町より出火、濱町之方に焼ル。

——年代炎上鑑

正月十九日寶永八年新和泉町より出火、乾風烈しく、靈巖島にいたる。舊冬、寶永七年、燒失之所、又十町許り焼る。

——武江年表續日本王代一覽略同。

一、正月十九日正徳元年江戸橋邊出火、増火消補本町筋出火ニ付御加勢。

——中邑世紀秘説

〔參考〕 其熙公記編年史料收。云フ。

正月廿二日辛亥寶永八年天陰風聊吹、巳半刻微雪時々飛、巳刻後登城、大樹早速令對面給、數刻申承、意味深長、其後行向鍋松殿方、長敷成長喜悅不少、御臺上有閑談事等、其中今度類燒町人等給借米、凡米高一萬千二百十俵餘被施之旨、以御臺密々給書付、一段恩惠感悅之旨申入了、先代諸人辛苦而已、一年

以來毎々溫和之政令、悅耳目了、亥半刻飯旅館了。

三、十二月十一日火災

正徳元年十二月十一日乙丑天快晴、巳刻後風甚烈、巳半刻登城、不幾大樹令入、大奥數刻御言談。

夕飯間、北方有燒亡、未半刻忽及大火、旅館不遠、殊風以外也、雖歸館無益、幸在城内、只遠望見而已、俄大名火消七頭、追又々加之又了、旅館風脇云々、仍無其難旨、注進如雨脚、次第到東南、及一里半許燒亡、大概如去年冬當春云々、雖及子半刻、火未消至、不歸館、丑刻猶火不消、雖然旅館靜謐之由申、案内間歸了。如去年冬、遁數百人、仰金丸四郎兵衛給粥等了。

十二月十五日巳天晴寒氣甚、午刻微雪飛云々、午登城、早速大樹令入給良久申承、今度火災類燒者以下、一々可給惠旨、有御物語頗憐愍之事、珍重々々、今日爲指要事無間心、靜々御臺令閑談、入夜以右近おへや、小判五百兩給之、悅存旨禮了、夜半歸館了。

十二月十八日壬申天晴、午微雪飛云々、巳下刻令登城、有猿樂、仍暫申承、有命云、一、今度逢火災輩、二萬五千俵可被下借米、由被仰役人之處、藏米僅三萬俵有之



間一萬俵之外、以鳥目可被下歟之由、所申上、今日藏米十萬俵、自御料到來之間、無恙二萬五千俵、可被下、以條悅思給者、以大慈悲有此扶助、自然如此條、珍重賀之申了。

十二月二十一日、亥乙天快晴風靜、午半刻令登城、大樹早速御對談、移刻于中、今度大火類燒之旨、今日被下、米之由、有御物語、及晚被下、書付如此。

去寅十二月十九日

當卯十二月十一日

兩度類燒之町三十六町、

米四萬八千三百八十俵餘。

右之通、爲御救拜借米被仰付之。

只大慈大悲、令感歎而已。

二十四日一、今度依類燒給米外、小身之御扶持人結救、凡及六萬俵云々。

右定而愚老可歡喜間、被示聞旨也。誠一々珍重々々、歡喜々々之由、申入了。

二十九日、又今度類燒者被下、米、又役人以下、依常奉公、宜被下、褒美書付等被下。

是其書付如此。

卯十二月

御足米被下、以人數三百九十八人、

米高八千八十俵餘。

御褒美被下、人數千六十八、

金五千二百四十兩。

去年當年兩度類燒之町三十六町、御救米被仰付、

家數五百五十五軒。

家主五百五十五軒。

外二町年寄三人、

米高五萬三千四百俵。

——基熙公記○編年史料收。

十二月十一日、元○正德未刻、神田須田町より出火、靈岸島深川迄燒、寅刻鎮り、

——文露叢

十一日、元○正德未中刻、筋違橋内出火、至通町、本町、日本橋中橋、靈岸島八町堀

邊燒失、日本橋松平大炊頭吉邦亭災。

——萬年記

一、十二月十一日、元○正德

關都時代ノ火災



未中刻神田小柳町出火に付、増火消大名十六人被仰付、御奉書出、本番春日内藏允組勤之。

—御徒方萬年記

一、同年○正徳元年十二月十一日未ノ中刻、神田連雀町肴店出火、小柳町火元之由、本町、石町、白銀町、駿河町邊、常盤橋御門前、八町堀之方迄燒ル。尤夜中燒ル。

—年代炎上鑑

十二月十一日○正徳元年申刻、連雀町より出火、乾の風烈しく、通町、本銀町、本町、石町四丁目まで、西は御堀端まで、一石橋、日本橋燒落、靈巖島まで燒拔、同日夜寅刻火鎮る。按ずるに此時、連雀町ハ、須田町續にあり。

—武江年表○續日本王代一覽同。

此外月堂見聞集ノ類略ス。

〔附記〕 柳營日次記ニ、

廿八日○正徳元年十二月。

一、寅ノ刻、元松平越後守上ケ屋敷之内より出火、家屋少々燒失、卯後刻火鎮付る、増火消被仰付、翼、御老中より以奉書傳之。

蜂須賀飛騨守

鍋島紀伊守

年代炎上鑑ニハ、同年○正徳元年十二月廿七日寅ノ刻、越後屋敷出火、夜明ひて消ス。火元竹井宗休之由ト有リ。

正徳二年正月火災

一、正月廿六日○正徳二年。

未中刻、芝邊出火ニ付、増火消大名衆四人被仰付、御奉書出。御使本御番中山權兵衛組勤之○萬年記ニハ、廿六日未下刻、芝三田出火、類燒多。ト見ユ。

—御徒方萬年記

正徳二年二月八日火災

正徳二年壬辰○紀元二二七二年二月八日辛酉○辛酉三正綜覽淺草花川戸○市内出

二月廿三日火災

火、火焰川ヲ越テ本所四ツ目○市内マテ延燒ス。○柳營日次記廿三日

二月廿五日火災

丙子○正徳二年紀元二二七二年新材木町○市内日出火シ、靈巖島○市内二

十二月朔日火災

燒及ス。○柳營日次記廿五日戊寅○正徳二年紀元二二七二年神田四軒町○市内

正徳二年二月八日火災

火有リ、延燒若干也。○基熙公記十二月朔日庚戌○正徳二年紀元二二七二年

下谷○市内火有リ、延テ元誓願寺前○市内マテヲ燒ク。○萬年方記

正徳二年火災 重ナル者四回。

一、二月八日火災

ハ、

八日○正徳二年

午之下刻、淺草花川戸より出火、風烈故、同所材木町、並木町邊より、本所中之郷

翻都時代ノ火災

正徳二年火災事蹟  
二月八日

正徳二年火災事蹟  
二月廿五日

正徳二年火災事蹟  
二月廿三日

正徳二年火災事蹟  
二月八日



へ火移り、石原邊割下水通、報恩寺前、吉田町、吉岡町、鐘撞堂邊、新坂町三ツ目通、花町、菊川町、深川西町より松代町、猿江町、水戸中納言殿○徳川綱條、藏屋敷邊、遠山七之丞下屋敷邊迄焼失、及酉刻火鎮。

右ニ付、増火消被仰付面々、

戸澤上總介○正徳、松平周防守○康、井伊兵部少輔○直、池田内匠頭○政、伊達

左京亮○村、本多信濃守○忠

○正徳二年

二月八日辛酉

天風猛烈、未刻淺草二王門内家裏出火、只不及近邊、直越河、本庄既

大火、定る及二三町歟、不便々々、

一、二月八日○正徳二年

——基熙公記○編年史料收

午之刻、淺艸筋出火ニ付、増火消大名衆六人被仰付、御奉書使本御番江原與右衛門組、長谷川半四郎組相越。

——御徒方萬年記

二月八日○正徳二年

午の上刻、江戸淺草觀音堂表町家より出火、花川堂町へ焼出、

並木町片側駒形堂迄焼失、夫より川向へ飛、本庄中郷通へ焼廣がり、龜井戸邊報恩寺前、不殘燒、夫より段々燒廣がり、三ツ目四ツ目燒通り、中川の邊迄燒、南の方深川へ焼出申ハ。凡横二三十町長三里餘燒申ハ。——月堂見聞集

八日○正徳二年、淺艸寺門前出火、移川向、南北本所大半燒亡、御家人宅二百八十餘軒、寺三十五箇所云々、——萬年記

一、同年○正徳二年、二月八日、江戸大火、淺草觀音裏町出火、本所四ツ目迄燒ル、横

三十町、長三里餘、——年代炎上鑑

二、二月廿三日火災、ハ、

廿三日○正徳二年

二月廿三日○正徳二年

申刻、新材木町出火、風烈ニ付、葺屋町、堀江六軒町、新道、大坂丁、甚左衛門

丁、小網町、横丁、同三丁目より箱崎丁、北新堀、南新堀二丁目、靈巖島四日市、同

鹽町、北新堀、大川端迄燒失、及酉下刻、鎮。

増火消、稻葉伊與守、松平主殿頭、小出信濃守、——柳營日次記

一、二月廿三日○正徳二年

申上刻、乗物町出火、増火消、大名衆三人被仰付、本御番林藤四郎組、御奉書御

使相越ス、——御徒方萬年記

二月廿三日○正徳二年

天晴、夜來風烈、申刻出火、雖不近所、令用意、無程及大火、

日沒消了、凡五町四方許云々、旅館丑寅方也、——基熙公記○編年史料收

關都時代ノ火災



二月廿三日正德二年申刻、江戸堀江町三丁目より出火、堺町、靈岸島迄焼貫申ひ。殊外大風にて、尤北西風にて、堺町芝居不焼、ふきや町、大坂町、しや町、甚右衛門町、夫よりこあみ町一丁目二丁目三丁目焼出、夫より箱崎町、北新堀不焼、永代橋迄不焼、やけ、南新堀中程へ飛火致ひへ共、大川ばた新川迄焼申ひ。火元より焼とまりまで五六十町計、堺町芝居にて、大分人焼死申ひ。酉の下一刻に焼留る。同夜戌の刻より、新橋近所より出火、北西大風にて品川邊へ焼出申ひ。

——月堂見聞集

三、二月廿五日火災

二月廿四日正德二年夜七ツ過、江戸神田四間町より出火、美川町、新白銀町、きじ町、皆川町、以上三町に六丁程、翌廿五日朝五ツ前に焼留。

——月堂見聞集年代炎鑑略同。

二十五日戊寅正德二年天晴、午後風烈、及夜猶烈、天陰夜半後雨下。曉寅半出火之由、貞松告之。乍驚開戸見之、旅館此方既大火也。仍著烏帽子小直衣袴、世間騒動、彌及大火。此風聊吹、烟如覆旅館。自御臺三用人其外人數多給之。又爲大樹御内意、早可登城旨也。旅館未危急、猶豫之處、用人等頻申聞登城。貞松尼女中等以上

五人自跡來。旅館火消人數三頭上屋。風聊靜、火行丑寅、不慮通難、及辰半刻、火消了。委事追而可注之。可謂冥助。留守中來者不遑注云々。余於城内意靜、令言談、戊半刻歸旅館了。

大樹今日令參詣根津權現給。已半刻令出給、午刻過御歸城。其後早速御對談、今日御參詣雖可過神田給之處、火事以後、類燒之輩等在護持院邊、不及之一橋より令參詣旨、有御命、慈眠之至也。觸事只恩惠而已、珍重々々。

廿六日己卯天宿雨已半刻屢霽。今日火消役人十組與力以下、一々被下御褒美云々。

——基熙公記編年史料收。

〔附記〕

四月廿四日正德二年江戸木挽町三丁目より出火、凡五町四方程類燒仕ひ。

——月堂見聞集

四、十二月朔日火災

朔日正德二年子刻、下谷岩城伊豫守宅出火、筋違橋和泉橋、元誓願寺前焼失。

代炎上鑑、下谷邊大火、有り。

——萬年記

關都時代ノ火災



一、十二月朔日○正德二年之夜、下谷出火之節、増火消、

松平伊豆守 蜂須賀飛驒守 龜井隱岐守

相良近江守 安部攝津守 天享吾妻鑑

一、十二月朔日○正德二年

亥之後刻、岩城伊豫守屋敷ハ出火ニ付、増火消大名五人被仰付、御奉書出、御使  
『本御番佐々木五郎左衛門組勤之。』  
——御徒方萬年記

〔附記〕 御徒方萬年記ニ、

一、十二月五日○正德二年、

今曉寅中刻、芝神明前出火ニ付、増火消大名六人被仰付、御奉書出、御使本明中山主  
水組勤之。  
——御徒方萬年記

三年癸巳○正德三年三月十六日癸巳○正德三年下谷御徒町○市火

ヲ失シ、金杉町○市ニ延燒ス。○柳營十二月廿一日甲午○正德三年火

及フ。○年廿一日乙未○正德三年下谷屏風坂下○市出

及フ。○年廿一日乙未○正德三年下谷屏風坂下○市出

正德二年  
十二月五日  
日火災

附記

正德三年火  
災

三月十六  
日火災

十二月廿  
一日火災

十二月廿  
二日火災

火、靈巖島○市永代橋○市邊マテ延燒シ、河東回向院六間堀○市  
邊ニ達ス。○年江年表續日本王代一覽。○武

正德三年火災 左ノ如シ。

一、三月十六日火災 ハ、

十六日○正德三年

一、申中刻、下谷御徒町○市失火、子中刻金杉丁○市ニ鎮ル。○同

日江戸下谷五軒町にて○同柳營日次記

廿六町程燒失○同

一、三月十六日○正德三年申ノ中刻過、下谷長者町ハ出火ニ付、大名衆四人ハ増火消被仰付、御奉書御使

本御番柴田三左衛門組ハ兩人ハツ、出ル。——御徒方萬年記

十六日○正德三年申中刻、下谷御徒町出火、至子刻、金杉三枚橋廣德寺前燒失、加

藤遠江守泰恒亭災。——萬年記

〔附記〕

一、五月二日○正德三年、

亥ノ刻、富坂ハ出火ニ付、大名衆二軒ハ増火消被仰付、本御番江原與右衛門組御奉

霸都時代ノ火災

正德三年火  
災事蹟  
三月十六  
日火災

附記

正德三年  
五月後火  
災



書御使出ル(○)柳營日次記「二日亥刻、小石川上富坂町出火、子刻上餅差町ニ奉火鎮。」  
天享吾妻鑑「同日上餅屋町。○上餅出火、屋布五六軒、町一町餘焼失。」

五日(○)正徳三年六月。子刻、新大橋前(濱町)三浦肥後守宅出火、隣家災。  
——御徒方萬年記

同(○)正徳三年九月。廿三日夜四ツ過比江戸室町三丁目東浦浮世小路角、桐山三了  
と申薬店より出火、表側南の方へ二十間計焼、裏行も二十間の所にて一軒程焼、瀬  
戸物町裏行も、通かし端迄焼、九ツ時分に火留る。  
——月堂見聞集

一、十二月十三日(○)正徳三年。  
夜丑刻元天龍寺前出火ニ付、増火消大名二軒ニ之御奉書御使出ル。  
——御徒方萬年記

十二月廿一日火災

二、十二月廿一日火災ハ、

一、十二月廿一日○正徳三年。

夜子之刻、水道町々出火ニ付、増火消大名五軒ニ之御奉書御使出ル。  
——御徒方萬年記

一、同年○正徳三年。十二月廿一日夜子ノ刻、改代町々出火、小日向牛天神下百間長  
屋際隆慶橋之東堀端まで焼る。又曰、此出火、音羽町八丁目火元の由申ル。

年代炎上鑑

月堂見聞集ニハ「一、極月○正徳三年。廿一日夜子の刻、護國寺音羽町九丁目より出火

にて、幅一町程、長さ水戸殿百間長屋まで十町餘焼、明方とまる」ト見ユ。

十二月廿二日火災

三、十二月廿二日火災ハ、

一、十二月廿二日○正徳三年。日帳之内記有之。  
辰之下刻、下谷池之端々出火ニ付、増火消大名拾壹軒ニ之御奉書御使出ル。  
——御徒方萬年記

御徒方萬年記

一、同年○正徳三年。十二月廿二日辰下刻より、下谷榊原式部大輔殿御屋敷表門前町稻荷  
近所より出火、折節西大風にて、下谷池端上野仁王門を限り、湯島天神前へ焼  
出、下谷廣小路、柳原不殘燒、藤堂和泉守殿○高敏。立花飛驒守殿○鑑。加藤内藏殿。  
津輕越中守殿○七左守。宗對馬守殿○方。越前兵部殿、夫より淺草へ焼出、酒井  
左衛門殿○忠。屋敷加賀町御藏前不殘燒、夫より本庄へ飛火にて、回向院前御  
材木藏、一ツ目、二ツ目、三ツ目、四ツ目、不殘燒、夫より深川六間堀へ焼出、靈巖寺。  
法禪寺やけ、深川八幡堂、三十三間堂町家不殘やけ、永代橋迄やけ、又跡しき  
り火にて、柳原いづみどの橋焼落、極甲斐守殿屋敷、柳原豊島町新屋敷、社

瀬都時代ノ火災



枝町馬喰町小傳馬町大傳馬町大門通堺町大坂町濱町富澤町堀江町和泉町  
 小舟町小あみ町何も焼貫永井播摩守殿亮直三浦備後守喬明中山勘解由殿  
 本多淡路守殿戸田能登守直堀田伊豆守虎正加藤遠江守恒泰佐竹右京殿  
大膳夫義格敷中根攝津守凡大名屋敷卅軒餘小名旗本衆大分にて幅卅町に長さ  
 四里程の積りにて申の下刻火留る町敷に積りては二百五十町程竈敷は  
 大分の事にて積りがたし此以後少々の出火在之に共早速静りぬ

月堂見聞集

正徳三癸巳年十二月廿二日

山方介右衛門憲虎處持八島小右衛門朝見御用人勤中日記

一、北西風強し朝五ツ半過池端榊原式部大輔様邦政表御門前萱町出火及  
 大火東叡山下廣小路三枚橋御徒町加藤遠江守様後通々藤堂備前守様高  
 堅御中屋敷表御長屋半分御上屋敷前通松平下總守様忠忠々浅草御藏衆  
 猿屋町浅草御藏前萱町通浅草見附切御門前迄是火飛越横山町濱町通  
 小あみ町江戸橋切池端南之方天神下通廣小路岩城伊豫守様隆秀御屋敷  
 邊和泉橋燒落土手之内本誓願寺前小傳馬町四丁目切之濱町迄之内不殘  
 燒浅草萱町大川を吹越火飛無縁寺前町屋々二ツ目通直深川高橋邊燒

通八幡町すさき燒ぬけ但八幡宮三十三間堂無異事此方南之内不殘類燒  
 申ぬ

一、今日之出火御上屋敷下谷七軒町御類燒表御長屋表御門表御本屋之分相殘  
 内御長屋共御屋敷南之方不殘類燒北之方藤堂備前守様御屋敷并ニ有之  
 御長屋奥御殿後御婚禮御用之御普請有之御番所御客之間等ハ類燒御寄  
 附之邊御座之間迄ハ御屋根ふき不申内故無異事東御門迄無異事浅草御  
 屋敷鳥越御中屋敷ハ智清院様御家を始惣無殘類燒深川御抱屋敷此節式  
 部少輔義都様被成御座ハ是又無殘類燒鳥越御屋敷となり西御屋敷と云此  
 節壹岐守様義長佐竹に御借被成此御小人等も被差置求馬様義峰佐竹之被成  
 御座是も類燒壹岐守様御屋敷者新橋通ニ有之是も類燒有之也  
 一、壹岐守様ハ御類燒以後割下水御屋敷に被爲入  
 一、式部様ハ本庄石原之内東江寺天台御借被成御座ハ  
 一、智清院様順姫様ハ橋場總泉寺迄御退被成ハ處鳥越御屋敷類燒之段注  
 進ニ付直ニ新堀御抱屋敷御殿に被爲入上々様御機嫌能御立退被遊ハ御  
 家中末々迄無異事併御會所御使番彌七申者御上屋敷井に入死ス



一、出火之刻御留守御家老梅澤藤太夫御番頭白川七郎兵衛御本方奉行根元庄右衛門御用人八島小右衛門田中勘兵衛御物頭山方小左大越長右衛門御留守居白土嘉右衛門大島助太夫御徒頭小野崎七右衛門御納戸役眞崎新左衛門御目付根岸惣内長山八郎兵衛此外勤番之面々上御屋敷鳥越御屋敷等防ひ得共大燒無其儀。

同廿三日

一、御留守居大島助太夫土屋相模守様に自分之御届ニ參上申上ひハ、昨日之出火ニ大膳大夫上屋敷中屋敷鳥越屋敷深川抱屋敷四箇所類燒仕ひ。

——國典類抄久保田藩

此年○正徳元年。十二月廿二日、不忍池のほとりより火出つ、西北の風烈しく、延燒數萬家におよべり。はじめ丁酉○明暦三年の大火の後、此災しばしば起て、此災にかゝる事、十數度に至れる町々ありて、人々其所をやすくせず、これらにくはふるに、そのたびには萬物の價騰り貴くして、その禍の及ぶ所もひろければ、いかにもして此災除かれん事を議し申すべしと仰下さる。人々にも此事問はせ給ふべき御事勿論なり。まづ某○新井君美が議をも奉るべしと

て、當時此災の起る事、天の道にかゝれるもの四つ、地の勢によれるもの二つ、人の事にあつかれるもの四つ、火を防ぐの法其道を得ざるもの五つ、すべて十五條を議してまゐらす。此議草なほあり、あはせ見るべし。町奉行并に火消の人々にも議せしめられしに、おの／＼申す所其理を盡せし事とも見えず、たゞ白銀町の堤を増し築かるべしといふ事は、人々の議合へり。某が議せし事にも、これに似たる事はあれど、人々の議には同じからず、されど人々の議によられて、彼堤を増し築くべき事を仰下されて、某が議せし事ども、いまだ擧用ひらるゝにもおよばで、御他界○徳川家宣薨去ありけり。

——折たく柴の記

廿二日○正徳三年十二月。辰下刻、池端出火、風烈、至湯島下谷、淺草、柳原、元誓願寺前、傳馬町、谷藏、濱町、堺町、小網町、本所、深川、燒亡。藤堂和泉守、宗對馬守、其外大小名之家宅多災失。及丑刻消。

——萬年記

一、同年○正徳三年。十二月廿二日辰ノ刻、西北大風、下谷屏風坂下々出火、御徒町迄、御鳥見町、佐竹大膳大夫屋敷、少淺草御藏之南川端通、藤堂和泉守屋敷邊、柳原向柳原、元誓願寺前通り、横山町兩國橋邊、傳馬町通り、新乗物町、泉町、堺町、難波町、住吉町、濱町邊不殘、富澤町邊、水野隼人正近邊、新大橋本所一ツ目通り川端

霸都時代ノ火災

五七九



不殘、兩國橋壹町程も北へ燒、回向院燒失、深川中、御船藏へ残り、六間堀邊、靈岸島、永代橋、小網町、箱崎町不殘、燒暮六ツ時火鎮ル。

——年代炎上鑑

十二月廿二日三〇正徳朝五ツ半時池の端茅町より出火、北風強、大火となる。

——續談海

續日本王代一覽ニハ、同年〇正徳三廿二日辰刻ヨリ、江戸下谷池ノ端大火、千三百餘軒燒失ス、夜丑刻ニ火消タリ。ト見ユ。武江年表ハ、下谷より出火、下谷淺草邊燒亡夥シ。ト爲ス。

〔附記〕

正徳三年  
火災

今年(〇正徳三年)深川三十三間堂燒亡、同六年再建あり。

——武江年表

正徳四年火災

正月十一日火災

十月廿日火災  
十一月廿五日火災

四年甲午二〇正徳四正月十一日甲寅正〇甲寅、三小日向馬場際内〇市出火、牛込左内坂上牛〇市内マテ延燒ス。炎上鑑同夜七〇正徳三別ニ下谷金杉内〇市ニ發シタル者、燒ケテ淺草聖天町淺草區ニ達ス。炎上鑑十月廿日戊子四〇正徳四根津社前水戸侯下邸ニ出火シタル者、湯島天神下内〇市ニ延燒ス。日次記十一月廿五日癸亥

川〇正徳四北本所石原内〇市火ヲ失ス、延燒深川森下町内〇市ニ及フ。〇柳營日次記

正徳四年火災 稍重ナル者ヲ舉クレハ、左ノ如シ。  
一、正月十一日火災 ハ、  
一、正月十一日四〇正徳

午上刻、牛込赤城下町家々出火ニ付、増火消大名五人被仰付、御奉書出、本御番建部甚右衛門組御徒勤之。

——御徒方萬年記

一、正徳四甲午歲正月十一日午ノ刻、西北大風之布、小日向馬場際方出火、醫師火元之由、小日向赤城ら店邊、水野土佐守後、左内坂上火消屋敷後隣邊迄燒ル。土佐守并火消屋しき、田町御堀端之町ハ殘ル。〇月堂見開集ニハ、同並木明神下より出火、折節風少々在リ、市谷長圓寺迄燒失ス。

一、同夜亥ノ刻過、下谷金杉之末宗對馬守下屋敷方出火、淺草聖天町まで燒。月〇堂見開集ニハ、同夜〇正徳四殿下屋敷より出火、任、早速靜る所に、又々もえ出、明け方迄餘程燒。ト有リ。

——年代炎上鑑

中邑世紀秘説午〇正徳 正月十一日、赤坂〇城下方出火、寶泉寺類燒。ト記ス者、亦〇霸都時代ノ火災

正徳四年火災  
正月十一日火災



十月廿日  
火災

此災ヲ指ス乎。

二、十月廿日火災 八、

廿日○正徳四年  
十月○中略。

今酉刻、根津前水黄門○徳川綱條。下屋敷々出火、湯島天神下にて鎮。

——柳營日記

江戸より申來。

一、十月十九日○正徳四年。夜八ツ時、藥程地震仕ハ。廿日朝より、北風強、暮六ツ過に

根津茶屋町より出火在之、右の風故、池の端邊より天神裏門下迄焼失す。五ツ

半時に火静りハ由。上野へ參ハ道筋へは、火出不申ハ。石川宗十郎殿○總御屋敷。

敷、天神の下の方少々焼。榊原式部殿○政藤枝若狭守殿、松平長門守殿○前田利興。

御類焼。

——月堂見聞集

三、十一月廿五日火災 八、

廿五日○正徳四年十  
一月○中略。

一、今午下刻、北本所石原より失火、申下刻、深川森下町ニ火鎮。

——柳營日記

十一月廿  
五日火災

十一月廿五日○正徳四年。午刻、江戸本庄石原辨天の前より出火し、西北風にて屋敷段々焼通り、二ツ目中山勘解由殿屋敷焼、夫より深川戸田山城守殿下屋敷表門限に火留り申ハ。幅二丁長さ廿四五丁程也。申の刻に静り申ハ。

——月堂見聞集

年代炎上鑑ニモ十一月廿五日○正徳四年。ノ條、未ノ刻西北大風、本所石原より出火、

二ツ目三ツ目深川之方迄焼ルト見ユ。

五年乙未○正徳紀元  
二三七五年。正月五日壬寅○壬寅三  
正綜覽。馬喰町○市内日  
本橋區。出火、燒

ケテ兩國橋・大橋邊○市内  
内。ニ及フ。○月堂見聞集、年  
代炎上鑑、續談海。

正徳五年火災 八、

正月五日○正徳五年。巳下刻、江戸馬喰町一丁目北側後岩井町より出火の折節、西

北風にて段々南へ焼通り、東は馬喰町三丁目西角迄、南は新大橋迄、幅三町に長さ貳十町程、未の刻に火留る。  
——月堂見聞集○年代炎  
上鑑略。

五日○正徳五年。巳後刻、馬喰町近所出火、淺草橋内元谷藏濱町邊類焼。土屋相模守直○政水野出羽守周○忠牧野備後守央○成其餘武家宅商家多焼失。相模守備後  
守非居住之

霸都時代ノ火災

五八三

正徳五年火  
災

正徳五年火  
災事蹟



續談海ニハ晝時馬喰勞町鑑純屋より出火、風烈、大火事ト成ル。下有リ。有章院殿御實紀ニハ五日。正徳五年。龜井町より火おこり、濱町にいたる。青山因幡守忠重板倉近江守重治鍋島加賀守直英相馬讚岐守尊胤火消命せられ、本多遠江守正武永井伊豆守直陳も、更に仰承はり、兩國橋の火を防く。日記ト記ス。

附記

正徳五年三月後火災

三月廿六日(○正徳五年)朝七ツ時、江戸田所町なべいなりの新道より出火、長谷川町のり物町・人形町・和泉町不殘燒、濱町上手にて、道幅五町程に成。同六ツ時火留る。

霜月廿三日(○正徳五年)夜、江戸下谷藤堂和泉守殿御中屋敷出火、八十三軒之長屋燒失。

享保元年火災

正月元日火災  
正月十一日火災  
正月十八日火災

六年丙申(○正徳○七月朔日改元、享保元年(紀元二三七六年))正月元日癸巳(○正徳巳、三

町)火有り、延燒木挽町(○京橋區)ニ至ル。公記。續談海。御徒方萬年記。基淵

癸卯(○正徳六年(紀元二三七六)年)正月○癸卯、三正綜覽。湯島無縁坂(○本郷區)出火、延燒シテ靈巖島

(○京橋區)ニ達ス。○柳營日次記。月堂見聞集。一十八日庚戌(○正徳六年(紀元二三七六)年)正月○庚戌、三正綜覽。

ニハ、築地(○京橋區)ニ火有り。○正徳六年日記。月堂見聞集。續談海。淺草諏訪町(○市)火ヲ失シ、

飛テ本所深川(○市)ヲ燒ク。○正徳六年日記。基淵公記。月堂見聞集。續談海。廿九日辛酉(○正徳六年(紀元二三七六)年)正月○辛酉、三正綜覽。豐島町(○市)出火、大川端(○市)マテ延燒ス。○月堂見聞集。一

二月七日戊辰(○正徳六年(紀元二三七六)年)○戊辰、三正綜覽。本郷六丁目(○市)火ヲ失シ、四丁

目三丁目(○市)丸山(○市)邊ヲ類燒シ、○月堂見聞集。續談海。一話一言。十四日乙亥

(○正徳六年(紀元二三七六)年)○乙亥、三正綜覽。日本橋通(○市)邊出火シテ、廿四五町ヲ燒ク。○月

堂見聞集。一話一言。廿二日癸未(○正徳六年(紀元二三七六)年)○癸未、三正綜覽。南鍛冶町新道(○市)火

ヲ失シ、亦傍近ヲ延燒ス。○月堂見聞集。一話一言。享保元年丙申(○紀元二三七六)年)十二月

十六日壬寅(○正徳六年(紀元二三七六)年)○壬寅、三正綜覽。ニハ、橘町(○市)ニ火有り、延燒永代橋(○市)ニ

至ル。○月堂見聞集。御徒方萬年記。廿五日辛亥(○享保元年(紀元二三七六)年)○辛亥、三正綜覽。駿河臺(○市)出

火シ、湯島天神(○市)邊ニ延燒ス。○月堂見聞集。有德院殿御實紀。

享保元年火災 正徳六年即享保元年正二月ハ、江戸ニ於テ火災極メテ頻繁ナル者有リタリ。正月元日ノ火災ヲ始トシテ、二月末ニ及ヒ、其重ナル者ノミニテ

享保元年火災

十二月廿五日火災

十二月十六日火災

二月廿二日火災

二月十四日火災

二月七日火災

正月廿九日火災



モ數回有リ。

一、正月元日火災 八、

十二月晦日○正徳五年。

夜丑刻、吳服橋之内大名小路本多中務大輔屋敷出火、鍛冶橋通山下御門内大名小路屋敷多焼失、京橋近邊山下町、木挽町、芝口御門外に至り、翌日未刻鎮ル。

——正徳日記

一、十二月晦日○正徳五年。

夜八ツ時過、大名小路出火之付、大名三軒に之御奉書出、當番御徒持參之。

本書是者御側御用人本多中務大輔殿屋敷火元之、大名小路大火、翌申ノ元日

ニ至ル。翌元日又増火消被仰付タリ。此外大名衆に御奉書出ハ哉、是ノ末日

記不見、故難知。

一、正月元日○享保元年。

一、前夜々大名小路出火之付、増火消金森出雲守に御奉書出。本番高田忠右衛門組御徒勤之。

本書此火事者、昨大晦日夜丑刻、本多中務大輔殿居屋敷出火、大名小路及大火、増

正月元日  
火災

火消大名衆追々被仰付、御奉書出。尙又今朝金森家に被仰付如此。

——御徒方萬年記

此年○正徳五年。もすでに暮れて、十二月晦日の夜半ばかりに、忠良朝臣○本の家より火發して、延焼の家も多く、忠良の家は、大名小路近き所の角に、明れば丙申○正徳六年。の春正月元日の巳時の終まで、火消る事もなし。火消しぬべきよそほひせしものども、ゑぼうしひたれせし人と行かふさま、けしかる事共なりけり。十一日にもまた火發して、延焼多かる中に、獄舎もやけうせて、禁獄のものどもあまたにげうせたり。

——折たく柴の記

一、朔日○正徳六年。日和夕邊より火事、明けがた迄もえ、鍛冶町南側家中焼申。南側福田屋市郎兵衛家のやねにも、飯田町定火消溝口式部消口取被申。横町釘屋長左衛門家の角池田屋のやねをば、ひぢ方民部消し被申。火しづまりて、道具杯運びもどし、一日骨折はたらき申。

——一話一言

晦日○正徳五年。十二月。丑刻龍ノ口近所本多中務大輔忠良亭出火、松平丹波守○池田鑑政、松平大炊頭○利貴、松平伊賀守○周、松平右近將監○清武、松平土佐守○山内、松平淡路守○蜂須賀綱矩、井伊兵部少輔○直、松平和泉守○乘。

五八七

霸都時代ノ火災



牧野備後守央○成。秋元伊賀守房○喬。石川近江守茂○總。松平主殿頭雄○忠。青山大膳亮秀○幸。町奉行三人之登野壹岐守坪内能。役屋敷等類燒鍛冶橋内外、數奇屋橋日比谷門芝口門内、高家數十町災。紀伊國橋燒落。及翌申元日已刻消。今年自初冬至歲暮、天氣和順、風不利、雨雪隨時下、無火災、人大歡樂、近年未有之。然今夜及元旦大火、多日之安心忽變。自是後、火難繁多、貴賤暫無安堵、思至令月不知春光來矣。

——萬年記

朔日年○享保元晴。

一、除夜子刻、本多中書殿上屋敷ヨリ出火、今未ノ刻火消。壽量院殿井上玄徹老奥方、當院に避來。

——金地院記錄

正月朔日元年○享保。曉丑之刻ヨリ、江戸大名小路本多中務大輔忠良朝臣下總古河城主邸ヨリ出火、段々及大火、本町迄燒拔、木挽町四丁目迄燒失。二日已刻鎮火。

——政鄰記

大名坊前邸

享保元年正月朔ノ曉、本多中務大輔忠良ノ邸前邸北隣、御老中屋敷、ヨリ火起、今酒井若狹守ノ邸、此邸忽チ類燒ス。榮光院殿火ヲ山王ニ避タマヒ、程ナク本邸ノ内廳ニ歸ラ

セラル。

——備藩邸考

十二月晦日五年○正徳。江戸御上屋鋪類燒。大名小路本多中務大輔様ヨリ出火。

——御當家年代略記○高知藩

一、同年五年○正徳。十二月晦日、從本多中務大輔殿忠良邸出火、鍛冶橋御屋敷御類燒。翌二日以上使御使番倉橋内匠之助殿御尋有之。但櫻田御邸に。

——御家年歴略記○津藩

十二月晦日五年○正徳。鍛冶橋官邸、罹池魚之災。於是避居芝邸即日上聞朝廷以行。人井上左門吊焉。——渭水見聞錄○德島藩

一、正月朔日元年○享保。本多中務様御屋敷出火、大名小路類燒。

——中邑世紀祕說

基熙公記○編年史料。ニハ「正月六日戊戌天晴、陰、入夜雨聊下。關東大名屋敷及數十字燒亡云々、城近邊云々、舊臘晦日曉云々。」ト記シ、月堂見聞集ハ「極月晦日五年○正徳。夜丑上刻、大名小路細川越中守殿表御門の向、本多中務太輔殿御屋敷より出火、北大風にて南へ燒、東土手限、松平丹波守殿、中山出雲守殿、松平越後守殿、坪内能登守殿、大名小路西側は残り、東側は不殘燒。松平伊豆守殿御向屋敷は燒、本屋敷は殘



る。酒井左衛門殿元屋敷迄也。土井周防守殿松平伊賀守殿松平右近將監殿。土手通り數寄屋橋迄。松平土佐守殿松平淡路守殿井伊兵部少輔殿松平壹岐守殿。是より少々東風に替り、溝口伯耆守殿松平左衛門督殿南の長屋限り。牧野備後守殿秋元伊賀守殿石川近江守殿松平主殿頭殿青山大膳亮殿。西は日比谷御門迄。是より前方鍛冶橋より外町屋へ飛火仕。五郎兵衛町鍛冶町中通りより西疊町通り町迄焼出。京橋川通り町より西は不殘。東側橋より北は残り、橋より南、西はすきやがし不殘。東は金六町中程迄。南は卅間堀不殘。川東は木挽町紀州様御屋敷伊達宮内殿屋敷。東の川切。是より南へ木挽町芝居。西はすきやばし川通、八貫町迄。幅東西、右之通新橋へ向焼申。銀座四丁目弓町尾張町木挽町四丁目迄。芝居殘る。築地の本願寺も殘る。凡幅六町に長さ五十六町餘。所により廣狹有之。いへ共、大概如斯し。大名屋敷數十九箇所、奉行所屋敷三箇所、町數八十四町也。ト爲ス。續談海ニモ、正徳六丙申年正月元日晴天、今晚辰之口本多中務太輔上屋敷出火、北風くる、芝口御門迄類火ニ大名十八軒、町奉行役屋敷三間、共ニ類火、元日晝九時鎮ル。中務太輔遠慮、此節落書、未申火事はまことに辰の口、うそじや御座らぬ本多中務。ト見ユ。此外年代炎上鑑續日本王代一覽、武江年表ノ類ニモ見ユ

レト、今略ス。

〔參考〕 柳營日次記ニ、

二日(○正徳六年正月○中略。)

上使御使番倉橋内匠  
松平越後守

居屋敷類焼に付、被遺之。

上使御使番井上左衛  
松平淡路守

〔附記〕

一、正月十日(○正徳六年)夜、小石川大塚と申所出火仕。又内藤宿と申處出火、大方焼失仕。又赤坂と申所より出火仕。且又餘程之大火にて御座。——月堂見聞集

正月十一日(○正徳六年)昨夜、集鴨大原町より出火、二町程類火。今曉四ツ谷新宿町兩かは不殘焼失。——續談海

二、正月十一日火災

十一日 正徳六年正月○中略。

一、夜酉刻、下谷池端湯島無縁坂出火、湯島神田下谷邊、柳原本町、傳馬町、堺町、茅場町、八丁堀、靈巖島焼失。御舟手向井將監御役屋敷も火鎮。

一、大明院宮公辨法親王。以上使御使番日下部作十郎是住居近邊火事付而也。

霸都時代ノ火災

附記

正徳六年  
正月火災

正月十一  
日火災



一、火事場に森川出羽守御目付丸毛五郎兵衛御使番井上左衛門、爲見分罷越。  
一、昌平橋之内風下を危れ付、大久保加賀守○忠罷出可防旨、從火事場出羽  
守○森川以五郎兵衛申遣ス。  
——柳營日記

一、正月十一日○享保元年

同夜酉刻過、下谷池之端茅町を出火、及大火増火消大名衆拾壹人被仰付、御奉  
書出。御使本番小笠原平兵衛組御徒勤之。

一、正月十二日

午中刻、下谷池之端榊原式部大輔○政屋敷を出火ニ付、増火消大名衆三箇所  
に御奉書出、御使本番飯河善左衛門組御徒勤之。  
——御徒方萬年記

十一日○享保元年酉刻過、無縁坂下茅町を出火、榊原式部大輔殿中邸類焼、大風

烈火、天神明神前後、柳原本町鍋町中橋迄焼拔、今一口ハ境町筋靈岸島八丁堀  
に焼拔、十二日卯下刻鎮火。同日巳中刻、右榊原殿邸焼殘之下小屋を出火、不殘  
焼失、未刻鎮火。類焼ハ無之。附、今日江戸度々之火災也。  
——政鄰記

正月十一日○正徳六年酉之下刻、下谷榊原式部大輔殿御屋敷近所無名坂ノ邊之

寺を出火仕仕。折節西北風強ク、式部殿御屋敷不殘、天神切通ノ邊、町家天神宮

不殘、湯島通へ出、明神ハ殘る。夫より聖堂ノ邊、町家不殘。但シ聖堂ハ殘ル。本多  
信濃守殿御屋敷、東へ黒門通半程迄、夫より筋違橋見付之通へ飛火仕仕る。元  
誓願寺、神田町家新屋敷不殘、須田町三河町焼失。西ハ神田橋ノ邊迄、白銀町壹  
丁、貳丁、三丁、四丁、岩付町、藥師前、右町壹丁、貳丁、三丁、四丁、本兩替町、駿河町、瀬戸  
物町、さや町、品川町、小田原町、鐵炮町、小傳馬二丁目、三丁目、大傳馬町二丁目、三丁  
油町、小あみ町、三丁目迄、乗物町、堺町へつかし、新同心町迄、いせ町、本材木町、  
かやば町、北八丁堀、根津權現旅所此間ノ町家不殘。日本橋半燒、東ハ大門通由  
所町、新材木町、堀江町、小船町、富澤町、長谷川町、かたにはし迄、夫を靈岸島丸太  
河岸、本八丁堀、松平兵部殿御屋敷焼、深川鐵炮洲迄、稻荷ハ殘る。十二日朝巳ノ  
刻ニ火留る。  
——月堂見聞集

一、十一日○正徳六年日和風吹申。夜五ツ前、谷中池の端榊原式部守屋敷表門  
脇を火出、池の端通を南へ、神田、白銀町、本町、右町不殘、河岸を吳服御用後藤縫  
殿介家通り、ぬし町、釘店通り、大傳馬町、伊勢町、堀江町、小網町、堺町通り、不殘、燒  
失いたし、靈岸島、永久橋向、北南殘申。濱丁、東横丁通りを、北八丁堀、五丁目へ  
かゝり、靈岸島向燒失、日本橋、東南茶碗店を、通三丁目、雲切散目、藥屋の角迄燒



此所木挽町定火消松平駿河守様消口取申<sub>レ</sub>。其方萬町横丁通り不殘燒本材木町四丁目迄燒失。松平因幡守様<sub>○</sub>定<sub>○</sub>やしき南表長屋片側不殘燒失。此通りはかや場町向心丁通り、九鬼大隅守様<sub>○</sub>隆<sub>○</sub>屋敷通り燒來り、本多遠江守様<sub>○</sub>武<sub>○</sub>屋敷殘り、是よりはすなりに北八丁堀へ燒出申<sub>レ</sub>。——一話一言

此外有章院殿御實紀萬年記續談海年代炎上鑑續日本王代一覽武江年表ノ類略ス。

〔參考〕

正月十六日(○正徳六年)定火消拾人被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>度々火事之節、骨折ニ付、時服三宛被<sub>レ</sub>下旨、老中被<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>之、井上河内守申<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>之。

正月十七日

一、井上河内守被<sub>レ</sub>相渡<sub>レ</sub>い書付、大目付横田備中守相達す。舊臘晦日より去十一日まで屋敷類燒之分に、當夏御借米、只今被<sub>レ</sub>下旨、向々より御勘定奉行に書付差<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>之、可<sub>レ</sub>請取<sub>レ</sub>由、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>相觸<sub>レ</sub>い。以上。

——柳營日次記

一、正月十一日(○正徳六年)無縁坂より出火。

榊原式部大輔 榊原家の御紋を火の車、くるり／＼と皆燒にけり。

板倉讚岐守 讚岐殿なせに藏をば立やらぬ、板倉にてはいつも燒ましよ。

小笠原隱岐守 板倉の相伴するはいとおしや、みがひしにひらけてぞすれ。

湯島天神 金は貳分錢三貫の世の中に、何とて火事はつれなかりけり。立花出雲守 二度燒て腰ハ立花やるせなく、逃て出雲の跡かたもなし。

内藤式部 何事も内藤おもひて油斷して、式部すまいて燒原の番。

三宅備前守 一やけか二やけ三宅やけこけて、紋のりんほうそはびんぼう。

福原刑部 福原もつい燒ばらと成りぬれば、腰打ぬけて刑部叶はぬ。

寶生太夫 寶生が燒たる程に油斷すな、ほくらになりて又やけるぞや。

大關信濃守 大關にせげせく程風つよく、屋敷やく病信濃わるさよ。

戸田淡路守 もふ火事に淡路とこそは思ひしに、かゝるくろくに逢ふぞ悲しき。

堀左京亮 をいとしゃ尻をほつ立てなき左京、釘めき斗ひるふやけ跡。

安藤右京亮 安藤して最早燒じとおもひしに、身に右京とは神もしらすや。

本多信濃守 うそでなし本多も燒て跡もなし、れり塀ばかり立葵かな。

富田甲斐守 下谷より柳原まで火がとみた、ふせぐ甲斐なき燒原の灰。

本町石町 立ならぶ花の本町火ぢりめん、どこもかしこもへき羅紗哉。

小田原町 腰ぶとの町人共が火事に逢ひ、手鯛になつた心苦會鯛。

松平因幡守 燒むけていつくへ逃て因幡どの、此借錢をいつか梅ばら。

松平伊豫守 大炊をばとりたる跡か皆やけて、殘る所はわづか少將。

——武野八代集

〔附記〕

十二日(○正徳六年正月○中略。)

關都時代ノ火災



正徳六年正月十三日火災  
正徳六年正月十五日火災

東京市史稿

五九六

一、午下刻、湯島榊原式部大輔屋敷より出火、申上刻、同所より火鎖。  
一、火事付而、松姫君様御守殿、島居伊賀守相越、御目付永井三郎右衛門、御使番小田切靱負相從罷越。

柳營日次記

十二日(○正徳六年正月)風吹申ひ。夕中仕廻ひ道具又取出して休居申ひ。晝九時、本郷に火事有之、大火にてい。本郷二丁目方火出、下谷の焼跡迄焼失いたし止いよし(○年代炎上鑑ニハ「午之刻、西北大風、湯島切通し方出火、昨日之焼場迄焼る」ト見ユ)

十三日(○正徳六年正月)天氣曇り、此夜下谷に火事有之、千住之由にい。此頃、所々大火事に付、材木殊外高直にて、松板壹兩に八十五枚程せしが、廿五枚一兩にいたしい。大工ハ日壹兩にて、一日貳朱いたしい。能き大工は一日五百文四百文にてい。佐官小まいかきも同斷。大八車殊外運賃高直にてい。

十三日(○正徳六年正月)之夜者、火事は、千住二丁目方出、女郎町不殘焼申ひ(○年代炎上鑑ニハ「同年正月十三日夜、四ッ谷御門外町家方出火、少し焼」ト有リ。)

十五日(○正徳六年正月)今度十一日之火事に方々にて人死有之い。前度々火事に人死御座い。

一、十一日之火事に、日本橋西にて橋板二間に三間程焼、柱四本、欄干五間程焼失いたし、竹やらいを附、馬車通し申さずい。

一話一言

三、正月十八日火災、ハ、兩災有リ、一ハ、

一、正月十七日(○享保元年)

同夜丑刻、鐵炮洲松平右京大夫(○大河内輝真)屋敷方出火ニ、増火消大名衆五ヶ所御

正月十八日火災

奉書御使、本番永田彌左衛門組御徒勤之。

御徒方萬年記

十七日(○正徳六年正月)夜八ッ時、築地松平右京大夫殿御屋敷長屋方出火、御屋敷不

殘、奥平大膳大夫殿(○昌成)御中屋敷松平河内守(○池田清定)御上屋敷十間町有明町、

柳原町、小笠原筑後守殿御屋敷、折節北西風強、鐵炮洲築地飯田町近邊不殘、海限に燒貫申ひ。町屋ハ十四五町餘之。

月堂見聞集

正月十七日(○正徳六年)之夜八時、築地松平右京大夫様中屋敷方火出い。前酒井修

理亮様屋敷跡南北橋板まで、末は飯田町北側表を燒通りて、此所角定火消溜

池之端近藤彦九郎様消口御取い。それ方鐵炮洲材木屋へ出、さぶさ橋通り、東

は海際之方、五町に豎五六町程燒失、築地松屋市右衛門方に見舞申ひ。夜七ッ

過迄、九ッの頃より燒出し、明日迄火消不申ひて、曉にしめり申ひ。風西北にて

い。

一話一言

柳營日次記ニハ「十七日(○正徳六年)丑上刻、鐵炮洲松平右京大夫屋敷より出火、卯

上刻同所飯田町より鎮火、火事付、老中若年寄中登城」ト有リ。有章院殿御實紀續

談海其他略ス。

一ハ、

關都時代ノ火災

五九七



正月十八日○正徳六年 晝九ツ時、淺草諏訪町銀座吹場カ出火、西ハ黒舟町、東ハ諏訪町限、夫カ本庄へ飛火、石原邊、回向院後通り、御舟藏後通り、堀田伊豆守殿正虎、御屋敷、夫カ深川木場邊迄不殘、八幡ハ無別條、同晝七ツ時迄ニ火留ル。

——月堂見聞集

一、正月十八日○享保元年

一、已下刻淺草黒船町カ出火ニ付、増火消大名衆七ヶ所に御奉書出、御使本番諏訪兵部組御徒勤之。

——御徒方萬年記

一、十八日○正徳六年正月 風吹申ハ晝九ツ時、淺草十王町銀座會所カ火出、東へ本庄新大橋回向院近邊、土屋相模守直政下やしき、阿部豊後守○正下やしき不殘燒失いたしハ、回向院は燒不申ハ、松平越中守○定隱居やしき不殘燒失、其より筋違に深川雲向院之堂は不燒、寺中片側燒申ハ、火しづまり申ハ、風は西北風にてハ。

——一話一言

續談海萬年記、其他略ス、柳營日次記ニハ、十八日○正徳六年正月 一、今午上刻、淺草諏訪町銀吹場より出火、申下刻、深川北平野町○市ニカ火鎮、増火消被仰付之ト見テ、基熙公記○編年史料ニハ、○正徳六年正月廿二日寅天陰、時々雪飛散、自關東有便風、去十六、七、八

三日○十六日ハ誤聞。連續大火事云々、不便々々、民間困窮歟ト見ユ。

〔參考〕

廿日○正徳六年正月

一、井上河内守被相渡御書付大目付横田備中守被相達ハ。

去七十八日屋敷類燒之分ハ、當夏御借米、只今被下旨、向々より御勘定奉行に書付差出之、可請取ハ由、被相觸ハ以上。

正月廿日

一、同人町奉行に相渡ハ書付、末に有之。

——柳營日次記

正徳六年正月廿一日

覺

一、前々も相觸ハ通、出火之節、風も有之、時分、風下はいふに不及、風脇の所所も、手前之火之本を用心し、風下之所々は、屋根の上へ人をも差置、飛火の用心を可仕之處、近來諸道具をかたづけハのみにあらず、家の建具板敷引物等迄をばハつし、持出ハ支度仕ハ故、手前よりの出火も出來、其上町の道筋は言に不及、御堀端御門下、舛形之内迄も、種々の物をはハこび置、火



消を始、立退ひ貴賤共に、往來之通路とまりに罷成、此等之次第、以外不届之至に。自今以後は、出火之節に外の所より火を出し、又は風下に飛火之防をも不仕、家道具をも引はづし、持運ひ事等有之におゐては、急度曲事に行はれ、事之體により、其町の名主等も越度之御沙汰たるべく、此旨町中へ急度可相觸ひ以上。

正徳六申年正月

覺

前々より相觸ひ通、火事之節、大八車に荷物を積退、又はから車に引あるとき、道具等を積ひ儀有之様に相聞ひ、往來込合ひ節、右之仕形不届之至に。向後左様之儀有之には、急度遂吟味、車主車引ひ者共に、可爲曲事、其所之名主可爲越度に條、此旨町中相觸可申ひ以上。——大成令

〔附記〕

正月廿日(○正徳六年)麻布邊出火。(○一話一言ニハ、正月廿日風吹申ひ。天氣よし。晝七時權太原に火事有之、大火にて暮時分しづまり申ひ。ト有り、續談海ニハ、同廿日七ツ時、權太原松平權之助組屋敷より出火、少々火なり。ト見ユ。) 正月廿一日(○正徳六年)品川邊出火。(○一話一言ニハ、正月廿一日、風吹申ひ。晝九ツ

附記

正徳六年  
正月廿日  
廿一日  
廿三日  
火災

過芝田町七丁目之邊に大火事有之、晝七時分火しづまり申ひ。後日聞ひへば、品川門前町方火出、濱川佐川邊迄焼失いたし由。(○) 正月廿三日(○正徳六年)之夜、雪降ひ、折から本郷追分方火事出、太物店迄、不殘焼失いたし由。(○) ——月堂見聞集 一話一言

四、正月廿九日火災 八、

一、正月廿九日(○享保元年) 一同夜丑上刻、柳原豊島町方出火、付、増火消大名衆五箇所に御奉書出、御使本番林藤四郎組御徒勤之。 ——御徒方萬年記

正月廿九日(○正徳六年) 夜子刻、柳原土手下豊島町方出火、北西風、南ハ橋本町、馬喰町壹丁目方三丁目迄、横山町迄。夫方濱町通大川端迄、西ハ岩井町、小傳馬町三丁目。夫方通鹽町、油町、立花町、高砂町。夫方段々大川端迄焼、水野出羽守殿(○忠御屋敷御類焼、凡幅三町程、長ハ六町程寅之刻火留ル。右場所二度焼も多ク在之。夜中風強ひて、土藏穴藏も大分焼失、人死も餘程在之。右江戸より申來に寫也。 ——月堂見聞集

正月廿九日(○正徳六年) 今夜九半時、豊島町より火出、ばくろう町四丁、松村町、富澤町方かまくら町、牧野備後守様(○成) やしき焼失、水野隼人様やしき切にて火

新編時代ノ火災

正月廿九日  
火災



しづまり申ひ、西北風にてひ。

正月晦日豊島町火事に、豊島丁にて人死有之ひよし。新大橋不殘燒失、橋ぎわにて横田備中様やしき燒残りひ。松平因幡守様○定。秋元伊賀守○喬。土屋相模守○政。間部越前守○房。杯不殘燒失。——一話一言

柳營日次記ハ、廿九日○正徳六年正月。今子刻、豊島丁一丁目より出火、寅刻濱町松平因幡守下屋敷○云。續談海ニハ、同○正徳六年正月。晦日夜、青山宿より出火、同時豊島町よりも出火、馬喰町濱町迄類燒す。見エ、河方筆記○編年史料。ニハ、江戸當年○正徳六年正月。元日八日九日十日十一日十二日十七日十八日廿九日、所々大火、近年無之燒失之由、元日廿九日迄、廿度計火事有之由ト有リ。

〔参考〕 柳營日次記ニ、

十四日○正徳六年二月。

小傳馬町三丁目、岩井町壹丁目、龜井町、通油町、元濱町、新大坂町、彌兵衛町、富澤町、高砂町、右當正月十一日、同二十九日二度燒ニ付、拜借米被仰付ト旨、町奉行ト大和守書付渡ト之。

五、二月七日火災 ハ、

七日○正徳六年。  
略。

二月七日  
火災

今丑下刻、本郷森川宿本多中務大輔○忠。下屋敷ト出火、寅中刻本郷五丁目ト而火鎮。

松姫君様○徳川綱吉女、御守殿へ、鳥居伊賀守相越。

——柳營日次記

二月八日○享保元年。

一、今曉寅上刻、本郷筋出火ニ付、増火消大名衆二ヶ所に御奉書出、御使本番永田彌左衛門組御徒勤之。——御徒方萬年記

二月七日○正徳六年。江戸本郷六丁目ト出火、同四丁目三丁目迄燒失。凡十町程燒

失仕ひ。

——月堂見聞集

續談海ニハ、二月七日○正徳六年。今曉本郷六丁目日本多中務太輔中屋敷ト出火、同四

丁目丸山迄類火ト有リ。一話一言言ト所亦略同シ。

六、二月十四日火災 ハ、

二月十四日○正徳六年。晝四ツ時、江戸日本橋通二丁目東側貳十軒程入出火、通一

丁目東側南方二三軒程燒失。夫々平松町、佐内町西側不殘燒、新場肴店ト八丁目堀松平越中守殿○重。御屋敷切ニ燒留ル。凡町數廿四五町程、西北風強、土藏穴藏火入、怪我人死人等在之ト由。

——月堂見聞集

關都時代ノ火災

六〇三

二月十四  
日火災



十四日○正徳六年二月日和朝風吹申。朝五ツ過、日本橋平松町通り丁之北側より火出、向側へうつり、北側之末ハ、左内町迄不殘、片側燒不申。平松町火元之際、藤堂民部様消口被取り、其上北側燒残り申。南かはハ材木町河岸迄燒出し、筋違に材木町三丁目迄燒申。火鎮り申。通町之方は、一丁半程ツ、町並不殘燒不申。晝四時分火消に申。風北にて。

同日九ツ時、神田鎌倉河岸之方に火事有之、早速消申。

一、同時番町之方に火事有之、早速火しづまり申。

一、此日燒残りし日本橋人通り多く有之、中間より橋踏落。人二人川へ落。へ共、干潮にてハ故、泥に成出申、けがは無之。

一、同夜八ツ時分、上さや町湯屋より火出、早速消申。火消二頭被參。

——一話一言

七、二月廿二日火災

廿二日○正徳六年二月略。

一、今申下刻、鍛冶町外五郎兵衛町より出火、酉上刻銀座町一丁目を鎮。

——柳營日次記

二月廿二日火災

一、二月廿二日○享保元年

一、申下刻、五郎兵衛町ハ出火ニ付、増火消稻葉丹後守○正に御奉書出、御使本

番本多久五郎組御徒勤之。

——御徒方萬年記

同年○正徳六年廿二日晝七ツ時、江戸南鍛冶町新道より出火仕。京橋竹川町通

り東側角二三間燒、西側不殘、西御堀端廿間地尻残り、暮六ツ前ニ火留ル。北西

風強クハ故、如斯。

——月堂見聞集

廿二日○正徳六年此日晝七ツ過に五郎兵衛町中程傘屋敷より俄に火出、直に

五郎兵衛町新道、兩河岸北こんや町川際迄燒付、壘町半町燒申。此所本多

遠江守様○正消口御取。依之壘町通り京橋際迄、表通店不殘燒残り、北こん

や町の火、乗物河岸ハ南京橋向南一町目半町餘不殘燒失。此火金六町へもえ

出、半町餘燒申。此火水谷町へ燒出、一町不殘燒失。是にて火しづまり

申。暮六ツ過迄燒申。西北風にて。但、五郎兵衛町河岸ハ表通り、北こんや

町迄不殘燒のこり申。

——一話一言

基熙公記○編年史料ニ據レハ、二月九日○正徳六年條、自江戸文到來、頃日火災少々止云々。凡舊冬晦日後、及當春火事大小七十餘度云々。廿七日○正徳六年條、關東當



十四日頃、猶日々有火事。廿八日ノ條、自江戸文到來、彌無事云々。火災此頃止云々。ト有リ。火災ノ多カリシコト、以テ推ス可キ也。原因ハ、多ク放火ニ由リタル者ノ如シ。

憲法編年録ニ左ノ文書有リ。

二月四日(○正徳六年)町觸

頃日、町々にて付火有之様、其沙汰相聞い。前々も夜更通行い者有之者、壹町切に拍子木にて送之、怪敷者も有之者、召捕、月番之番所へ可訴來旨、相觸い處、紛敷者捕出い儀も無之、猥に成い様に相聞い、不届にい。向後彌番人等堅申付、怪敷者捕之、月番之番所可訴來い。見のがしにいたし、又は捕いゑも追放いは、後日に相聞いといふとも、其町之五人組名主まで、急度越度可申付條、此旨町中不殘可相觸い。以上。

二月四日

同月(○正徳六年二月)廿日御目付へ長門守渡之。

此節所々に附火等いたし、あやしきもの徘徊い由、相聞へい。御徒目付兩人宛、御小人目付相添、御曲輪之内并近邊、晝夜相廻り、あやしきもの見いは、召捕之、其所近き御門番所敷、又は辻番所町屋等へ預置、其後御目付中迄可相届い。若見違ひ捕も不若い間、其段可被申渡い。あやしきもの捕いよし御徒目付相届いは、御目付中、堀田源右衛門、大井新右衛門兩人之内へ右之者請取い様に可被相達い。右之趣、源右衛門(○堀田)新右衛門(○大井)にも申渡置い。以上。

二月

御徒目付相廻御場所

昌平橋・神田橋外・小川町・もちの木坂邊・飯田町・田安御門之外、霞ヶ關・日比谷御門之外邊、虎之御門邊迄。

〔參考〕柳營日次記ニ、

朔日(○正徳六年閏二月)。

五郎兵衛町・壘町・北紺屋町・銀座壹丁目・同裏河岸、右舊臘晦日去ル廿二日火事之節、二度燒ニ逢いニ付拜借米被仰付い。通一丁目二丁目・同新道、木材木町二丁目・四丁目・福島町・下槇町・左内町・平松町・小松町・南油町・川瀬石町・新右衛門町・樽正町・右正月十一日・二月十四日二度燒ニ付、拜借米被仰付い。右町奉行ハ大和守渡之。

〔附記〕

一、九月二十三日(○享保元年)。

今戌之刻、飯田町下出火有之、下乘張番所ハ戸田山城守殿御出ニ付、加御番吉田小右衛門罷出、臨時火消被仰付、大名衆戸田采女正・青山因幡守ハ之御奉書二通者、山城守殿小右衛門ハ御渡、御請者口上ニ申來。御目付木下清兵衛ハ小右衛門申達。大久保加賀守ハ之御奉書者、清兵衛ハ小右衛門ハ被相渡、是又御請口上ニ申來。則清兵衛ハ申達。右御使本御番中山主水組御徒勤之。右御使如件、御湯漬被下之。右

霸都時代ノ火災

正徳六年  
九月後火  
災  
附記



之趣御徒御番所日記有之。(○柳營日記九月廿四日ノ條ニハ、戌上刻、飯田町下寄合近藤三次郎屋敷より出火、戌下刻、同所御書院番土屋平三郎屋敷ニ火。右ニ付山城守若年寄中、下乗橋張番所迄罷出。ト有り)

——御徒方萬年記

十月十九日(○享保元年)江戸下谷長者町邊出火、四五町餘も燒貫。御大名方少々御類燒在之。(○萬年記ニハ、十九日午下刻、下谷御徒町出火、近邊災。ト見ユ、御徒方萬年記ニハ、増火消三大名命セラレタルコト見ユ)

——月堂見聞集

十二月十六日火災

八、享保元年十二月十六日火災 ハ、

十六日(○享保元年十二月)

一、今酉中刻、橋町二丁目より出火、亥上刻、濱町永井伊豆守下屋敷ニ火鎮。

——柳營日記

極月十六日(○享保元年)戌の刻江戸橋町カ出火、北風にて、富澤町濱町燒貫、永代橋邊にて火留る。凡幅三町程、長さ五六町程。(○萬年記ニハ、商家多類燒。ト見ユ)

——月堂見聞集

十二月十六日(○享保元年)

同夜五時、橋町出火ニ付、増火消大名三ヶ所久世大和守殿(○重之)御奉書出、御使本御番長谷川半四郎組御徒勤之。

——御徒方萬年記

十二月廿五日火災

九、十二月廿五日火災 ハ、

廿五日(○享保元年十二月)

今申刻、駿河臺寄合杉岡十兵衛より出火、湯島天神切通し裏通ニ西刻火鎮。右ニ付大和守(○久世重之)長門守(○大久保重之)登城。

——柳營日記

去る極月廿五日(○享保元年)晝八ツ時、江戸駿河臺代官町筋より出火、西南風にて大火に成、本郷元町へ飛火仕、本郷三丁目、四丁目燒失、天神前迄燒、六ツ時前に火静り申。榊原式部大輔殿御屋敷類燒、凡一町に七八町程。

——月堂見聞集

有徳院殿御實紀ニハ、十二月廿五日(○享保元年)けふ申刻、駿河臺より失火し、湯島天満宮の裏路までやけひろかり、松姫御かた邸宅あやうしと聞えければ、森川出羽守俊胤御使し、下見ユ。萬年記ニハ、廿五日(○享保元年)未刻、駿河臺杉岡十兵衛宅出火、隣家二三軒類燒、移湯島傘谷邊若干餘災。ト見ユ。

〔附記〕 月堂見聞集ニ、

去る極月廿九日夜(○享保元年)江戸木挽町出火、一町程。

朔日(○享保二年正月)

朝都時代ノ火災

附記 享保元年十二月火災  
享保二年正月朔日火災



戊刻木挽町筋出火、依之因幡御前、吉田左近右衛門茂陸御時足御人數被遣、重て青地藤太夫禮幹御使被遣。

二日

戊刻前、下谷茅町利興朝臣前裏御門前小家より出火、及大火利興朝臣御屋敷危吉治公御出馬御下知にて、一之手御人數防之、二之手御人數は割場等之屋根の上り防之、御中屋敷にも相圖打即刻御出馬、三之手御人數不殘御上屋敷に參上、利興朝臣御屋敷に被爲入、御書院通御露地に被爲入、御下知にて防之、利興朝臣下長屋二筋御作事小屋等焼失、靈臺院殿利平君御割場前新御門より切通、御立退、岡田幸左衛門指添罷在、此方様より御歩横目御横目足輕等指添火鎮御退、最早御氣遣無之旨にて御本宅に被爲入、利興朝臣御屋敷之内焼失仕所々爲見届可申旨被仰出、御歩横目指遣委細見届罷歸及言上、亥中刻過御歸館、一之手二之手之御人數は不殘鎮以以後、子中刻御人數引揚退散。

參議公年表(加賀松雲公所收)

享保二年火災

正月七日

正月十三日火災

享保二年丁酉三〇紀元二七七年正月七日壬戌正〇三〇壬戌三尾張町〇市內出火、延燒築地〇市內ニ及フ。〇柳營日次記。月堂見聞。續談海。年代炎上鑑。十三日戊辰〇享保二年(紀元二三三七年)桶町〇市內火ヲ失シテ、本材木町八丁目〇市內ニ燒及シ、日本橋南二丁目〇市內火ヲ失シテ、下槇町河岸〇市內ニ延燒ス。〇柳營日次記。月堂見聞集。兼山秘策。續談海。

正月廿二日火災

正月廿三日火災

六月九日火災

十一月十五日火災

十二月二日火災

十二月廿八日火災

享保二年火災  
正月七日

營日次記。月堂見聞集。廿二日丁丑〇享保二年(紀元二三三七年)小石川馬場〇市內火有リ、二百餘町ニ延燒シ、死者百餘人ヲ出ス。大名旗本ノ邸宅多ク災ニ罹リ、餘焰本城ニ及ブ。〇柳營日次記。柳營日錄。御徒方萬年記。兼山秘策。續談海。廿三日戊寅〇享保二年(紀元二三三七年)赤城下〇市內火有リ、音羽町邊〇市內石川ニ及ブ。〇土屋筆。續談海。六月九日壬辰〇享保二年(紀元二三三七年)小傳馬町〇市內本橋區。出火、下谷淺草〇市內ヲ延燒ス。〇柳營日錄。柳營日次記。御徒方萬年記。兼山秘策。月堂見聞集。有徳院殿御實紀。十一月十五日乙丑〇享保二年(紀元二三三七年)本所回向院〇市內邊出火、延燒深川〇市內八幡邊ニ至ル。〇月堂見聞集。十一月十二日壬辰〇享保二年(紀元二三三七年)邊ニ達ス。〇柳營日次記。月堂見聞集。兼山秘策。廿八日戊申〇享保二年(紀元二三三七年)牛込拂方町〇市內出失シ、延燒増上寺前芝海手〇市內ニ至ル。〇柳營日次記。柳營日錄。兼山秘策。

享保二年火災 享保二年亦火災多ク、殊ニ大火有リ。

一、正月七日火災 相傳フ、

霸都時代ノ火災



正月七日○享保二年。

一、亥上刻夜、尾張町カ出火、三十間堀、築地迄焼、元數寄屋町四丁目尾張殿川○德友、濱屋敷ニ布寅後刻火鎮。  
——柳營日次記

正月七日○享保二年。の夜亥刻、江戸京橋南五丁目裏中通より出火、北西風にて、東側三十間堀迄焼、土藏子、細夫より木挽町五丁目へ飛火仕、築地御門前迄焼貫ル。松平駿河守殿、松平采女正殿、松平周防守殿、金森彦四郎殿、櫻井五左衛門殿、龜井玄蕃頭殿、川波長八殿、大久保左京殿、民部殿、毛利兵吉殿、稻葉丹後守殿、御屋敷御類焼、鐵炮洲迄焼貫、丑の下刻火留る。  
——月堂見聞集

兼香公記○編年史料收。正月十二日○享保二年。丁卯傳聞、關東去七日大地震、次雷鳴、同日亥ノ刻ニ、京橋南五丁目裏中通ヨリ出火、東側三拾間堀マテ焼ル、木挽町五丁目ニ移リ、築地マテ焼申ル。松平駿河守。松平采女。同因幡守。金森彦四郎。櫻井左衛門。龜井玄蕃。河並長八郎。大久保左兵衛。毛利兵吉。稻葉丹後守。之通、鐵炮洲マテ、丑下刻ニ留申ル。横五町長二十町斗ニテ有之ル也。ト云ヒ、萬年記ニハ、七日○享保二年。午刻地震甚。等實永四亥十月四日地震。午下刻俄曇、雪降雷鳴。未中刻屬晴、是夜亥刻數寄屋町出火、芝口門内木挽町邊焼失、松平采女正基定居亭、松平駿河守信望役屋敷消火松平周防守康豐稻葉丹後守正知中屋敷等類焼ト記ス。此外年代

正月十三日火災

炎上鑑言フ所ハ、略柳營日次記ニ同ク、且森田座類焼ト有リ。續談海ニハ、同○享保二年。正月十三日○享保二年。相傳フ、

一、今巳中刻、桶町二丁目より出火、午下刻本材木町八丁目ニ有火鎮、増火消稻葉丹後守○正、牧野備後守○成、青山因幡守○俊、龜井隱岐守○親、伊東修理亮○祐。

一、今申刻、日本橋南二丁目より出火、酉下刻下槇町河岸ニ有火鎮、戸田山城守○忠、大久保佐渡守○常、登城、増火消大久保加賀守○忠、松平伊豆守○信、加藤和泉守○嘉、細川伊豆守○清、有也。  
——柳營日次記

一、正月十三日○享保二年。巳刻、桶町貳丁目カ出火ニ付、増火消大名五箇所に、戸田山城守殿○忠、御奉書出、御使本御番吉田小右衛門組御徒勤之。  
同日

申下刻、日本橋南貳丁目カ出火ニ付、火消大名四箇所に、右御同人御奉書出、本朝都時代ノ火災



御番同人組御徒勤之。

御徒方萬年記

同年○享保二年正月。二十三日巳上刻、中橋桶町通り町地尻より出火、西北風にて、通りより東へうつり、南さや町・本材木町四丁目より七丁目迄不殘。通り町は京橋際迄、西側中通りより本通り迄の内、京橋北疊町迄燒。北は中橋迄。八町堀へはうつり不申。申の上刻火とまり。

同日○享保二年正月十三日。申の中刻、通り日本橋南二丁目東側式部小路より出火、是又大火に成、西北風にて、東は本材木町通不殘、中橋迄。南は中橋。北は佐内町。西は通り町東側表屋地尻迄。西の下刻に火とまり。凡そ日本橋より京橋迄、東側材木町限り、不殘燒貫。

月堂見聞集

續談海ニハ、同年○享保二年正月。二十三日、京橋桶町より出火、同日暮時、日本橋三丁目出火。ト見エ。柳營日次記ハ、十二日ノ事トシ、桶町出火、南八町堀迄燒。ト爲ス。姑ク記シテ後考ヲ俟ツ。

〔附記〕

參議公年表○加賀松ニ、雲公收。

附記  
享保二年  
正月十九日  
廿日  
廿九日  
火災

十九日○享保二年正月。子刻、染井筋出火旨、押付御中屋敷之相圖打申に付、御兩公共に御早乘にて、御中屋

敷被爲入。然所御中屋敷近隣水野隼人正直忠主七州石本長屋燒失、一之手・二之手之御人數段々參上、御中屋敷御近所火消出。利章君御作事方御門より御越被成。様被御遣、御人數追分口御門に罷出駈付、御加勢火消渡邊喜兵衛篤大小駈付、隼人正直忠主長屋防留、吉治公曉方御歸館。

二十日  
戌刻、上野境内護國院出火、早鐘打、相圖打、御人數罷出。御居宅之上八筋邊火之粉多來、一之手・二之手御人數、吉治公前御下知防之申内、綱紀公前御出馬、三之手・四之手御人數參上防之、子刻鎮に付、御本宅被爲入、押付南御門より御歸館。○増上寺日鑑ニモ、二十日上野寺内出火有之。ト有リ。

三、正月廿二日大火 相傳フ、

廿二日○享保二年正月。

未下刻、小石川馬場近所井出三郎右衛門宅○享保日錄、井出治郎太郎宅ニ作ル。より出火、本郷丸山御弓町御茶水水戸殿上屋鋪水道橋駿河臺小川町猿樂町飯田町一ッ橋外護持院三河丁白銀町鎌倉河岸通、神田橋之内、常盤橋之内、定小屋、大下馬後龍ノ口、吳服橋ノ内、鍛冶橋御門御多門諸大名宅、東之方昌平橋須田町本町石町日本橋左右大坂町境町ニ至リ、深川八丁堀邊悉燒失。夜子刻鎮ル。神田橋御多門燒失、防火消大勢被仰付之。

霸都時代ノ火災

正月廿二日  
火災



水戸殿居屋鋪類焼付被遺物、

金貳萬兩

御屏風二双

御檜重一組

廿五日

居屋鋪類焼ニ付上使、

上使井上河内守

水戸中納言殿○德川綱條

同少將殿○德川宗堯

同中納言殿御廉中

上使御使番柴田七左衛門

松平伊豫守○吉邦

同御使番倉橋内匠

松平土佐守○山内豐隆

同柴田七左衛門

松平大炊頭○頼雄

一、松平越後守○宣富松平淡路守○蜂須賀綱矩當地居屋鋪去廿二日類焼之段及上聞、可爲難儀、ふ被思召之旨、上意之趣、從老中以宿次奉書達之。

——柳營日記

一、廿二日○享保二年正月未之下刻、江戸小石川馬場之近所伊手三郎右衛門屋敷、出火、風烈及大火、小石川小川町駿河臺并神田橋一ッ橋内常盤橋内大手前大名小路築地八丁堀通迄焼失、萬石以上屋敷類焼之面々如左、同夜寅刻鎮。

中屋敷少シ焼、阿部伊勢守○正福松平右京大夫○大河内輝貞松平下野守○康倫小笠原喜三郎○長百間長屋并裏通少殘、水戸殿○德川綱條牧野周防守○康重中屋敷小笠原佐渡守○寬長植村土佐守○朝恒長屋一筋殘ル、稻葉丹後守○正知護持院、中屋敷、本多中務大輔○良忠戸田大隅守○忠固松平伯耆守○資俊中屋敷、小笠原右近將監○雄忠中屋敷、松平右近將監○清武遠藤下野守、一ッ橋内表通、戸田山城守○眞忠酒井修理大夫○音忠酒井左衛門佐○眞忠榊原式部大輔○政邦鳥居丹波守○利忠酒井雅樂頭○愛親松平紀伊守○信岑久世大和守○重邦黑田豊前守○直邦中屋敷、阿部豊後守○正喬大久保加賀守○忠英伊東播磨守○長祐内藤伊豆守○中屋敷酒井雅樂頭、小堀備中守○政峯松平備前守、堀一學、蜂須賀隱岐守○眞忠戸田采女正○氏定細川越中守○宣紀土屋相模守○政直本多中務大輔○良忠松平丹波守○光輝戸田御役屋敷、中山出雲守、右同斷、坪内能登守、松平越後守○宣富向屋敷共、松平大炊頭○池田繼政土井大炊頭○利貴溝口伯耆守○重元織田美濃守○就信松平伊賀守○周忠松平右近將監、松平淡路守○蜂須賀綱矩松平土佐守○山内豐隆三浦備後守○明喬中屋敷下屋敷、松平大炊頭、小屋敷、伊達和泉守○成任下屋敷、秋元伊賀守○房喬本多下總守○康命松平遠江



守○忠 黑田伊勢守○長 小笠原近江守○基 中屋敷、松平河内守○池田同、清定

中川内膳正○久 同、井伊掃部頭○直 同、松平土佐守○安 同、丹羽左京大夫○重 同、伊

同半分燒失、紀伊殿○德川 同、脇坂淡路守○清 同、安下屋敷、相馬讚岐守○尊 本

多遠江守○武 同、正水野壹岐守○忠 井上遠江守○長 同、正下屋敷、鳥居丹波守○同、松

平和泉守○乘 松平彈正。本庄宮内少輔○道 章。

萬石以上屋鋪合七十二軒。

一、神田御破損小屋。

一、評定所傳奏屋敷。

一、神田橋御門番所橋共二燒。

一、鍛冶橋御門御多門并御番所燒失。

右之外、萬石以下小身之面々屋敷三百四十九軒燒失。此内御役人八、左二記。

大目付 中川淡路守。

伏見奉行 石川備中守。

高家衆 蒔田伊豆守。

同 長澤壹岐守。

御鷹方 小栗長右衛門。  
御使番 石丸數馬。  
定火消 松平駿河守。  
惣御弓頭 堀田源右衛門。  
御書院番頭 森川下總守。

高家衆 大友因幡守。

御持弓頭 船越左衛門。

御書院番頭 内藤日向守。

百人組頭 堀田孫太郎。

御使番 倉橋三左衛門。

同 日下部作十郎。

惣御鐵炮頭 永井刑部。

高家衆 中條對馬守。

二ノ丸御留主居、萩原源左衛門。

惣御弓頭 松平權之助。

御目付 鈴木伊兵衛。

御勘定奉行 水野因幡守。

同 水野伯耆守。

御書院番組頭 酒井大學。

御吟味方 杉岡彌太郎。

御廣敷番頭 大平角太夫。

溜間附 長崎伊豫守。

御徒頭 雀部新六。

同 春日内藏之助。

御目付 戶田庄右衛門。

御使番 蒔田讚岐守。

中奥御小性 安藤志摩守。

定火消 溝口式部。

西丸御留主居 中山隱岐守。

御目付 小笠原平兵衛。

伊勢奉行 黒川丹波守。

御小性組頭 菅谷近江守。

御作事奉行 久松豐前守。

御使番 曾我平次郎。

大目付 松平石見守。

御持弓頭 堀 筑後守。

御鐵炮頭 六郷主馬。

御作事奉行 柳澤備後守。

奈良奉行 中防美作守。

御步行頭 新庄伊織。

御目付 渡邊外記。

同 仙波七郎左衛門。

御目付 鈴木伊兵衛。



中奥口小性 松平内匠頭。  
御小性組頭 堀介左衛門。  
同 鳥居織部。

御書院組頭 榊原采女。  
御小性組番頭 朽木土佐守。

町方

- 一、本郷丸山菊坂町八丁四方同丁三丁内。市程燒。
- 一、本郷六丁目内。市壹丁目内。市迄片々輪燒。
- 一、上餌差町下餌差町石川區。市内小半分燒。
- 一、小石川春日町内。市不殘燒。
- 一、伊勢町本船町鞘町駿河町白銀土手立願町永富町皆川町大工町鍛冶町雉子町蠟燭町松下丁三河丁小田原丁鎌倉川岸小網丁てれふれ丁大坂丁甚右衛門丁堀江六軒町堺町乗物丁新材木丁横丁田所町大門通片々輪大傳馬丁二丁程右町三丁目四丁目小傳馬町壹丁程鐵炮丁紺屋丁二丁程本町三丁目不殘。
- 一、日本橋外京橋四丁目迄。
- 一、鍛冶橋外川岸通り外壹石橋迄同西川岸外材木町迄。
- 一、材木町外南外木挽町一丁目迄。

一、鍛冶橋外外鐵炮洲築地海手迄。

一、南八丁堀不殘。

一、北八丁堀ハ町屋少々殘。

一、右火事之節増火消被仰付面々、

松平加賀守前田綱紀松平安藝守吉長松平隱岐守直戸田采女正氏定本  
 多中務大輔良忠板倉近江守治重伊東修理亮永祐南部大膳亮利相馬  
 讚岐守尊胤松平主殿頭雄忠黒田甲斐守貞長龜井隱岐守親青山因幡  
 守重忠酒井信濃守告忠朽木民部少輔元種

右之通罷出ル。

一、兼而火之番被仰付面々、右之節罷出ル。

鳥井丹波守瞭忠牧野因幡守成英松平隼人正朝近朝細川伊豆守興田村  
 下總守顯誠諏訪安藝守虎忠松平遠江守喬忠

二十八日於芙蓉之間、火消不殘に爲御褒美時服被下之組之者にも、御金被下之旨、被仰渡ル。

——柳營日録

享保二酉年正月廿二日申中刻出火。

霸都時代ノ火災



小石川馬場 表長屋計不殘燒失。

火元井出三郎右衛門殿。石丸源五兵衛殿。蔭山外記殿。安倍伊勢守殿。丸山仁羅山彌右衛門殿。興善寺。

是の町々、菊坂迄二丁程、不殘燒失。

大岩源大夫殿。望月平次郎殿。糟屋彦三郎殿。吉田又一郎殿。小川半藏殿。等泉寺。本明寺。

是迄、菊坂町三町程不殘燒。

栗田平右衛門殿。

是の菊坂○市内の上、二丁程不殘燒失。

豊島道叔丈。

菊坂中町不殘燒失。

菊坂横町向坂通り不殘燒。

長仙寺。小石川御用屋敷。中川淡路殿。小倉源五郎殿。三枝善右衛門殿。

上餌指町片かは少殘ル。

小笠原喜三郎殿。金田伊之助殿。

産御殿殘ル。小石川御屋敷。

松平下野守殿。田村四郎兵衛殿。

春日町不殘燒失。

小栗長右衛門殿。大澤出雲守殿。牧野周防守殿。青山善左衛門殿。川窪彦之九殿。松平帶刀殿。石川備中守殿。石丸數馬殿。

丸山

坪内惣兵衛殿組やしき。本多五郎右衛門殿組やしき。日置七郎左衛門殿。磯野源太左衛門殿。一色惣左衛門殿。飯室甚五郎殿。上村彦右衛門殿。本多忠次郎殿。志村十助殿。

本郷六町目の壹町目迄、片かわ不殘燒失。

瑞泉院。

御方町不殘燒失。

都筑源大夫殿。高木十郎左衛門殿。内藤十左衛門殿。朝比奈奎之助殿。余語古庵丈。小笠原佐渡守殿。川島八左衛門殿。御鷹御用屋敷。安藤源助殿。村塚清信丈。目良久左衛門殿。本多彌平次殿。小林定右衛門殿。山名信濃守殿。日比野七右衛門殿。久永内記殿。松平駿河守殿。石川彌市衛門殿。板倉兼市郎殿。能勢三之助殿。甲斐庄喜右衛門殿。中山下野守殿。小笠原新次郎殿。保田縫殿之助殿。彦坂壹岐守殿。松平右京大夫殿。脇坂義十郎殿。曲淵清三郎殿。松風伊左衛門殿。深谷市右衛門殿。永井讚岐守殿。水野主膳殿。小笠原喜三郎殿。室野奥右衛門殿。木村金八殿。堀田源右衛門殿。伊勢伊勢守殿。堺



野小左衛門殿。本多五郎右衛門殿。組やしき。立花内藏之助殿。平岡又左衛門殿。關根左太夫殿。三念寺。

御茶の水通り。

本多權左衛門殿。伊與田新左衛門殿。川澄新次郎殿。細田彌三郎殿。建部民部少輔殿。三宅下野守殿。岡田三右衛門殿。小澤市正殿。安藤筑後守殿。興安寺。等正寺。

町屋壹町程、片かわ焼失。

川村外記殿。前田伊豆守殿。土方彦兵衛殿。土方忠五郎殿。三宅忠七郎殿。

町屋貳丁程、不殘焼失。

前田隱岐守殿。五日田新左衛門殿。

右何も御茶之水御堀はた迄。

小川町伴三次郎殿。坪井三右衛門殿。坪井傳右衛門殿。菅谷近江守殿。太田萬次郎殿。松下與次郎殿。下島左五郎殿。志多羅孫兵衛殿。神尾五郎三郎殿。富永主膳殿。土肥源四郎殿。大柴源五右衛門殿。辻角左衛門殿。阿部孫十郎殿。曾我平次郎殿。近藤十兵衛殿。本多丹下殿。本梅讚岐守殿。武井善八殿。星合庄藏殿。下山五郎助殿。小森西倫法眼丈。山本宗浩丈。松平助四郎殿。宮原市正殿。武田法印丈。鈴木傳右衛門殿。鈴木伊兵衛殿。松植平右衛門殿。渡部彌次郎殿。水野源右衛門殿。諸星庄五郎殿。堀田孫太郎殿。倉橋太郎左衛門殿。倉橋三左衛門殿。吉益泰庵丈。小栗伊兵衛殿。駒橋吉左衛門殿。大久保忠右衛門殿。板倉九左衛門殿。長谷川源藏殿。鳥居内藏之助殿。竹田泰庵丈。今井元

昌丈。朝比奈主殿殿。小林半助殿。松野源右衛門殿。大久保彌次郎殿。御用屋敷。兒玉主馬殿。中山隱岐守殿。山田伊豆守殿。日下部作十郎殿。日下部七内殿。西牟田玄悦丈。立岡勇庵丈。深見新右衛門殿。青柳右衛門殿。水野半左衛門殿。内藤伊賀守殿。水野周防守殿。松平彈正忠殿。田代主馬殿。三枝攝津守殿。久貝因幡守殿。澤合修理殿。大森八十郎殿。前葉權太郎殿。星合攝津守殿。加藤傳八郎殿。朝比奈孫兵衛殿。中條對馬守殿。會根源藏殿。小川奎左衛門殿。小川奎之助殿。辻角左衛門殿。山梨角右衛門殿。細谷彌次右衛門殿。松風源兵衛殿。保木彌右衛門殿。保木左太郎殿。小林十左衛門殿。萩原源左衛門殿。三好助十郎殿。

猿樂町

久松備前守殿。堀筑後守殿。大久保三之助殿。御用やしき。武光平右衛門殿。拓植平右衛門殿。松平石見守殿。伊藤播磨殿。佐藤熊次郎殿。森宮内殿。溝口源兵衛殿。拓植傳右衛門殿。拓植傳左衛門殿。原八彌殿。金子又次郎殿。由良刑部殿。半井驢庵丈。酒井雅樂頭殿。富永權右衛門殿。宮原市正殿。杉山安兵衛殿。杉山權三郎殿。三島元興院等。宗友丈。加藤長三郎殿。立花隆庵丈。長尾分哲丈。永倉曙阿彌。管野外記殿。岡三左衛門殿。森源太左衛門殿。建部志摩守殿。佐久間源吉殿。森右近殿。日根野左門殿。京極主計殿。松平數馬殿。川村彌十郎殿。黒川丹波守殿。前田豊次郎殿。永井刑部殿。倉橋三左衛門殿。三好忠次郎殿。溝口式部殿。

御臺所町

大久保忠左衛門殿。長谷川將監殿。神谷傳兵衛殿。水野壹岐守殿。戸田六郎右衛門殿。

覇都時代ノ火災



池永清右衛門殿。池永政右衛門殿。稻垣求馬殿。馬場奎之助殿。金川民部殿。井上遠江殿。永島道泉丈。小林湖元丈。峯岸春庵丈。神馬源五左衛門殿。日野兵部殿。佐野三左衛門殿。木下平三郎殿。淺野與一郎殿。鶴殿豐之助殿。木下左衛門殿。室賀源太郎殿。室賀源七殿。大澤主膳殿。赤井五郎作殿。木邨孫次郎殿。松平六右衛門殿。奥山藤十郎殿。安藤志摩守殿。

一ッ橋之外。

猿樂町

萬年彌一右衛門殿。伊藤播磨守殿。佐藤慶南丈。土岐圖書殿。松平陸奥守殿。内藤源太夫殿。内藤宗八郎殿。服部兵藏殿。大平角太夫殿。矢部玄朱丈。柳澤備後守殿。酒井大學殿。御用やしき。六郷主馬殿。久須見又助殿。久須見又八殿。水野伯耆守殿。山高源藏殿。古田休甫丈。久松豊前守殿。

駿河臺

山口藤左衛門殿。齋藤左源太殿。赤井彌十郎左衛門殿。近藤造酒之助殿。岡田庄太夫殿。南條右衛門殿。阿部四郎左衛門殿。町野惣八郎殿。平田友益丈。伊藤仙右衛門殿。美濃部八郎右衛門殿。高山平左衛門殿。佐田養悅丈。東條殿。川勝主稅殿。高見左内殿。井上源藏殿。春日藏之助殿。雀部新六郎殿。室新助殿。水野宮内殿。三宅九十郎殿。赤井信濃守殿。中山秀右衛門殿。川野權九郎殿。堀田主膳殿。高山長吉郎殿。堀八郎右衛門殿。堀平七郎殿。堀萬次郎殿。山下勘右衛門殿。大久保六右衛門殿。松岡十兵衛殿。中山丹

波守殿。石丸清五郎殿。三宅奥右衛門殿。三宅平次郎殿。青山彦兵衛殿。宿谷源左衛門殿。杉原平左衛門殿。奥野忠兵衛殿。鈴木百助殿。鈴木頼安殿。間宮靱負殿。千波七郎平助殿。天方主馬殿。中坊美作守殿。長崎伊豆守殿。三藤縫殿之助殿。岩室伊右衛門殿。鈴木三郎九郎殿。木越庄五郎殿。岡道溪法眼丈。小堀備中守殿。美濃部八兵衛殿。戸田五助殿。池田馬之允殿。町野筑後守殿。山本縫殿。渡部外記殿。岡田玄益丈。新庄伊織殿。戸田周防守殿。

神田橋之外。

大原源六殿。戸田外記殿。中川市右衛門殿。石田庄右衛門殿。大友因幡守殿。村山元學丈。野間玄琢丈。布施豊前守殿。山田十大夫殿。本間豊前守殿。堀又十郎殿。小島立意丈。窪田源右衛門殿。太田勘兵衛殿。金田半右衛門殿。野瀬甚四郎殿。林百助殿。戸田外記殿。船越左衛門殿。前田助次郎殿。石丸五左衛門殿。蒔田讚岐守殿。大井休宅丈。山中彌兵衛殿。内藤日向守殿。五十嵐市十郎殿。小笠原頼母殿。小川文之助殿。清次三之進殿。渡部善左衛門殿。米津周防守殿。澁井久三郎殿。植羽土佐守殿。澁江松軒丈。御用やしき。間久瀬養庵丈。森川下總守殿。

神田橋見付橋ともに焼失。

一ッ橋之内。

戸田山城守殿。酒井修理太夫殿。

神田はし内。

覇都時代ノ火災



鳥居丹波守殿。酒井左衛門尉殿。榊原式部少輔殿。松平伊豫守殿。黒田豊前守殿。

大下馬。

酒井雅樂守殿。久世大和守殿。松平紀伊守殿。

辰之口。

土屋相模守殿。傳奏御用やしき。御評定御用やしき。

常葉橋之内。

牧野伊勢守殿。阿部豊後守殿。今大路道三丈御用やしき。

大名小路。

細川越中守殿。戸田采女正殿。蜂須賀隠岐守殿。松平備前守殿。本多中務少輔殿。松平大炊頭殿。松平伊賀守殿。溝口伯耆守殿。土井大炊頭殿。織田美濃守殿。松平右近將監殿。松平土佐守殿。

吳服橋之内。

松平丹波守殿。中山出雲守殿。松平越後守殿。

鍛冶橋内。

坪内能登守殿。

鍛冶橋見付焼失。

松平淡路守殿。井伊兵部少輔殿。

右何も數寄屋はし迄。

神田三河町。新白銀町。蠟燭町。鍋町。大工町。皆川町。新穀町。長富町。皮屋町。太物店ぬし町。新大工町。大和町。りうくわん町。松下町。鎌倉かし。白かへ町。紺や丁。本白銀町。本町一丁目。金吹町。鹽町。本穀町。鐵炮町。鍛冶町。乗物町。小傳馬町。本町四丁目。大傳馬町。新大坂町。油町。田所町。富澤町。高砂町。新乗物町。吹屋町。堺町。泉町。難波町。住吉町。六助町。元大坂町。甚左衛門町。堀江町。小鮎町。本兩替町。鞆町。

右日本橋迄。

日本橋壹丁目より四丁目迄。

萬町。青物町。平松町。左内町。式部町。小松町。川瀬千石町。油町。新右衛門町。はくや町。暮政町。岩倉町。福島町。中橋真木町。材木町。

右中はし迄。

南傳馬町。おが町。正木町。さや町。明石町。松川町。鈴木町。稻葉町。常葉町。柳町。杉町。角町。具足町。小川町。竹町。

右京橋迄。

霸都時代ノ火災



日本橋々吳服町。北大工町。數寄屋町。尾張町。干物町。上眞木町。あまた町。こりん町。桶町。南大工町。かぢ町。五郎兵衛町。疊町。北紺屋町。

右京橋迄。

南紺屋町。太刀賣町。弓町。新肴町。彌左衛門町。京橋四丁目迄三十間堀。

右不殘燒失。

北八丁堀。

牧野壹岐守殿組やしき。

北島町。

眞島瑞庵丈。眞島瑞珀丈。坪内能登守殿組やしき。中山出雲守殿組やしき。

龜しま町。

島田長右衛門殿組やしき。

岡崎町。

本多遠江守殿。日向左京殿。細川越中守殿。吉良左京大輔殿。

北八丁堀一丁目々五丁目迄。

日向靱負殿。板見角左衛門殿。坪内能登守殿組やしき。山名中務殿。

幸町。永澤町。日比屋町。靈巖島町。長崎町。れいがんじま新白銀町。

松平大炊頭殿。

湊町元八町堀。

向井將監殿。

右靈巖島まで。

南八町堀。

堀丹波守殿。相馬讚岐守殿。

鐵炮洲湊町。

松平和泉守殿。

鐵炮洲船松町。鐵炮洲十軒町。

黒田伊勢守殿。西尾七三郎殿。松平右京太夫殿。石川兵庫殿。堀田式部殿。奥平大膳太夫殿。神原越中守殿。小笠原近江守殿。松平遠江守殿。堀田主税殿。天野三郎兵衛殿。天野縫殿之助殿。池原雲積殿。澤田三左衛門殿。武部左源太殿。與瀬半左衛門殿。酒井清右衛門殿。桑島孫三郎殿。竹部源八殿。小堀萬之助殿。武田貞庵丈。西野三左衛門殿。鹿尾梅雲丈。

柳原町。

小笠原文内殿。松平藤十郎殿。横田傳之允殿。仙石玄喜丈。小川上總之助殿。天野伊與之助殿。天野彦右衛門殿。藤掛六郎右衛門殿。近藤異泉丈。三浦備後守殿。松平内匠頭。 霸都時代ノ火災



本挽町、築地。

溝口宮内殿。雨宮隼人殿。松平刑部殿。松下刑部殿。松平金七殿。榊原采女殿。岡部大學殿。五島兵部殿。水野主殿殿。堀助右衛門殿。織田奥之助殿。一柳主稅殿。安藤出雲守殿。木挽町三丁目松村町。

紀州様御藏屋敷。伊達和泉守殿。新庄土佐守殿。本多下總守殿。右、是迄不殘燒失。

改人御奉行

矢野常右衛門。沼田文太郎。木内案治。菊地瀧之進。中村丈助。三村源之允。

正月廿五日、晦日迄見分、改以書付之。

——土屋筆記○編年史料收。

二十一日○享保二年正月。

終日烈風、申刻菊坂邊出火之由、押付相圖打。火元小石川出野三郎右衛門殿長屋、段々大火に及、本郷六丁目より一丁目迄、向頗不殘燒失。駿河臺に越、下町に燒拔、一口は水戸中納言綱條卿御上屋敷不殘、大名小路、本町、鐵炮洲に燒拔、翌朝曉鎮る。吉治公○前御下知、一之手二之手不殘本郷御門前町屋に上り防之。御中屋敷より御出馬、三之手四之手御人數不殘駈付、直に本郷町屋に罷出防

之。利章君○前御人數何々御下知にて、御守殿御物見、向町屋一軒消留。亥刻過、最早御屋敷御氣遣無之、御本宅に被爲入、御人數兵糧被下之、押付御中屋敷に

御歸館。近年無之大火也。寺社諸大名悉燒失。神田橋、辰口橋、水道橋燒失。○政郷

廿二日○享保二年正月。烈風、申刻、小石川御旗本出野二郎左衛門殿、及、大、火、本郷六丁目、一丁目、迄、向、側、不、殘、燒、失。夫、駿、河、臺、に、飛、下、町、に、燒、拔、一、口、は、水、戸、中、納、言、綱、條、卿、御、上、屋、敷、不、殘、燒、失。大、名、小、路、本、町、鐵、炮、洲、に、燒、拔、翌、朝、曉、鎮、る。吉、治、公、○、前、御、下、知、一、之、手、二、之、手、不、殘、本、郷、御、門、前、町、屋、に、上、り、防、之。御、中、屋、敷、よ、り、御、出、馬、三、之、手、四、之、手、御、人、數、不、殘、駈、付、直、に、本、郷、町、屋、に、罷、出、防、之。利、章、君、○、前、御、人、數、何、々、御、下、知、に、て、御、守、殿、御、物、見、向、町、屋、一、軒、消、留、亥、刻、過、最、早、御、屋、敷、御、氣、遣、無、之、御、本、宅、に、被、爲、入、御、人、數、兵、糧、被、下、之、押、付、御、中、屋、敷、に、御、歸、館。近、年、無、之、大、火、也。寺、社、諸、大、名、悉、燒、失。神、田、橋、辰、口、橋、水、道、橋、燒、失。○、政、郷、廿、二、日、○、享、保、二、年、正、月、烈、風、申、刻、小、石、川、御、旗、本、出、野、二、郎、左、衛、門、殿、及、大、火、本、郷、六、丁、目、一、丁、目、迄、向、側、不、殘、燒、失。夫、駿、河、臺、に、飛、下、町、に、燒、拔、一、口、は、水、戸、中、納、言、綱、條、卿、御、上、屋、敷、不、殘、燒、失。大、名、小、路、本、町、鐵、炮、洲、に、燒、拔、翌、朝、曉、鎮、る。吉、治、公、○、前、御、下、知、一、之、手、二、之、手、不、殘、本、郷、御、門、前、町、屋、に、上、り、防、之。御、中、屋、敷、よ、り、御、出、馬、三、之、手、四、之、手、御、人、數、不、殘、駈、付、直、に、本、郷、町、屋、に、罷、出、防、之。

——參議公年表○加賀松雲公收。

正月廿二日○享保二年。江戸御上屋鋪八丁堀紺屋川岸御屋鋪共類燒。御上屋鋪ハ、

去々年火後、御長屋計也。本郷阿部伊勢守様ヨリ出火。——御當家年代略記○高知藩

大名坊本邸

享保二年正月廿二日申ノ上刻、小日向ノ馬場ナル井出三郎右衛門ノ宅ヨリ

失火シ、乾ノ風殊ニ烈シク、申ノ下刻ニ及テ、忽チ我邸類燒ス。前邸築地邸皆燒

火災ヨリ、爰ニ至テ。五十六年ニアタル。西ノ中屋敷二筋ト、西ノ表長屋藏十ヶ所物見等殘レリ。公

繼政。○池田ハ分家善太郎殿諱政晴。後愛宕下ノ第二避タマヒシカ、同第狹隘ナル

ニ依テ、同廿四日内匠頭殿諱政鳥越ノ第二ウツラセ、早速西御殿修繕アリテ

霸都時代ノ火災



西御殿モ昔ヨリ少シクシテ、轉移シヌ。廣狭ノタカヒ等アリト云。壽國公當太公。四月朔日爰ニ歸ラセ玉フ。

大名坊前邸

二年○享保正月廿二日ノ大火、安永元年二月廿九日ノ大火、兩度共ニ、本邸ト同シク類焼ス。

鳥越邸

享保二年正月廿二日ノ大火ニ、本邸災ニカ、リシカハ、保國公○池田火ヲ愛

宕下ノ邸ニ避タマヒシカト、同邸狹隘ナルニ依テ、同廿四日此邸ニウツラセ、

四月朔本邸ノ西殿ニカハラセ玉フ。

築地邸

二年○享保正月廿二日小日向ヨリ火起リテ本邸前邸皆類焼シ、夜戌ノ刻ニ及

テ、此邸モ焼亡ス。榮光夫人火ヲ愛宕下ノ邸ニ避サセ、直ニ大崎ノ邸ニ移リ住

支封丹波守愛宕下邸

享保二年十二月廿八日ノ曉、市谷邊ヨリ火起リ、乾風強ク大火トナル處、又愛

宕下藥師堂邊ヨリ火起リ、未ノ下刻此邸類焼ス。善太郎殿長阪ノ別邸ニ避タ

マヒ、翌廿九日我前邸ヲ老中長屋へ移ラセラル。

備藩邸考

一、正月廿二日○享保二年江戸本郷丸山邊より出火、大火に及び、水戸殿諸大名屋

敷、御旗本御被官之衆居宅、町中迄、夥敷類焼、既に御城外、曲輪迄火盛なる故、御

用番御老中に御勤之御真中に、御執事阿部豊後守殿○正より御達書御出來、

御口上御請濟、早速被爲入、兼る御行列之通、御人數被召連、御出馬被遊、猶又御

出馬以後、増火消之御奉書、戸田山城守殿○忠御奉書御到來、御口上之御請

相濟追御請書此日夕七時前出火、翌朝六時頃鎮火す。

火事付る火消被仰付ハ間、早速罷出可被防ハ之ハ以上。

正月廿二日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平安藝守殿

御奉書致拜見ハ。就火事火消被仰付ハ間、早速罷出防可申旨奉ハ畏、早罷出ハ。以上

正月廿二日

松平安藝守

井上河内守様

霸都時代ノ火災



外御三人

増火消被罷出は、御曲輪之内可被防之。以上。

正月廿二日

御老中御連名

御名殿

一、御引取之節、御用番戸田山城守殿、爲御肩、御自身御出、井上河内殿も御直

勤。  
一、正月廿三日、御消留之御場所御書付、可被差出様、阿部豊後守殿に御留守  
居御呼出被仰渡、左之通被差出。

松平大炊頭様

御屋敷

土井大炊頭様

同

溝口伯耆守様

同

松平右近將監様

同

織田美濃守様

同

青山因幡守様

同

右之御方々様御表向御長屋廻り、人数上ク防せし處、段々火廻り申。其内井上左門様御出、小石川之方跡火強ク、間、あれへ人数差向い様と、戸田山城守様被仰、由被仰聞、付、人数引取申。

青山因幡守様

右御屋敷防留申。

一、飯田町迄人数差廻い處、小石川邊焼通り、御臺所町火強ク、付、飯田町之方町屋防せ申。

御臺所町 稻垣求馬様

今川民部様

竹七郎兵衛様

右御長屋防留申い處、仙石丹波守様御出、御見分被成、最早火も鎮り、間、物頭少々差置、其外人數は一橋御門迄差廻し、若火も懸り、は、防い様にと御直々被仰聞、付、人数一ツ橋御門内に差扣い處、引取い様と御使、る被仰聞、引取申。

松平安藝守留守居

生田權左衛門

一、正月廿二日、右火事之節、類焼之者、霞ヶ關に退居、付、釣燈數張被指出、飯酒等被下。御醫師も被差出。

一、正月廿七日、御登城被遊い處、於御白書院御縁側、御老中御列座、る、左之通上意之趣、阿部豊後守殿被仰渡。本文ハ昨廿六日御老中、御連名之御奉書御到來。



此間出火之節

御城程近い處、早速罷出、大儀之被思召、旨、上意也。

此御書付ハ退テ阿部豊後守殿ハ御出之節御直々御受取被遊

——侯爵淺野家回答

正月二十二日<sup>二</sup>○享保二年。鍛冶橋邸屋舎既成、又罹火災。公<sup>二</sup>○蜂須賀。時在國。是以吉武公<sup>一</sup>○蜂須賀。上聞。○同日隱岐君<sup>一</sup>○蜂須賀宗治。吳服橋邸亦災。乃移于小名木澤邸。至于九月二十九日、吳服橋邸新成。於是歸住。

——渭水見聞錄

一、同保。二年丁酉年正月廿二日、本郷より出火、宣紀川<sup>一</sup>○細川。は東叡山火之御番被仰付置、早速彼方に罷越居、内龍口之家宅及燒失、付直に白銀屋敷へ引移申。廿五日火之番御免被仰付、廿九日以上使倉橋内匠御尋被成下。川<sup>一</sup>○細川宣紀譜。

一、正月廿二日<sup>二</sup>○享保二年。本郷筋より出火、及大火、ハニ付、御武器私宅に被指越、并西丸御馬四拾壹疋牽、七被差越、鎮火之上、何者御役人附添御引取相成。伊<sup>一</sup>○直井惟譜。

——寛政呈譜

一、正月廿二日<sup>二</sup>○享保二年。小石川出火。外櫻田御門番御非番之御番所に御詰被留。

遊込處、御奉書之増火消被仰付、御出馬、水野壹岐守様<sup>一</sup>○忠定。御屋敷之御防留。

廿七日阿部豊後守様<sup>一</sup>○正喬。御宅之此間火事之節、御城之火掛り可申處、情を出防大儀之思召旨、上意之趣被仰渡。——中邑世紀祕説

廿二日<sup>一</sup>○享保二年二月。

一、晝八時過、本郷スガモ本命寺門前出火、大小武家屋敷及町屋敷數千軒類燒。林祭酒御父子、其外檀家出入之者共落人六七十人有之、翌廿三日曉火熄也。

——金地院記録

一、廿二日<sup>一</sup>○享保二年正月。出火之龍口邊町屋等類火仕。——増上寺日鑑

——増上寺日鑑

鍛冶橋御門御多門類燒

北條遠江守

一、晝八半時、本郷邊出火、風烈大火之成、遠江守當番中付、早速鍛冶橋御番所に被相詰、御番所不殘燒失仕。夜四時過引取申。直に御用番阿部豊後守様に御届被罷越。

一、公儀に伺御機嫌、夜中故早速は無之。翌日伺御機嫌之御方様御座。遠江

關都時代ノ火災



守儀は、廿二日自身御老中様に罷出の儀、翌日は御使者御番様に申上り。

一、御番所御多門共類焼之付、御相番様に連名にて、御留守居様に御書付御届被申上り。月番大島肥前守様迄御届使者遣申上り。

一、御番所御相番様々、御番所假小屋之相談、此方留守居之者、御相番様御留守居に相談有之。田中孫左衛門罷越。

一、同廿五日御番所橋中杭北之方貳本焼切れ、往來通無覺東段、御伺書左之通。鍛冶橋御番所之橋中杭北之方貳本焼切、橋を十八替ひ、往來之通無覺東、其儘通し可申哉、但橋留可申哉奉伺。

當番  
北條 遠江守 鍋島 加賀守

松平伊豆守殿 大久保淡路守殿

大島肥前守殿 朽木和泉守殿

一、右大奉書切紙を、上包みの紙折かけ、上書とも御四人様之名認、下に連名大島様に持參差出、御用人芦川源助に渡、御番所焼失仕得共、御遠慮伺無之。一、鍛冶橋御番所假小屋建申度、是又元之御番所之處にては、重る御普請之節障に可相成、外に箱番所之方に建申度旨、御留守居様に伺、御連名之御口

上書を以申遣ひ。御答には、御目付中様方可被仰遣ひ間、左様に御心得可被成ひ由申來ひ。御修覆之事、小普請方被仕ひ由、肥前守様方申來ひ。鐵かな物等、一集によせ置可申由、且亦假小屋普請出勤は、御番所被成ひ、御双方様方出申ひ、此段も御伺濟口上之義、御座ひ。出來後御届使者入ひ事。

右御多門大御番所焼失之一件、北條遠江守様御留守居安田平兵衛に承合  
ひ處、左之通右之通敷  
此末なし。 火災要覽

〔参考〕 此災ニ於ケル焼失箇所ハ、柳營日録、土屋筆記略之ヲ悉記スト雖、延焼ノ狀況ヲ詳ニセス。乃チ月堂見聞集ヲ抄シテ、其缺ヲ補フト云フ。享保南志續談海ノ類略ス。

正月廿二日(○享保二年)江戸火事之覺

一、今廿二日風強ク、土煙甚敷立のぼり、斗方無之處ニ、未ノ上、刻、駒込すかも小石川の原町と申處方出火、東北風にて、白山、春日町、とひ坂、水戸様、御屋敷、燒。小川町、鷹匠町、土物店、三河町、大名小路、不殘、櫻田へ燒ぬけ、石町、壹町目、兩替町、さや町、川岸、夫々火飛、西かし、吳服町、上ル、町、壹町目、三町目迄。又本郷方飛火、燒出、二口に成、小石川丸之内、不殘、神田通り、白銀町中通り、方西之方一石橋迄、燒、併和田藏之内、御殘り申ひ。神田橋御門、燒、桶町邊方段々燒、芝ノ方へ何方迄燒申ひや不存。神田方傳馬町へ燒、日本橋東側、あんじん町西側殘り、東側燒ひ。日本橋一丁目、方丁方中橋迄、南側



後藤縫殿屋鋪やけ八丁堀鐵炮洲靈岸島八左衛門島表筋未知レ不申也。  
 一、又々同夜子ノ刻、風替り、神田三河町之残り火にて焼出、俄に西大風に罷成り、神  
 田松下町、鍛冶町一丁目、鍋町、乗物町、白銀町三丁目へ出、小傳馬一丁目へ燒廣  
 がり、石町三丁目、四丁目、鐵炮町、岩付町、本町、四丁目、大傳馬町三丁目迄燒。夫  
 大門通り西側通り燒、田所町、堀江町、堀留、長谷川町、堺町。夫々小あみ町、新堀、靈岸島  
 海迄燒。其外いせ町、船町、小田原町、あんしん丁、未は芝口御門前にて火とまり申也。  
 二十三日卯ノ中刻なり。

江戸町年寄帳面之覺

西、正月<sup>二〇</sup>未刻、本郷丸山阿部對馬守殿近所、御寄合小島六左衛門殿ト  
 申ヨリ出火仕、御弓町通り町片側、本郷一丁目ヨリ六町目迄、六丁目ノ内少々燒殘ル。  
 夫ヨリ小石川上富坂小笠原造酒之助殿、水戸中納言様、但シ百間長屋少々殘ル。夫  
 ヨリ駿河臺へ火出、御臺所町、飯田町下堀切小笠原右近將監殿、内藤駿河守殿、猿樂  
 丁松平伯耆守殿、酒井雅樂頭殿、御中屋敷、植村土佐守殿、水野壹岐守殿、大久保加賀  
 守殿、稻葉丹後守殿、朽木土佐守殿、遠藤主膳正殿、本多宮内殿、其外右之近所諸士方  
 不殘、護持院類燒。明方ハ三河町壺丁目二丁目、四丁目、蠟燭丁、皆河町、松下町、永富丁、  
 下白壁町、豎大工町、横大工丁、新白銀町、新石町、上白壁丁、新革屋丁、田丁、鍛冶町一丁  
 目二丁目、鍋丁一丁目二丁目、向白銀丁、紺屋町一丁目二丁目、龍閑町、鎌倉河岸、其外  
 大和町邊、神田橋御門橋落、夫ヨリ丸之内へ入、酒井修理太夫殿、戸田山城守殿、鳥居  
 丹波殿、酒井雅樂頭殿、久世大和守殿、松平紀伊守殿、大手下馬所腰掛ハ殘ル。夫ヨリ

酒井左衛門殿、神原式部大輔殿、松平伊豫守殿、黒田豐前守殿、小普請小屋近所不殘、  
 戸田采女正殿、蜂須賀飛驒守殿、松平彈正殿、細川越中守殿、傳奏御屋鋪御評定所、森  
 川紀伊守殿、土屋相模守殿、本多中務大輔殿、松平丹波守殿、堀大和守殿、中山出雲守  
 殿、松平大炊頭殿、兩屋鋪、土井大炊頭殿、松平越後守殿、松平伊賀守殿、松平左近將監  
 殿、坪内能登守殿、溝口伯耆守殿、織田越前守殿、松平土佐守殿、松平淡路守殿、御屋敷  
 不殘、燒、鍛冶橋御門燒落、夫ヨリ白銀町一丁目三丁目、四丁目、但シ二丁目片側殘ル。  
 大傳馬町、岡付鹽丁、本石町一丁目、但二丁目殘ル。三丁目、四丁目、鐵砲町、小傳馬丁二  
 丁目迄、本町一丁目ハ燒ル。二丁目三丁目、此兩町殘ル。四丁目、大傳馬丁三丁不殘。兩  
 替町、北サヤ町、此兩町燒失。本船丁半丁、小船町三丁目迄不殘、堀江丁四丁目迄不殘。  
 小アミ町二丁目迄、新材木町、乗物丁、吹屋丁、堺丁、岩代町、泉丁、堀留丁、下船横町、田所  
 丁、長五郎屋鋪、新大坂丁、通白銀丁、東側燒失。此間ニテ殘リハ分ハ、十軒店室町三丁、  
 駿河丁、瀬戸物丁、品川町、河岸、本船丁一丁目、此分五六町程殘ル。此間ニテ西ハ中通、  
 西側之分不殘、御堀切ニ、中通リ東側ノ分白銀丁土手ヨリ品河町、河岸迄ニテ、東側  
 之分殘ル。一石橋燒落、此火日本橋向へ打越、京橋迄ノ内、西ノ御堀切、東ハ本材木丁  
 八丁目迄、材木町堀切、日本橋ヨリ京橋迄之内、一軒モ不殘燒失。京橋ヨリ南へ四丁  
 目迄、此所ニテ東西十三町程。北八丁堀、南八丁堀、同四丁、南北御組屋敷、右之分不殘、  
 本田遠江守殿、松平越中守殿、細川越中守殿、御下屋鋪、松屋町、其外諸士御屋鋪數多、  
 南八丁堀、稻荷橋邊迄。扱又鐵炮洲、海手切、此間ニ御屋敷數多ニ候へ共、聴ト相知レ  
 不申也。築地本願寺ハ殘ル。靈岸島、南新川、長崎丁、鹽丁、トキヤ町、此近所御屋敷方數



多ニテハ、石川八左衛門殿御屋敷、佃島、右二箇所島不殘燒失。同二十一日八ッ過ヨリ夜明迄、町敷二百餘、御多門二箇所、橋敷十一箇所、燒死人百十七人、幅十六丁ニ長一里廿九町之積リ也。御屋鋪方ノ怪我人死人等ハ、此外ニテハ。

此外御徒方萬年記ニハ、正月廿二日<sup>○享保二年</sup>申上刻、小石川筋ハ出火ニ付、火消大名二十三箇所、戸田山城守殿御奉書、御使番菅沼圖書組御徒勤之。<sup>下見エ、基熙公記</sup><sup>○享保二年</sup>正月二十七日<sup>甲午</sup>天快晴、自江戸文到來、二十二日大火、城邊既危之處、無恙、大慶不過、殊大樹<sup>○徳川吉宗</sup>附諸事懇意、喜悅之旨也。凡江戸乾方ヨリ至巽方、五里許燒失云々。予先之年所住神田旅館燒失。老中諸大名盡數燒亡。近年大火云々。猶近日悉以書付可注進旨、用人等文有之者、嗚呼々々。予若年<sup>六十一</sup>時、有江戸大火、城燒了。丁酉歲也。如何々々。萬年記ニハ、凡東西十餘町、南北六十餘町悉焦土。<sup>傳奏之旅館、評定所、神田橋御門、鍛冶橋御門災失。</sup>水戸中納言殿亭始、大小名之家宅數百軒類燒。<sup>萬石以上七十餘人、萬石已下三百九十餘人。</sup>ト見ユ。兼山祕策ニハ、正月二十二日<sup>○享保二年</sup>火災之時分、御本丸ヘモ火ノ子杯參ル。其節火事羽織召ル。<sup>○將軍吉宗ヲ指ス。</sup>御立付ナトハシャウブ革ニテ由。御頭巾ヲハ帶ニ御狹ミ被遊、大ナル戸ヲ御自身御ハツシムテ、其サンヲ御ツタヒ被遊、屋根ヘ御上リ、火之様子御覽被遊。其内一位様御ノキ被遊ルテ、女中杯

出ルヲ御覽被遊、御自身ニ御留メ被成ル由。御輕義、御先代ニ終ニ承モ不及義ニ由故、舊宮人ナト驚目申ル。五月十二日<sup>○享保二年</sup>記。享保南志<sup>○編年史料收</sup>ニハ、一、正月二十二日<sup>○享保二年</sup>之大火、御城内モ無御心許御様子ニ由間、早速致登城、火爲防可申旨、榊原式部大輔殿本多中書殿ヘ奉書附ルニ付、兩人之衆取合、隨分被相勤ル。一、中書殿<sup>○忠良</sup>儀ハ、若君様被成御座ル處に參、隨分火を防ク由、若危き様子ニ由ハ、外之御座所ヘ御供仕ル様にとの御事ニ付テ、屋敷を御出ル節被申付ルハ、御人も多中に仰付ル段、身餘難有義に由間、奥方附之外は、男たるもの一人も不殘追々に御城ヘ參ル様ニ被申付ル由、御遣ル故、屋鋪は女之外一人も殘し不申ル。昔々の記録入たる藏、其外道具藏ニ至迄、一箇所も不殘燒失ル。此段中書殿悦ニ由ヘ共、家中の面々、著の儘に成罷在ル段、當分之儀察入ル様ニ由、吳服所ヘ家中方申來ル由。<sup>下見ユ。</sup>

〔參考〕

二月四日(○享保二年)御書付出ル。河内守被相渡。

此度出火ニ付、屋敷類燒之面々、御曲輪之内屋敷者、定而普請延々之者致し置れ間敷。左ハ、國持たりとも其分限より普請かるく相見ル様に可被致。末々至る者勿論ニ由。別家作大きからざる様に被致可然。爲心得相達。



以上。

二月九日(○享保二年)神田橋外護持院寺地被爲召上、一ツ橋之外明渡被仰付。火除のため御鷹場を成い。  
 享保の初、小石川より火出て、大手先まで焼し時、神田橋の外より雉子橋の前まで、堀端の屋敷跡、芝原となし、俗に東を一番原と云、雉子橋の原を四番原と云。冬春の間は、人をいれず、□□の頃より、秋分まで、貴賤出入して遊行す。其後より上野山下、切通し、増上寺裏門前、佐竹原、采女ヶ原、平川天神の原、大橋のまへなど、火除場と名付、せい院を置、腰かけ茶屋をかけ、貴賤遊行の處になり、古戦讀賣猿樂放下乞食、淨瑠璃などありて、數千人の群集、せりあふばかりなる事や久し。

—窓のすさみ

正月廿三日火災

四、正月廿三日火災 相傳フ、

廿三日<sup>○享保二年正月</sup>晴、南風吹。

午ノ刻、牛込赤城下<sup>カ</sup>出火、護國寺音羽町邊焼失。

—柳營日記記

正月二十三日<sup>○享保二年</sup>書九ツ頃、赤木下より出火、水道丁不殘、同心町不殘、音羽丁四丁目迄燒る。

—土屋筆記<sup>○編年史料收</sup>

同<sup>○享保二年</sup>廿三日、南風、朝四ツ時、牛込赤城明神下河野權九郎屋敷出火、改代町水道町音羽九丁目<sup>カ</sup>目白臺に燒行、晝七ツ時過鎮ル。

一、翌廿三日<sup>○享保二年正月</sup>

南風強く、巳下刻、牛込赤城邊より出火、申下刻鎮。

赤城明神裏門阪下火元、小普請河野十郎左衛門。

類火。

林又右衛門。三田善次郎。三田助十郎。石野傳八郎。大田長十郎。根岸又八郎。長屋計燒る。

水道町片町五十間程。改代町兩側不殘。東古川町。西古川町不殘。

水道町通り。服部坂下の下屋四ツ角四五軒先を留ル。

目白の方不殘。關口水道町。新町兩側。

音羽町六丁目ぎり。

目白の方、駒井町不殘。大泉寺。

法花 長光寺。永泉寺。養國寺。

下屋敷之分、間部越前守。水野對馬守。表通り計り燒る。

關口臺町不殘。蓮花寺、無別條。

右末秋元伊賀守下屋敷きわ迄。

北かわ清水權之助やしきまでを火留る。

通水道町兩側之末、大日堂不殘。

天台 智願寺。辨天堂不殘。善國寺。下屋敷半分、久世大和守。

霸都時代ノ火災



小日向臺新屋敷内之る、

御賄方組やしき。暨一丁横半町程、是之る焼留る。

右兩日都合大名五十八軒。御旗本三百七十五軒。寺十ヶ寺。惣々四百四十三軒。社外也。

高百石以下者、數未相知、故寫し不申。大略計之る。

明曆三丁酉ヨリ今年享保二丁酉年六十一年目也。

續談海

基熙公記○編年ニモ○享保二年二月一日丙天陰、時々雨洒、又見日影、入夜屬霽、自關東有便、

去廿三日○享保二年正月又城西方焼亡十二三町四方云々、廿五日○享保二年正月雨下、聊

火靜云々、何様不靜旨也。ト有リ。月堂見聞集ニハ、江戸小日向之邊出火、久世大和

守殿中屋敷類焼仕。其外少々之出火は、毎日有之。由ト云々、年代災上鑑ニ據

レハ、牛込赤城之町、改代町、中早稻田、古川町、目白下、音羽町邊焼ト見ユ。

五、六月九日火災 相傳フ、

六月九日  
火災

六月九日○享保二年辰之中刻、小傳馬丁、出火、南風之る、柳原、下谷、淺草、屋鋪井寺、

町屋敷多焼失、同日未之刻、千住近郷にて火鎮る。○柳營日次記ニハ、九日、○享保二年六月、今辰刻、小傳馬町三丁

日より出火、箕輪之る申、中刻火鎮。又、傳馬町、出火、下谷邊迄焼、千住邊之る留り申。大方長サ壹里程も、燒申。此節珍敷義に御座。ト有リ。

柳營日録

六月九日○享保二年未中刻過、小傳馬町三町目、出火、増火消、大名七箇所に

御奉書、御使本番土屋敷馬組御徒勤之。

此火事之、下谷御徒組屋敷之内も類焼有之。御徒方萬年記

六月九日○享保二年辰上刻、江戸小傳馬町三町目ヨリ出火、南大風ニテ、龜井町、カ

カ町、馬喰町一丁目二丁目橋本町不殘焼。夫ヨリ本誓願寺前小屋敷多ク類焼、

細川長門守様○興殘リ、手島町燒、馬場ヨリ淺草見付前迄ヤケ、新シ橋通、柳原

久右衛門町一丁目二丁目中根攝津守様ヤケ、佐竹壹岐守様○義松浦備前守

様隣迄焼、大屋敷ハ津輕土佐守様○信松平下總守様○忠燒、村上能登守様、川

上主馬様、佐竹右京大夫様○義燒、長屋ナト殘ル。立花飛驒守様○鑑表御門計

殘リ、其外ヤケ、本多勝之助様○忠燒、夫ヨリ寺町并小屋敷燒、幡隨院寺中不殘

ヤケ、本堂殘、板倉甲斐守様○勝表長屋モ少々燒、寺町本多信濃守様○忠以下

屋敷、太田隱岐様○資ヤケ、夫ヨリ車坂通町家不殘燒、御切手町不殘、金杉通十

町、坂本七町不殘ヤケ、ミノワヘカケ、小塚原仙臺屋敷へ燒拔申。晝七ツ刻火

留リ。凡幅五町程ニ、長サ二里計之積リニテ。月堂見聞集



六月九日<sup>〇享保二年</sup>巳刻前、小傳馬町々出火、廣徳寺焼失、義輪迄焼拔、申下刻鎮火。御近隣火消二組、成瀬友右衛門、荒木津太夫、廣徳寺に罷越、物頭二組、茨木左太夫、近藤三郎左衛門、佐竹様御上邸上野を防、御大小將伊藤半右衛門も、御人數召連、廣徳寺に罷越、御使番山崎九郎右衛門も罷越、御位牌御除く様被仰渡、兩人申談、上野覺王院に奉除、鎮火後、上野に廣徳寺雲巖和尚被參、御位牌被受取、<sup>〇金澤</sup>政鄰記、<sup>〇金澤</sup>御中邸に九郎右衛門參上、首尾言上。

享保二丁酉年六月九日

一、巳之上刻々、小傳馬町三丁目々出火、最前ハ未申之風之様々、其後南ニ成、新橋を越、壹岐守様<sup>〇佐竹</sup>御屋鋪西御屋鋪不殘、御類焼、淺草御屋鋪ハ三四箇處々、百間餘も焼失、夫々津輕右京亮様御屋敷々段々焼來、御上屋敷ハ表御殿、奥御殿、御番所、表御門、御舞臺、同樂屋、十間御物見、馬場御馬見所、長局、夫々東之方御長屋、御馬屋共々、不殘焼失、言語同斷之御事々々、相残りハ處ハ、御土藏ハ壹箇處も無恙、南御長屋無事、西御屋敷、矢倉下御長屋、此貳通之御長屋ハ燒殘、此外西東行間貳通之御長屋、南御門内之外繫ハ殘ル、表御門前外繫、同表辻番所、百間長屋下藤堂様寄合組辻番所ハ殘ル、但東御門脇辻番所、淺草御屋敷

表辻番所、右貳ヶ處ハ燒失。

一、御前様<sup>〇佐竹</sup>義峰<sup>〇佐竹</sup>ハ、則新堀屋敷に被遊、御立退<sup>〇智清院様</sup>ハ、先白泉寺に御立退、被成<sup>〇得共</sup>、風並惡敷<sup>〇故</sup>、夫々總泉寺に被遊、御立退<sup>〇淺草御殿</sup>、御別條無<sup>〇之</sup>、今晚七ツ過、御姫様御同然<sup>〇被遊</sup>、御歸<sup>〇壹岐守様</sup>、求馬様於幾久様御袋様<sup>〇ハ</sup>、本處割下水御下屋鋪に被遊、御立退<sup>〇何方</sup>、<sup>〇後</sup>御機嫌能<sup>〇被成</sup>、御座。

——國典類抄<sup>〇久保田藩</sup>

兼山祕策六月十四日<sup>〇享保二年</sup>、室直清書翰中ニハ、當月<sup>〇享保二年六月</sup>、九日傳馬町々出火、下谷邊延燒、千手邊々留リ申<sup>〇ハ</sup>、大方長サ一里程モ燒申<sup>〇ハ</sup>、此節珍敷義ニ御座<sup>〇ハ</sup>、ト記ス。

〔參考〕 有徳院殿御實紀ニ、

十一月<sup>〇享保二年六月</sup>、松平右衛門督吉泰、松平周防守定達、内藤右京亮義稠、京極若狹守高式龜井隱岐守茲親、岩城伊豫守秀隆、このほど火災のとき、にはかに消防の事命せられしかば、とみにいで、撲滅し、炎暑の折から殊更勞せしとて、褒賜たまふ。火消役藤掛民部永言、石河藏人貞固、出遣て、力をつくし消防せしかば、これも褒詞あり。

〔附記〕 柳營日次記ニ、

關都時代ノ火災



享保二年  
十月火災

東京市史稿

六五二

十月五日(○享保二年)

一、今巳上刻、南横町より出火、紺屋町を、未上刻火鎮。(○月堂見聞集ニハ、書已刻、江戸中橋上横町より出火、南大工町・かち町・桶町・南新道川端切を焼、未の刻火留る、凡二町に四町程下有り。御徒方萬年記ニハ増火消大名四ヶ所へ奉書出テタルコト見ユ。)

六、十一月十五日火災

一、十一月十五日(○享保二年)

巳中刻、本庄御臺所町邊を出火を付、増火消大名衆三ヶ所に御奉書出、御役本番長谷川半四郎組御徒勤之。  
——御徒方萬年記

十一月十五日(○享保二年) 巳の刻江戸本庄回向院邊より出火、折節風強く大火に

罷成、深川靈岸寺・同寺中類焼、八幡迄焼申ル。  
——月堂見聞集

十五日(○享保二年) 巳中刻、本所横網出火、至深川焼失。  
——萬年記

七、十二月十二日火災

十二月十二日(○享保二年)

一、丑上刻、神田横大工町より出火、寅中刻、同所を火鎮。  
○天享吾妻鑑ニハ、日本橋迄焼ル。下見ユ。

——柳營日次記

一、十二月十二日(○享保二年)

十二月十  
二日火災

今子下刻、下町邊を出火を付、増火消大名衆三ヶ所に御奉書出、本御番永田彌左衛門組御徒勤之。  
——御徒方萬年記

一、十二月十二日(○享保二年) 夜丑之刻、江戸神田横大工町より出火、三河町一丁目

二丁目三丁目、鎌倉河岸一丁目二丁目、松下町、白銀町一丁目二丁目、金吹町、右

町一丁目二丁目、大通の方は、廿軒程残る。本町一丁目二丁目、大角北側残り、通

り町の方は、四軒程残る。南側大黒や九左衛門店西隣迄焼、兩替町、駿河町、三井

兩替店西隣迄焼、さや町不殘焼、品川町は通町より四五軒と、釘店北側やけ、南

側残り、品川町の川岸不殘やけ、同七ツ時にとまる。北風也。凡長さ十町程に幅

——月堂見聞集

八、十二月廿八日火災

十二月廿八日(○享保二年)

一、今曉寅下刻、牛込元天龍寺前小普請諸星清左衛門宅を出火、市ヶ谷上るり

坂上迄焼、辰刻表六番町有賀半左衛門宅へ飛火を、番町糺町、山本町、平河天

神、越後屋敷、貝坂邊、元山王、永田町、愛宕下、増上寺前芝南海手に至り、悉く焼、夜

未下刻過鎮ル。  
——柳營日次記

彌都時代ノ火災

六五三

十二月廿  
八日火災



極月廿七日三〇享保三年夜子の刻過、江戸四ツ谷大木戸舟板横町と申所より出火、西北風強くひへ共、二三町程焼失仕て静謐〇上文。暫時有て、半込山伏町より出火、西北風日夜吹詰、市谷八幡尾州五段長屋の下通り焼貫、夫より堀を越へ見付へ移り、番町大分焼失、麴町三丁目四丁目、永田馬場、外櫻田御屋敷方焼失。廿八日申の刻には火口六七ヶ所になり、虎の門外あたこの下の方、藪小路増上寺北の方より、海手の方へ焼貫申ひ。松平出羽守殿御屋敷、同陸奥守殿海手の御屋敷、諏訪肥後守殿御屋敷、此外諸旗元衆の屋敷は數不知。増上寺の小門一ヶ所、所化寮八十軒、塔中三軒、凡幅一里程に、長さ四里程、夜明方に火留る。

——月堂見聞集

十二月廿八日二〇享保二年於江戸吉治公〇前田歳末御登城之處、辰刻前、半込築戸明神邊へ出火、同時に四谷竹町へ出火、無程糺町へ出火、幸橋邊へも出火、段々大火に相成、御下久世大和守殿〇重御勤、夫々右火事へ付、右衛門督吉泰朝臣〇前并御廣式御勤、夫々櫻田御屋敷風筋不宜被爲入ひ處、風下へ付、御供中御下知る防之。其内物頭手合一組御人數召連參上、重る吉治公附足輕頭青木新兵衛も御人數召連參上、各雖防之、段々大火、御城程近、於御上邸、御城相圖打ひこ

付、前田權佐、藤田内藏允等御定之御人數、何も櫻田御屋敷に追々參上、櫻田御邸へも、何も御湯漬飯被下之、暮頃御歸館、奥之口へ被爲入ひ時分、何も働之段御意有之。

——政鄰記〇金澤藩

一、十二月廿七日二〇享保二年今夜丑刻、四ツ谷鹽町邊へ出火へ付、増火消大名衆壹ヶ所、御奉書御使出、本番本多久五郎組御徒勤之。

一、十二月廿八日。今卯刻、半込邊へ出火へ付、増火消大名衆拾軒に御奉書御使出、本明本多久五郎組本番江原與右衛門組御徒勤之。

——御徒方萬年記

二十八日〇享保二年江都大火、急命ニシテニ公〇蜂須爲増火消〇朝廷元ト有消火官至ハテ。即時乘馬而出、打滅増上寺近邊之火、凡二十五所。  
——渭水見聞錄

酉〇享保二年十二月廿九日、寺内就類焼、歳末御禮無之ひ。此段三、拾坊相觸ひ。  
——増上寺日鑑

一、十二月廿八日二〇享保二年櫻田向屋敷西之方上之段長屋類焼、廿七日夜半、牛込九時過芝海手ニテ焼止ル。



一、御類焼之段御届有之、追而御長屋御再建。

——侯爵淺野家回答

略<sup>上</sup>火事ヲハ殊之外御苦勞ニ被遊、舊臘廿七日<sup>○享保二年十二月</sup>火災之時分モ、御城櫓へ御成被遊、<sup>○將軍吉宗ヲ指ス。</sup>御順見被成ルテ、火事場へ度々御下知ニテ、奉書火消モヒタ物被仰付ル。夫故其時分火事モ脇へヒロカリ不申、風強ク、風下之方へ長ク焼申計ニテハ、翌日火消衆御城へ被爲召、段々消様之事御尋被遊。初ハ御近習衆ヲ以御尋被遊得共、後ニハ火消衆御前へ被爲召テ、何モ罷出ル處、御白衣ニテ、御刀ヲ脇ニ被差置ルテ、御直ニ御意ハ、昨日火災之時分、面々手下之者迄モ精出ル事、委細御存知被遊候、少モ不精ト被思召ルテハ無之ルへ共、市ヶ谷ノ堀ヲハコサセ申間敷義ト被思召ル、アノ所ニテ消様可有之儀ニテハ、向後モ可有之儀ニル間、堀ヲ越サセ不申様ニハ、如何イタシムハ、ヨク可有之哉、此度存寄申上ル得トノ儀ニル得共、當座ニハイツレモハツキリト御請無之故、トカク只今餘所へ御出被成ル、<sup>ヨソへ御出ト御意ハ、定テニ九ナトへ御出ノコト、存ル。</sup>追テ了簡可申上旨ニテ、何モ退出ル由申ル。<sup>三年○享保二年三月廿五日記。</sup>

——兼山祕策

天享吾妻鑑略ス。年代炎火鑑言フ所ハ、略、月堂見聞集ニ同シ。内麴町芝ノ災狀ヲ叙シテ、表六番町有賀半左衛門宅に飛火にて、表六番町二番町裏二番町願正寺

谷四丁目横町通り糺町五丁目々四丁目三丁目二丁目迄焼、但、壹丁目者残る。六丁目も跡火にて半焼。五丁目紀伊殿御館計り残り、外は不殘焼ル。赤坂御門内<sup>○市</sup>町區。松平出羽守焼出、表門之方計少々殘ル。山王下永田町邊平川町越後屋敷之邊不殘、井伊掃部頭<sup>○直</sup>松平安藝守<sup>○淺野</sup>上屋敷は殘ル。松平筑前守<sup>○黒田</sup>屋敷も殘ル。虎之御門之内西北之方内藤能登守屋敷切に焼ル。虎之御門之外へ焼出、愛宕下通り、増上寺前後に焼。但御靈屋本堂は無別條。通り町芝金杉海邊迄焼夜戌の刻火鎮ル。ト有リ。萬年記ハ、廿七日<sup>○享保二年十二月</sup>子中刻、四谷於志町出火、數町災。寅中刻元天龍寺前出火、上瑠璃坂焼失、移六番町、至糺町、元山王永田馬場赤坂御門内、櫻田邊虎門内外愛宕下芝金杉類焼、及翌廿八日戌刻消。ト記シ、基熙公記<sup>○編年</sup>史料收。ニハ、左ノ如ク見ユ。

別紙

享保二酉十二月廿七日夜四度出火、終覺不申ル。細長キ火事、幅ナラシ一丁程

ニ至、長ササシ渡貳里餘ト見へ申ル。

一、五ツ半頃、江戸外谷中筋ト見へ、所不知。四ツ至鎮。

一、四ツ時頃、本郷末ト見ル、板橋邊之由。九ツ前鎮。

關都時代ノ火災



一、九ツ半頃、四ツ谷傳馬町南側裏、大木戸ヨリ一丁半程東出火、權田原マテ焼ル。夜明ヶ前鎮。  
一、七ツ半比、牛込元天龍寺前御細工町ト申所、御金拂方諸星清左衛門ヨリ出火。

〔附記〕 年代炎上鑑ニ、

一、享保三年正月十二日。  
淺草たんぼ關兵部屋敷方出火、御成先不調法之由ニ有、同十六日通塞被仰付之。  
一、同年二月十四日夜、愛宕下新し橋通り田村下總守中屋敷方出火、石野三次郎・諏訪庄兵衛等類焼。

附記

享保三年正月十二日  
火災

享保三年四月廿日  
火災

五月朔日  
火災

十月三日  
火災

十二月五日  
火災

三年戊戌〇享保〇紀元二三七八年 四月廿日戊戌〇戊戌、三正綜覽 小傳馬町一町目〇市内  
本橋區。火有リ、延テ下谷淺草〇市内ヲ燒ク。〇柳營日録。萬年記。月堂見。集。續談海。年代炎上鑑。 五月朔日己酉〇享保三年紀元二三七八年 〇己酉、三正綜覽。五郎兵衛町〇京橋區。火ヲ失シ、鐵炮洲〇市内。及新橋〇市内。邊マテ延燒ス。〇柳營日録。月堂見。集。基熙公記。 十月三日戊寅〇戊寅、三正綜覽。桶町〇京橋區。出火、十町許ヲ延燒シ、〇柳營日次記。月堂見。集。年代炎上鑑。 十二月五日戊申〇享保三年

十二月十日  
火災

十二月廿五日  
火災

享保三年四月廿日  
火災

年〇紀元二三七八年 〇戊申、三正綜覽。小石川傳通院〇市内。附近火有リ、延燒シテ田畑村〇武藏國北。二達ス。〇柳營日次記。萬年記。月堂見。集。續談海。年代炎上鑑。基熙公記。 十一月甲寅〇享保三年紀元二三八〇年 〇甲寅、三正綜覽。東叡山下〇市内。火ヲ失シ、淺草本所〇市内。ニ延燒ス。〇柳營日次記。御徒集。萬年記。續談海。 廿五日戊辰〇享保三年紀元二三八〇年 〇戊辰、三正綜覽。芝口〇市内。火有リ、伊達氏邸〇保科氏邸其他ヲ燒ク。〇萬年記。月堂見。集。伊達治家記。

享保三年火災 其重ナル者ヲ左ニ舉ク。  
一、四月廿日火災 八、  
廿日〇享保三年 申之刻、小傳馬町一丁目ヨリ出火、南風ニテ大傳馬町・油町・横山町・本柳原・鳥越・淺草寺町燒失、屋敷モ數多類燒。同夜戌ノ下刻火鎮。此時加藤大藏少輔〇泰。戸田備後守居宅モ燒失。  
一、四月廿日〇享保三年 申上刻、小傳馬町二丁目出火ニ付、増火消大名ニケ所御奉書、本番林藤四郎組相勤。

四月廿日〇享保三年 申の上刻、江戸石町通・小傳馬町二丁目北側新道ヨリ出火、同

霸都時代ノ火災



三丁目迄焼、通小傳馬町二丁目より三丁目迄北側焼貫、油町、鹽町、横山町三丁目迄。馬喰町一丁目より四丁目迄。淺草見付残り、伊奈半左衛門殿屋敷焼。岩井町、柳原岩本町一丁目より三丁目迄。淺草本願寺御堂やけ、新寺町、同鳥越焼通り、酒井左衛門殿御中屋敷不殘焼。牢屋は跡やけにて不殘焼。淺草新寺町方へ焼通り、淺草八幡裏通り、俵町筋やけ、見付の外御屋敷もやけ。其より南風強く吹續き、千壽迄燒貫申ひ。廿一日酉の刻に火留る。

同三戊戌年四月廿日泰護日記。

一、申后刻小傳馬町へ出火、淺草御屋敷、御裏門、御長屋、御參勤前へ建ひ御厩十三立五元。同御長屋壹通御屋敷無殘御類焼。御上屋敷も危相見得ひ處へ、風替り未申へ成ひ、最前へ南風なる風下へ此處、色々風變りひ故、御上屋敷御別條無之、諸人恐悅不斜ひ。

同廿一日

一、淺草御屋敷御圍、并同所辻番所類焼へ付る、假番所立申ひ、

——國典類抄

一、四月廿日享保三年。神田出火増火消。

——中邑世紀祕說

附記

享保三年四月火災

五月朔日火災

續談海年代炎上鑑略ス。柳營日次記ニハ、二十日享保三年(紀元)四月。未下刻、小傳馬町二丁目市ヨリ出火、戊下刻淺草市大恩寺邊へ火鎮ト見エ、萬年記ニハ、四月廿日(享保三年(紀元)四月)。申刻、小傳馬町二丁目市出火、南風、柳原下谷、淺草市邊數十町燒失。此時淺草寺境内計雨降、外晴天、世人爲奇特事ト記ス。

〔附記〕

月堂見聞集ニ、

同(○享保三年四月)廿六日晝、江戸南大工町二丁目市の裏の町筋より出火、二町程燒失、金銀引替所の裏は燒け、本宅無別條。

二、五月朔日火災

五月朔日享保三年。未ノ下刻、鍛冶橋外五郎兵衛町へ出火、新橋迄燒通り、亥之中刻火鎮。屋敷方四十軒燒失、西本願寺本堂殘、寺中不殘燒失。——柳營日録

一、五月朔日享保三年。

未中刻、五郎兵衛町へ出火へ付、増火消大名七ヶ所に御奉書出。御使本番中山主水組御徒相勤之。

——御徒方萬年記

朔日享保三年。午刻、江戸京橋五郎兵衛町ヨリ出火、疊町、北紺屋町、南紺屋町、稻葉町、鈴木町、サヤ町、スミ町、片町、八丁堀、舟軒堀、木引町、尾張町、鐵炮洲、西本願寺

關都時代ノ火災

六六一



本堂ハ残り、寺中計焼、酒井主馬殿本多下總守殿御屋敷焼、新橋見付迄焼、二日ノ朝五ツ頃火留ル。

五月朔日○享保三年江戸火事一説、朔日未上刻、江戸中橋五郎兵衛町あづまや甚左衛門と申者ハ出火、西北風にて、京橋新橋見付迄不殘焼。夫より本材木町六丁目より八丁目迄焼、三十間堀七丁不殘。夫より築地奥平大膳殿御屋敷、脇坂淡路守殿御屋敷、其外大名旗本衆小屋敷大分焼失。本願寺御堂は残り、寺中は不殘焼。凡そ幅廿町程に長百二三十町程の積り也。——月堂見聞集

一、朔日○享保三年晝八ツ時、中橋五郎兵衛町ハ出火、夜八ツ時過消静リ。依之從方丈回文來ル。如前記早速三十坊に相觸ル。——増上寺日鑑

一、同年○享保三年朔日、中橋通出火、増火消、所々御防留。  
一、五月五日御登城之節、去朔日出火、増火消、出情之段上意之趣被仰達、左之御方様御同様。

松平伯耆守様○本庄資俊、松平和泉守様○相馬此方様尊胤、松平紀伊守様○信重、丹羽左京大夫様○尹重、仙石信濃守様○政房、——中邑世紀祕説  
築地邸

翌三年○享保三年五月朔、五郎兵衛町ヨリ失火シテ、築地御屋敷平長屋板カコヒ等焼失セシヨシ、舊記ニ記セリ。——備藩邸考

柳營日次記ニハ、未後刻五郎兵衛町出火、西之上刻、鐵炮洲海手ニ有火鎮。ト云ヒ、基熙公記○編年史料ニハ、自江戸文到來、朔日○享保三年午後大火出來、及戌刻消云々。凡及三十餘町。但横三四町歟。去月初大火、及三十餘町云々。兩月大火、如何々々。ト記ス。萬年記續談海其他異事ナシ。

〔附記〕年代炎上鑑云フ、

十八日○享保三年六月夜四ツ時、門前濱松町三丁目裏店方出火ニ有、四方程類焼、寺内惣火消有馬玄蕃頭殿御奉書火消、千石兵庫殿、眞谷貞詮察及類焼ハ付、消口其外者別儀無之ハ事。——増上寺日鑑

一、同年○享保三年九月十七日、小石川御藥園芥川小野寺御役所方出火、依之十月七日小野寺遠慮被仰付之。

三、十月三日火災ハ、

十月三日○享保三年

未中刻、中橋桶町より出火、申中刻同所ニ有火鎮。——柳營日次記

十月三日○享保三年未刻、江戸南まき町二丁目○年代炎上鑑桶町トス。より出火、夫より桶町

覇都時代ノ火災

享保三年  
六月九日  
後火災

十月三日  
火災



新道不殘、桶町一丁目二丁目燒、南大工町一丁目二丁目燒、南かぢ町一丁目新道不殘、燒五郎兵衛町北側半町計、南側五六軒燒、たゝみ町北側やけ、夫より通りへ出、南傳馬町兩側半町計、同二丁目三丁目表通り裏通り不殘、燒同日酉の刻に火留る、凡十町計燒失。

——月堂見聞集○年代炎鑑略

〔附記〕

一、同年(享保三年)十一月廿五日(○萬年記廿六日ニ作ル)午ノ下刻、中橋方出火、日本橋近所迄燒ル、申ノ中刻火鎮ル。

——年代炎上鑑

十二月三日(○享保三年)未の刻、江戸築地飯田町二町餘燒亡、海手に至リ自然に消る、凡二町四方也、北大風にてはげしくいへとも、海邊故早速しめり申い。

——月堂見聞集

四、十二月五日火災

十二月五日○享保三年未后刻、小石川傳通院後商家出火、至駒込、千駄木谷中、田畑村燒亡、西下刻消。豎一里半餘、横八丁程。

——萬年記

一、十二月五日○享保三年

未刻、小石川筋方出火、増火消大名衆三ヶ所に御奉書出ル。御使本番本多久五郎組勤之。

——御徒方萬年記

享保三年十一月後  
十二月五日  
日火災

附記

一、十二月五日○享保三年晝未ノ上刻、小石川傳通院之後白山御殿、右之御殿ハ引ケ、旗本屋敷ニ渡リい。之方、馬持長右衛門と申者之家方出火仕い。南大風にて御殿跡之方へ燒、西南風ニ成、駒込不殘やけ、千駄木林、追分ヶ、染井ノ方へ燒、東北へ谷中之さん崎之方、彌風強ク、たはたと申在迄やけ、夜ノ五ツ時ニ火留ル。見渡シい處、幅十町程ニ、長サ二里計モアルへくい。委シキ書付、追る上せ可申い。扱々夥敷火事にて御座い。

——月堂見聞集

六日○享保三年晴

一、八ツ時駒込龍光寺方注進、昨日類火、一字も不殘、燒失、諸道具什物等、火急故悉燒却、土藏一ヶ所、靈屋一軒相殘、寺社奉行檢地奉行にも相届由也、使僧方藏主。

——金地院雜記

同月○享保三年五日未之上刻、南大風吹、傳通院後百姓家方出火、及大火、所々類燒、御上中邸御近隣火消驅付、竹町茶屋町邊方々火防い處に、仙石殿人數入交る。公儀御目附衆被致見分、何方之人數にい哉と被尋い得ば、仙石兵庫人數也と答る處に、此所は加賀宰相殿○前田綱紀家來消口也、度々推參不届之仕形、早く退き、何方にても外の火を可防由御差圖る、此方火消役に被向、御目附衆被



申は、向後何方之火事場に共、加賀守殿御人數消口に、他之火消罷越、入交り於指揮者、何れの火消人數も不苦い條、可被打捨と高聲に被申聞。依之方々之火消人數雖罷越と、右之様子聞之、皆脇々に退く也。此方御人數之消口、御上邸手合四ヶ所、御中邸手合四ヶ所、何も働之様子公儀御役人衆被見届。加賀宰相家來消口と、八ヶ所に札を打置。

—政鄰記

〔参考〕是ヨリ先、十二月三日夜ノ火災ニ、加賀鳶ト幕府ノ火消仙石久治○兵庫組トノ間ニ争鬪有リ。

享保三年十二月三日夜、本郷三丁目之後御弓町前田伊豆守殿向杉浦才一郎宅より失火、坪内惣兵衛組同心下田勘右衛門屋敷借地、中川伊豆守組御普請松浦氏。折節乾風烈敷。此方一番火消奥村長左衛門かけ付い處、町内之者も未相見。御人數を以消留い。扱少々屋根より下立い處へ、下屋の方より仙石兵庫人數、消口の旨人々呼はり、かけ上り、纏も上申。御人數之内、鳶者并御纏持共申。此方消留い處、跡より參り狼籍之旨斷申聞い處、鳶口等を以散々に打損、御纏を奪取可申旨仕。互に引合い内、御纏潰れ柄折申。屋根より四五人も落申。残りい鳶者堪忍不仕、口論に及び上、近所より丸太の柱二本取參、なき倒に

仙石氏の者六七人もたゞき落申。内に火は猶更滅申。然處仙石兵庫、火消留い旨呼はり、て、人數引舉可申と仕。御使役半田權左衛門歩立に罷成。兵庫殿側ニ參、兵庫殿は、始終本郷町通。路にひかへ居被申候。加賀守人數早速罷出消留申。御目付御使番衆も未御見得不、被成。に付、相達可申御方無御座候。依之御届申上い旨申述い處、兵庫殿自分之者消留申旨に申。に付、左様に有は無之旨申。處、長左衛門罷越。長左衛門は先達てあなた與力へ其段申入置。但重る兵庫殿へ直に可申入と存、本郷町中迄罷越、乍馬上拙者義一番に罷越消留申。旨申述い處、兵庫殿手前小身者と被存、乍馬上被申聞いと存。旨被答。に付、長左衛門は與力中へ申聞。體にもてなし、返答は不仕。て、權左衛門へ暫示談仕、馬より下り、側に立寄。へば、言葉かけ被申。て、拙子人數怪我致。家來の儀は不苦い、御扶持人有之。與力同心共納得。不仕。加賀守殿○前田綱紀。儀は、同姓共も被召出、常々御心安被成。故、他とは違申。へ共、右の趣は、其分に難仕。重ても加様の儀無之様に可致、僉議。加賀守殿御爲にても、無益の儀争論。て、騒動に及び旨被申。長左衛門申。いは、加賀守常は嚴重に申付、未々の者別して口論不仕様申渡。第一公義



被<sub>レ</sub>仰渡<sub>レ</sub>筋も御座<sub>レ</sub>但、其場の首尾次第の義に御座<sub>レ</sub>故、只今の通の義も御座<sub>レ</sub>此方より争<sub>レ</sub>ひて火を脇に仕<sub>レ</sub>義は曾て無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>其證據には、本郷湯島の町火消共罷越<sub>レ</sub>に付、無<sub>レ</sub>構此方の梯をかき、水等掛させ申<sub>レ</sub>御人數も左様の儀に<sub>レ</sub>へば、申談<sub>レ</sub>義御座<sub>レ</sub>私一番に罷越消留申<sub>レ</sub>様子は、所の名主源右衛門と申者、初終見届罷在<sub>レ</sub>以來の儀は申談<sub>レ</sub>様に可<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>旨申述<sub>レ</sub>退<sub>レ</sub>時分申<sub>レ</sub>は、私罷越<sub>レ</sub>時分、せばき所ながら、人も込入不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>故、馬上にて爲<sub>レ</sub>防申<sub>レ</sub>先刻與力衆へ可<sub>レ</sub>申談<sub>レ</sub>と存、馬上にて申上、不調法の仕合存<sub>レ</sub>旨、挨拶仕<sub>レ</sub>。火事場ニテ、陪臣馬上ノ儀、當正月被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>趣ハ、方角大名火消衆五丁脇ニテ歩立ニ可<sub>レ</sub>罷成<sub>レ</sub>旨也。依<sub>レ</sub>之、兵庫殿被<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>敷。但此度ノ火消役トハ違<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>様ニ候。二番組火消高田左大夫かけ付<sub>レ</sub>は、少間も有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。左大夫參<sub>レ</sub>時分は、一番御人數并仙石殿人數騒動に及<sub>レ</sub>時分にて、火は滅申<sub>レ</sub>に付、人數は上不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>。但御纏は態と庇の上へあげ申<sub>レ</sub>。然處一番御纏持罷越、其纏此方へ渡<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>へと申<sub>レ</sub>。渡不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>處、散々争論に及<sub>レ</sub>。御纏添足輕井左大夫も、色々制止<sub>レ</sub>へ共、聊聞入不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>。乍然纏は渡不<sub>レ</sub>申、事外騒動に及<sub>レ</sub>故、其儘に仕、引まとひ御人數舉申<sub>レ</sub>。三番火消中黒六左衛門罷出<sub>レ</sub>節は、彌火も鎮り、其場の様子も不<sub>レ</sub>承<sub>レ</sub>に付、例の通に御人數引

舉申候

一、長左衛門權左衛門其夜駒込御邸に罷越、一々言上致<sub>レ</sub>處、御前へ被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>召、御聞届、長左衛門儀早速罷出<sub>レ</sub>故、一段の首尾に被<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>。但、鳶者様子不<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>旨御意、權左衛門申上<sub>レ</sub>は、夜中の儀、其上事聞しき時節、御人數の働などもしかと見届不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>て、不調法に奉<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>旨申上<sub>レ</sub>處、左様に可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、身共先年竹町にて火本通<sub>レ</sub>時分など覺有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、中々何れと申こと見分らる、ものにて無<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>と御意にて、退出仕<sub>レ</sub>處へ、兵庫殿與力より、兩人方へ書狀指越<sub>レ</sub>。其の狀の趣は、兵庫家來中間十五人傷つき、其外公義御扶持兩人有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、御届申入置<sub>レ</sub>趣に付、則入<sub>レ</sub>御覽<sub>レ</sub>處、被<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>御念、御紙面の趣致承<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>、追て自是可得<sub>レ</sub>御意と、無<sub>レ</sub>障様に可<sub>レ</sub>申遣<sub>レ</sub>と被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>、其通に申遣<sub>レ</sub>。あなたの紙面一々請<sub>レ</sub>ひて、返事相調、入<sub>レ</sub>御覽<sub>レ</sub>處、加様の儀不入<sub>レ</sub>ことに、輕く可<sub>レ</sub>申遣<sub>レ</sub>旨被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>事。

一、御横目宮崎長大夫其場へは不<sub>レ</sub>罷出<sub>レ</sub>へ共、右の様子并死人も有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>様に承及<sub>レ</sub>に付、聞番澤田源大夫誘引、早速駒込へ迄參上、致言上<sub>レ</sub>。其夜中、源大夫を以兵庫殿へ御挨拶被<sub>レ</sub>仰遣<sub>レ</sub>。兵庫殿直答、被<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>御念、早速御使者被<sub>レ</sub>成下、



被召出常々御心易被成故自分家來等怪我仕事は其分に存れ乍然御扶持人も有之其上今夜此方人數一番に消れ上に御家來中爭論に被及びに付與力同心共存念有之體に同役共も如何可存れ哉左へば其分に難致存れ此段御家老衆迄被申達ひて御家來御吟味も有之様に仕度旨被申れ源大夫申れは一々承知仕れ其段可申達れ但御人數を以一番に御消被成趣は如何可有御座れ哉此方火消共消留申れ旨申迄にて無御座れ處の名主源右衛門等其外にも加賀守人數一番に消留申れ其御心得被成れ様仕度之旨申罷歸れ○政鄰記ニハ十二月三日○享保三年夜刻本郷火御近隣火消與村長左衛門高田左大夫足輕頭中黒六左衛門秀基御使番代御大將半田權左衛門馳付消留一軒燒れ不殘燒失右火事此方御人數最中火を防い處々公儀火消仙石兵庫殿御人數來り此方階子登を押し留り上り得者屋根を傳ひ或は扉を越へ此方御人數居り此方兵庫殿人數數人揚りて此方御人數を過半屋根を押し留す御纏と俱に被押し落れ怪我人も少々有之御纏折れ得れ共何れも輕き事也然るに被押し落れ者又其儘屋根を走上り仙石殿之與力中黒に向ひ口杯を打伏たしき落す依るあやまち人過半也依る仙石殿等有之間様子可被其許御人數と兵庫人數及爭論兵庫人數過半あやまち人死人等有之間様子可被見届と云其節中黒いかと返答にや右與力刀に手を懸る中黒も刀に手を懸既に危き所驚御人數大勢馳寄何者なれば此方之大將に手向や夫れ打殺せ驚口を被存れ哉早速引太鼓を爲打人數を被引取り時分に半田被向今夜の火事消

口は此方にて由被申處に半田云加賀守人數一番に馳著火を消れへは此方消口也と答ふ依る双方及口論い處に本郷町人共大勢馳集り加賀守様御人數消口に無紛いと呼はりい則公儀御目附衆聞届いと被申れ被歸れ故重る○余議も無之兵庫殿は人數引き退參有之此方御人數も引揚り下有り

四日朝より黒坂左兵衛○景村半藏清長屋八郎右衛門○昌并御横目永

原彌平太○政鄰記成田幸右衛門ニ作ル宮崎長大夫○重以上五人を以足輕小頭鳶者等

人々御吟味同夜九時過に相濟口書等差上申れ六左衛門左大夫長左衛門四人も昨夜の様子紙面を以重て御聞届被遊○中本郷湯島に罷在れ鳶

頭四人山下源五大夫召寄昨夜の様子承合れ處此方様御人數にて消留申れ儀明白に御座れ跡より參りしかも何の案内もなく裏の方より人數を舉消口と呼はり儀近頃有まじき作法に御座れ今曉に罷成人數一人不足仕れ若其場に病人も有之哉可相尋の旨申來れ何れも寄合見合仕れへば燒家と隣家との界に死人有之れて遣申れ自分小者提灯持にてれ旨四人共申候

御月番井上河内守殿へ爲御届聞番被遣れ先用人共迄内證申達れ處同心以下に加様の儀度々有之れへ共不及御届れ殊此度の儀は兵庫殿より御



屈有之は、格別にも可有之は、無左は、不入義に存ひ、御控置被成可、然は、兵庫殿より御届は、其上の義に可被成ひ旨申ひに付、其分に罷成ひ。

— 凌新祕策 ○加賀松

〔備考〕

享保年間之記ニ據レハ、前田氏ト仙石久治トノ紛議ハ、前年ニモ有リ。

享保二年正月二十二日備後守様○前田利章、綱紀二子、大聖寺藩主。方角火消御雇のとびの者と、御茶水定火消仙石兵庫殿とびの者と致口論、仙石殿とびの者を半死半生之體に打臥申に付、兵庫殿より、右相手を取可申旨付届け有之處に、喧嘩之儀にいへば、其方之者相果は、此方之者可申付い旨、被仰遣い御様子御尤由御座い。然所兵庫殿より重て々様の義有之は、堪忍仕間敷旨、被申越いへば、夫は其時分の首尾次第と、又被仰遣い由御座い。

加賀松雲公ニ據レハ、此後久治石○仙使ヲ遣ハシテ、死傷者ノ爲ニ償ヲ求ムルコト數回、加賀侯前田綱紀斥ケテ聽カス、更ニ支族前田孝以刀○帶ヲ介シテ、公謝意ヲ表スルニ非スムハ、公裁ヲ請ク可シトノ意ヲ致シ、遂ニ若年寄ニ就キ、之ヲ老中井上正岑河内守ニ訴フ、正岑綱紀ヲ諷シテ、輕卒一人ヲ罰シ、以テ久治ノ體面ヲ全フセシメムト欲シ、久治ヲシテ更ニ迫ル所有ラシム。久治幕府ノ先手鐵砲組頭六郷主馬ヲシテ綱紀ニ説カシム。報セス。十二月八日綱紀大學

頭林信篤ニ寄スルノ書中、此事ニ言及シテ云フ、

(上略)

追申入は、今月三日之夜、御弓町出火に付、手前火消役の者、早速罷越、大方消留、まとい其外雇置は、鳶者少々屋根に相殘、足輕等は下りひる、下火をしめしは處、仙石兵庫殿人數裏の方より梯子を持懸屋の棟へ上り、まとい除申は様に喚り得共、暫まとい立置得者、まとい持共に屋根より打落し、其外屋根に残り居申者共を鳶口などにて打た、き、追拂は故、不殘屋根より落、其節まといも折れ、まとい持強く痛、重る屋根へ昇り申事雖成、手替之者、損申はまといを屋根へあげ、打落されは、鳶者其外足輕等も追々屋根へ上り、兵庫殿人數を追落し申は。此時右人數之内、怪我仕者も有之體は。此方之者共、まとい持の外、鳶者中間等、數人疵付申は。右之様子、重る委細御聞及可被成と存は。其夜一番に參ひて消留させ申は馬上之者、并使役之者、彼地仕廻ひて、直に中屋敷迄夜半頃罷越は故、兩人之者一人宛召出、直に其首尾承届は。然其其夜の儀は故、此方之者共にも不調法成儀有之は、難計、兵庫殿は筋目も有之、前々より申通は故、先使遣はる、一往及挨拶は處、兵庫殿



即逢被申常體之返答にて、扱使之者迄被申趣相違ひ故、翌日より二番三番に罷出ひ火消之者、手前委細相尋、且又頭役之者、目付役者五人申付、足輕并鳶者中間等迄、一々遂吟味ひ處、少も疑敷儀無之、不届之者一人も無御座。兵庫殿も、其場の首尾者見届不被申故、先勢之者共申旨を聞請被申體。右の通手前之者は、遂吟味置ひ間、兵庫殿先勢の者、理不盡之仕形、此方よりとがめ可申事得共、拙者儀其上極老の身にて、不入儀、殊に筋目も有之。兵庫殿の事に得ば、其分に仕置ひ處、其以後何かと被申立、前田帶刀に彼是被申。所詮其夜遣ひ使之者に、兵庫殿被申通、あなたの人數消懸ひを奪取ひ得ば、手前之者共不届至極に存ひ。因此再往遂吟味、其所に潜に人を遣し承合ひても、手前の者共申通、聊相違無御座。然上は、此方より何かと申ひる、事かましく成ひては、兵庫殿首尾如何と、兎角指控申事。乍然萬一若年寄衆迄、兵庫殿被申入、御老中より拙者方に御尋も、はゞ有體に申ひはでは成申間敷。左は、兵庫殿首尾何ともすはりかね可申哉と、此段氣毒に存ひ。畢竟兵庫殿被申立は、何とすへ可申との存寄に御座。い哉、あなたに過仕者得ば、此方にも數人怪我仕者有之。兵庫殿中間一

人相果ひ得共、屋根より落果ひ哉、若又重て彼方の人數を追落ひ時分、鳶口など當り哉、此段も致吟味得共、一向見留申者無之。夜中の儀、其上あなたより追落ひ時分、提灯も大かた消申由得者、拙者など、屋根に居申共、見分申事は難成存ひ間、不見當は必定と存ひ。假令御老中より相果ひ者の相手を出し様にと被御聞ひても、大勢之内咎も無之者を咎人に仕、差出ひ儀、決して難成事。拙者所存惡敷御座は、何分に被仰付ひとても、無是非事御座。多分是迄には及不申、兵庫殿首尾惡敷成可申哉と、千萬無心許存ひ。右の趣其許に申進ひ儀も不入事と見合申得共、兵庫殿事かましく被申體。故、扱如、此御座。手前之儀は、吟味等も透と相濟、何とぞ兵庫殿の方不首尾に成不申様にとのみ存事御座。猶思召も御座は、可被仰聞ひ。拙者方よりわび可申事、聊御座なく、不届の者も無御座。此段御心底決定と御心得可被成。以上。

十二月十八日

加賀 宰相

林大學頭様

二十日信篤此書ヲ老中井上正岑ニ示ス。正岑信篤ヲシテ之ヲ將軍吉宗ノ内

親都時代ノ火災

六七五



覽ニ供セシム、將軍議ヲ老中ニ下ス。御奉行大岡忠相前守命ヲ受ケテ事實ヲ探問ス。久治一面主馬ヲシテ私和ヲ計ラシメ、威赫スル所有レトモ、協ハス。晦日將軍老中ヲシテ久治ヲ召喚シ、將來ヲ戒飭セシム。

基熙公記ハ云フ、同月年〇享保三五日未刻、傳通院裏ヨリ出火、白山札之辻通焼通り、駒込どう坂之臺御鷹部屋焼失。幅三四町程之在郷マテ、西南之風之布凡二里餘焼失、大名衆下屋敷、旗本衆寺社、町屋餘程類焼、酒井雅樂頭下屋敷類焼。柳營日次記ニハ、未刻小石川久保町カ出火、夜之入鎮ル。谷中千駄木之布熄ト見ユ。

此日市谷月桂寺亦災スト見エ、金地院雜記ニ左ノ如ク記ス。

五日〇享保三年十二月。

一、昨日七ツ半時過、市谷月桂寺古木小屋カ出火、手誤之段相届ハ。昨夜見分遣之ハ。手誤に見届ハ。勿論小屋壹軒焼失、類焼も無之ハ。隣松平但馬守殿カ早速走付、常火消參、火元改御目付衆も參ハル、騒動申ハ。平生火之元に心入被仰渡義每度之事ニハ、無念之至ニハ、其元之る遠慮可申付ハ、急度相愼、蟄居仕ハ様に可申渡旨、被仰聞奉、畏之、御請ノ歸家、早速手紙遣す、左に、

申達義有之ハ間、只今入來可有之ハ以上。

十二月五日

松月庵

月桂寺

〔参考〕兼山秘策ニ據レハ、

當地(〇江戸)之事、御察し之通、此間風雨之る、每度火事沙汰さわがしく御座ハ。當十五日兩度之大火之儀、御聞可被成奉存ハ。五日之火事、染井御屋敷も危程ニハ處、御別條無之、日出度奉存ハ。西南風強方カ火飛ハル、行先ふさかりハ故、大分焚死之人有之、不便千萬成義に御座ハ、近所カ早速かけ付ハ様御新令有之ハ故、大勢入込、火消之衆追々に馳加リ、小火之時カ早速切ハ得共、烈風と罷成ハル者、夫も何之益にも無之ハ。けつく大分人數急に詰かけハ故、足弱之者共ふと倒され、亦ハのき端を失ハハル、是にも焼死申ハ由。大平之御代には有間敷義之る、苦々敷奉存ハ共、日夜火を消し申ハ御詮議而已ニハ、火事出來不申様に仕度事之るハ(〇享保三年十二月書)。

五、十二月十一日火災ハ、

十二月十一日〇享保三年。

一、申下刻、上野屏風坂靈善院カ出火、外構焼、淺草カや町邊迄焼失ハ。

——享保日録



一、十二月十一日三〇享保三年。

申中刻、上野筋出火に付、増火消大名三ヶ所に御奉書御使、本番山岡傳五郎組勤之。

——御徒方萬年記

十二月十一日三〇享保三年。晝未下刻、上野屏風坂の上之臺源龍院と申寺中より出火、西北大風にて大火に成、坂下之寺中は無別條、町屋へ火飛、幡隨院表門通り、廣徳寺之東の方へ焼出、右二ヶ寺無別條、光福寺前稻荷より、淺草の方、町通り二町程焼。夫より南東へ焼出、寺々多くやけ、橋飛驒守様焼、佐竹右京様は無別條、七軒町屋不殘燒、小出伊勢守様半分燒、猿屋町の方へ出、淺草御藏前米屋衆、東は旅籠町迄やけ、尤大六天神の宮は無別條、西はかや町不殘、淺草見付際迄燒、東大川端迄不殘やけ、柳原の方は無別條、本庄へ火飛、御材木藏屋敷は無別條、夫より南回向院の方へ大川端通り焼、回向院前町屋茶屋不殘燒、回向院之堂は残り、隣之大佛寺と申はやけ、一つ目橋際迄不殘、南へ越し、辨財天堂無別條、辨天のうしろ南東へ二町程宛やけ、火とまり申。西は最前かや町の火、北風にかわり南へ飛、兩國橋之前は無別條、藥研堀材木屋衆不殘、南方之屋敷壹軒やけ、火とまり、夜九ツ半時にしつまり。大風故飛火仕に付、幅は左程

も無之に得共、長さ殊外多く二里計も御座。

——月堂見聞集

鳥越邸

享保三年十二月十一日、上野屏風坂ヨリ火起リ、此邸半燒失ス。

——備藩邸考

萬年記、十二月十一日三〇享保三年。申中刻、東叡山屏風坂上梁善院出火、下谷淺草本所若干災。亥下刻消、豎一里半餘、横十町程。ト云フ。續談海年代炎上鑑其他異事ナシ。

六、十二月廿五日火災

十二月廿五日三〇享保三年。丑刻、芝口町出火、肥後守正容科。保陸奥守吉村。伊第宅

災。——萬年記

一、十二月廿五日子ノ刻、江戸芝口ノ邊方出火、松平陸奥守殿吉村。伊達屋敷、是之

御屋敷四町餘も在之、大屋敷也。保科肥後守殿屋敷、此屋敷も廣大之由、此外町

家三町餘類焼仕。曉天に至てしつまり申。月廿五日、江戸芝口松平陸奥守殿

十二月廿九日三〇享保三年。壬申於江府、去廿五日夜子刻、芝口二丁目通丁北門前ヨ

リ失火、西北ノ風烈シク、上邸延燒、北御方嗣君、姫子方、裏門ヨリ木挽町邸ニ火

霸都時代ノ火災

六七九

十二月廿五日火災



ヲ避ラレ、無恙御座マス、第宅ハ奥ニ至マテ不殘燒却、表長屋大手門ヨリ三十間計北ノ方殘ル、中長屋府庫等ハ大半存スル旨、不斷組兩人及小人ヲ以テ、佐藤伊勢田村內藏允言上。

——伊達治家記錄

十二月廿五日○享保三年夜九時過、芝口二丁目カ出火、松平陸奥守殿上邸肥後守様御中邸御類燒。

——政鄰記

四年己亥○享保三年二月十三日丙辰○丙辰、三三田○市內火有リ、高

輪○市內品川○武藏國荏原郡ニ延燒ス○萬年記。月堂見開集。十四日丁巳○享保四年

九年○二月丁巳○正綜覽。下谷池ノ端○市內火ヲ失シ、延テ日本橋○市內ニ及ブ○萬年

見開集。基熙公記。年代炎上鑑。○丁巳○正綜覽。三月十日癸未○享保四年下谷七軒町○市內火有

リ、延燒本所○市內ニ至ル○柳營日記。柳營日錄。萬年六月十六日丁巳○享保四年

○丁巳○正綜覽。神田三河町○市內火有リ。廿四五町ヲ延燒ス○柳營日記。月堂

見開集。

享保四年火災 政鄰記ニ據レハ、

二月七日○享保四年此間度々火事、今日ハ於御上邸十三ヶ度火事板打、是四時ヨ

享保四年火災

二月十三日火災

二月十四日火災

三月十日火災

六月十六日火災

享保四年火災事蹟

リ暮前迄之内也。今日ハ羊角風吹、江戸中ニ亦も度々火事ニ見違騒々數日也、

内實火も過半ニ云々。

此頃火災多カリシヲ推ス可シ。左ニ重ナル者ヲ舉ク。

一、二月十三日火災 左ノ如シ。

二月十三日○享保四年是日未下刻、芝伊皿子丁出火、至品川鈴森灸上、亥刻消。

——萬年記

二月廿日○享保四年亥天曉更後降雨、終日時々下、申刻小雷兩三聲、風時々烈、及晚屬霽、自

江戸用人進文、關東去十三日十四日有火災、委注進之旨也。即加續之、彼地火災、

近年連續、民間愁以外云々。只無慈愍沙汰故、有此災者歟。嗚呼々々。勿謂々々。

(別紙) 二月十三日

一、申ノ刻過、芝三田臺町ひちり坂貳丁目より出火、北ノ方魚亂觀音堂近

所燒失、いさらご町邊より南へ燒出、芝海端へ出、泉岳寺と申禪寺、庚申堂不

殘。如來寺と申大佛堂不殘、海上禪林と申額之有之○東寺○東表通り、八ッ山

品川茶屋町兩側、東海寺門前、品川寺門前ヨリさ水通り濱川と申所迄燒申

以、凡長サ三十四五町餘、幅ハ所々ニヨリハる二三町も、又ハ壹町も在之。

二月十三日火災



—基熙公記編年史料收。史

大崎邸

同保。○享四年三田臺町ノ失火ニ、土州家ハ別第焼失セシカハ、玉仙院殿保國公御姉君ノ御事。火ヲ此邸ニ避タマヒ、シハラク御逗留アリシカ、此年三月廿三日ニ至リ、此邸山ノ御茶屋成就セシカハ、山ノ御茶屋新ニ造ラレシニハアラサルヘシ。正徳元年山ノ御茶屋腰掛ノ處添地ノ事、上文ニモ見エタレハ、此度造リ替ラレシモノナルヘシ。爰ニ移ラセ、明ル五年マテ住セ玉フ。

—備藩邸考

柳營日録月堂見聞集ノ類、異事ナシ。

二月十四日火災

二、二月十四日火災 ハ、

十四日○享保四年二月。巳下刻、下谷池之端御數寄町より出火、申上刻、常盤橋外町屋○享保四年二月。なる火鎮。

—柳營日次記

一、同○享保四年二月。十四日巳ノ下刻、下谷池ノ端きんたい圓向同朋町ヨリ出火、廣小路兩側、長者町邊、筋違橋邊へ焼拔、柳原いづみ橋邊ヨリ内へ焼、小柳町、白かべ町通リ、新石町邊、三河町邊町通リ、燒、金田半右衛門、不殘燒失、神田元御殿跡町ノ方御長屋通リ、隣養安院屋敷裏ノ方、鎌倉かし米屋之邊へ焼、夫ヨリ白

銀町、石町、吳服町、二文字屋ナト、燒、本町、吳服所、不殘、桔梗屋ナト、燒、金後藤屋敷○享保四年二月。なる止ル、東ノ方ハ、通リ町通リ、駿河町、越後屋後なる止ル。—基熙公記

二月十四日○享保四年二月。巳下刻、下谷池之端筋より出火、付、大名衆七人、増火消被

仰付、御奉書出、御使十九番組御徒衆勤之。—御徒方萬年記

一、同日○享保四年二月。四ツ時、下谷方出火、同日七時鎮ル。—増上寺日鑑

〔參考〕柳營日次記ニ、

十七日○享保四年二月。定火消、酒井主馬

右被爲召、去ル十四日出火之節、黒田豐前守屋敷飛火所々燒立、消留、兼る相、定、残番の勤方相守、故、豊前守屋敷燃立、節、早速手にあひ、無相違、仕形思召、爲御褒美、時服五被、下旨、老中、大和守申渡之。

〔附記〕柳營日録○萬年記、基熙公記略ス。ニ、

同夜○享保四年二月。十四日、亥ノ刻、愛宕下田村下總守中屋敷方出火、遠山七郎右衛門、阿部益庵、石野三太郎、下曾根新六郎等屋敷類燒。

三、三月十日火災 ハ、

一、三月十日○享保四年三月。下谷七軒町方出火、淺草本所邊迄北西風なる燒ル。○柳營日録略同。

—柳營日次記

幕府時代ノ火災

附記

享保四年二月火災

三月十日火災



三月十日四年○享保 午下刻、下谷七軒町出火、移南本所、限深川海際云六、燒亡。酉下刻消。

——萬年記

三月十日四年○享保 未刻、江戸下谷七軒町より出火、西ならひ風にて、下谷三筋町へ飛火。夫より淺草小田讚岐守様本多監物様御屋敷燒、かや町松平市正様親純。上屋敷河端迄燒。夫より本庄御大名方御屋敷は、大方類燒にて、委細にいまだ知不申。同酉刻火留る。

——月堂見聞集

四、六月十六日火災 八、

十六日四年○享保四

——柳營日次記

一、酉刻、神田三河町より出火、同須田町る火鎮。

一、六月十六日四年○享保 酉下刻、三河町る出火る、増火消大名拾人被、仰付、御奉書出、御使本番飯河善右衛門組御徒勤之。

——御徒方萬年記

同日六年○享保四年 酉の中刻、江戸三河町より出火、須田町、れんじやく町、新白銀町、新石町燒貫。南西風少許吹へ共、折節水道普請を付、水無之、廿四五町程も類燒仕は。

——月堂見聞集

附記

〔附記〕

八日四年○享保四年九月、夜半、京橋出火、五六町燒。

——金地院雜記

九月廿四日四年○享保四年、晝九ツ時、江戸北八町堀四丁目の裏幸町と申所より出火、北風にて、四丁目の表通へ燒出、五町目表裡共に燒申は。

一、享保五庚子年正月十三日夜丑ノ刻過、界町る出火、北風にて、住吉町・高砂町邊燒は。

十六日五年○享保五年正月、夜五ツ過、江戸神田鍛冶町邊より出火、西北風にて、紺屋町廣小路切、同四ツ半に火靜る。鍋町・白壁町燒は。○是時、増火消九大名命セラレタルコト御徒方萬年記ニ見ユ。

——月堂見聞集

廿日五年○享保五年二月。

卯下刻、青山稻葉丹後守下屋敷より出火、辰後刻同所る火鎮。○御徒方萬年記ニ、増火消二大名命セラレタルコト見ユ。

——柳營日次記

五年庚子二年○享保五年三月廿七日甲午三年○甲午、三箔屋町市内、火有リ、

數十街ヲ延燒シ、東叡山下市内、大猷院靈屋亦災ニ罹ル。○享保日次記。

御徒方萬年記。萬年記。月堂見聞集。基源公記。東叡山資料。流芳錄。愚說區。續談海。享保通鑑。有徳院殿御實紀。年代炎上鑑。世說海談。翁草。鹽尻。七月十九日甲

申五年○享保五年紀元二三八夜中橋南鞘町市内、出火、延燒三十間堀・芝口

——柳營時代ノ火災

享保四年  
九月火災

享保五年  
正月二月  
火災

享保五年火  
災

三月廿七  
日火災

七月十九  
日火災



○市邊ニ及ブ。○柳營日次記。御徒方萬年記。月堂見聞集。年代炎上鑑。

享保五年火災 重ナル火災二回有リ。

一、三月廿七日大火 顛末左ノ如シ。

廿七日○享保五年三月。

午刻中橋新右衛門町○享保日錄。緒屋町ニ作ル。より出火、南風烈、日本橋傳馬町通、馬喰町、柳

原、和泉橋、下谷寺町、上野下寺通、上野大猷院様御靈屋炎上、坂本切手町、金杉箕

輪、千住迄焼失。○中略。

東叡山○近に風筋惡敷付、寺社奉行松平對馬守○治。土井伊與守○利。可相越旨、

山城守○戸田忠真。傳達之。同所に火移之由、大久保長門守○教重。相越。大猷院様御堂

に火移○由注進、水野和泉守之。相越付、大目付横田備中守、御目付小笠原

平兵衛罷越。子下刻下谷金杉二町目○之火鎮。

廿九日○享保五年三月。

上使御使番時田讚岐守藤堂和泉守高敏。

右、一昨廿七日居屋敷類焼付、被遣之。

一、佐竹右京大夫○義峯。宗對馬守○義方。當地居屋敷、一昨廿七日類焼之段及上聞、

可爲難儀旨被思召旨、雖爲參勤時節御用捨之旨、家來に山城守宅○之申渡之。

八日○享保五年四月。

類焼之付御暇被下旨老中被傳之。

那須罷在之。太田原頼母

例年御暇雖爲五月、此度居宅類焼付、右之通也。

——柳營日次記

三月廿七日○享保五年。

未上刻、中橋邊箔屋丁出火○南風。自日本橋邊、至柳原下谷、金杉焼失、東叡山大猷院

殿御堂炎上、勅額門○二同坊舍十餘軒災、藤堂和泉守、宗對馬守、佐竹右京大夫已

下類焼多、戊下刻消。今日角田川邊渡御、依火災諸大名固所々本多中務大輔兩國橋警衛、其體協上意旨、有御褒美云々。

——萬年記

一、三月廿七日○享保五年。午下刻、中橋邊○出火。及大火、増火消并御固共、大名拾三

人被仰付、御奉書出、御使本番金田惣八郎組加番牧野新平組○勤之。

右火事、下谷御徒組屋敷類焼、東叡山仁王門初○焼失。下寺坊中類焼、大猷院様

御靈屋御類焼。

——御徒方萬年記

三月廿七日○享保五年。晝九ツ半時、江戸中橋箔屋町梅田やと申足袋屋より出火

にて、日本橋邊鹽町、堺町邊、伊勢町、舟町邊、馬喰町邊より、淺草見附を越し、鳥越

彌都時代ノ火災



邊、柳原、佐久間町二丁目より、京極加賀守殿○高、新庄駿河守殿○直、藤堂和泉守殿、本多彈正少弼殿○忠、佐竹殿、寺町邊妙經寺○杯も焼申○。千壽の小塚原邊焼申○。下谷邊へ焼出、跡火にて、又々吳服町、西川岸、駿河町、瀬戸物町不残、本町一丁目少々残り、東は傳馬町邊皆焼、白銀町より段々乗物町は残り、鍛冶町一丁目へ焼出申○。一丁目より向側二丁目不残、下白壁町中程迄焼残り、正月之火元邊へ焼出、鍋町の東側の裏店、小柳町、黒門町、松田町、佐久間町二丁目の筋へ出、須田町筋より佐久間町の一丁目は残り、神田新地増上寺替へ地焼、下白壁町半町程、淺草邊の火段々下谷金杉邊に出、上野山へ入、下寺拾四軒、山上の寺三軒、以上上野の寺拾七軒焼、廿日御佛殿と上野の祖師堂焼申○。箕輪迄出、相馬殿は残り焼留る。火本の近處俳諧師不角とやらん、藏作りにて七人重り焼死申○。日本橋邊にて五人三人づゝ、所々にて大分死申○。西川岸木藏六七ヶ所續焼申○。日本橋東の土手藏餘程焼申○。米店の外所々藏穴藏夥敷焼也。淺草觀音堂并寺内残り、幡隨院の寺内焼、本堂は残る。此外類焼不及詳、別に圖あり、凡そ長さ二里餘、廣狹は所に依て十町十五町程の不同あり。委細は此次にあり。

同○享保五年三月廿七日午の下一刻、江戸日本橋東三丁目より出火、亥の刻火鎮る。火元箔屋町三丁目櫻田屋喜兵衛、薄や町三丁目新右衛門町○くれまさ町式部小路、左内町、平松町、音羽町、青物町、萬町、四日市、土手迄不残、日本橋より南へ三町不残、御堀端町少残る。吳服町より一石橋通り御堀端迄不残、燒、小さや町、駿河町、室町三町共に、拾軒店、常盤橋外迄焼、御堀端は残る。本町二丁目三丁目不残、一丁目少残る。かね吹町、石町四丁目迄、小田原町、大舟町、伊勢町、小舟町、堀江町、堀留町、大傳馬町三丁目共、通油町、新道共、馬喰町三町共に不残、鹽町片側残る、淺草見附迄不残、但見附は残る。小傳馬町不残、大門通白銀町土手切不残、一丁目少残る。紺屋町、廣小路、向残る。かぢ町一丁目少残る。新石町不残、鍋町片側残る。是表三丁目程残る。松田町、富山町、三島町、平永町不残、小柳町三丁目少残る。同中通表五軒程残る。松平伊豆守○信、中屋敷不残、富田甲斐守、曾我七兵衛、伊奈半左衛門、依田内藏助不残、高松町、橋本町四丁目共に不残、久右衛門、橋豊島町○がわ町不残、伊藤三次郎、同九郎右衛門、細川長門守○興、那須與市不残、佐久間町二丁目三丁目不残、京極加賀守○高、表通長屋表門残る。新庄駿河守不残、藤堂和泉守表門切、西方長屋残る。松平右近將監○清、中屋敷不残、朽木土



佐守綱。中根内匠不殘、酒井右衛門佐眞。中屋敷不殘、宗對馬守東方長屋少殘。藤堂佐渡守陳。不殘、同和泉守中屋敷不殘、大田原頼母不殘、矢田城兵太夫朽守。淺井武右衛門御徒。荒木武右衛門納戸。不殘、御かち町右之方、鹽田惣雲、神尾小十郎鈴木吉左衛門、衣笠宗白井戸清左衛門、桑山六郎兵衛生駒主膳、同主税、本多加平次安部外記、大久保喜六佐竹右京大夫峯。不殘、松下總守忠。川端主馬、天野彌太郎村上能登守、松平小文次、松平式部少輔時。野田三郎左衛門、竹村太郎左衛門、表通り少燒、七軒町半分燒、本多彈正忠。西長屋裏少燒、本多唐之助村。北長屋少燒、化藏院、立花飛驒守春。水野壹岐守、松平縫之助、小出外記、天野丹後守、禪藏寺、細井九助、村田惣右衛門、小林孫四郎、不殘、稻荷町、不殘、勇念寺、全德寺、不殘、前通町、不殘、上野下迄燒、稻荷殘。西正寺、東福寺、不殘、板倉式部、西長屋少殘。瀧野文壽、神保玄太郎、正法院、宗禪寺、西照寺、正安寺、西光寺、常林寺、涼源寺、源空寺、照光院、正法寺、長徳院、燈明寺、天瀧寺、不殘、幡隨院々中計、不殘、山崎町、御貝足町、不殘、養生院、法清寺、不殘、坂本三丁目迄、不殘、四丁目片側殘。金杉町一丁目切にて燒留る。

上野山之内、廿日御佛殿燒、龍仙院、青龍院、福壽院、東漸院、現龍院、銅龍院、法正院。

一乘院、妙乘院、覺應院、眞如院、清正院、朱膳院、燒。

——月堂見聞集

此春庚子三月七日享保五。東都下谷災あり、餘災東叡山に及び、院々多く炎燒せし其中に、我公の御宿坊顯性院もはからず烏有となれり。同し六月十四日命をかうふりて土木の事にあつかり侍り、同し廿三日彼山へ移りて假なる所に住侍りし、いとやうかはりてをかし、夏ながら風すしく侍るゆうへ、

萩すき曾よや吹くる風の音に秋ならぬ庭も露そみたる。——鹽尻

同享保。五庚子年三月廿七日

一、未刻前、日本橋々先づく屋町々出火、南風烈ひ故、處々に火移り、御上屋敷御殿、御長屋御厩等少も不殘、類燒、御土藏之分は何れ無恙ひ。御屋敷は未刻過にも御類燒に可有之存ひ、御上屋敷御殿其外御長屋火移り燒立ひを見ひる、何れ申合、淺草御屋敷に參、御殿御屋根に上りひ、燒ほこり飛散、惣る危く存ひ處に、淺草御屋敷、西御屋敷、柳原御屋敷、壹岐守様義。御屋敷無御別條、安堵致ひ。智清院様、御姫様には、總泉寺に御立退、御殿御別條無之ひ故、今夜中御歸館被遊ひ。依之爲、伺御機嫌罷出、御目見仕ひ。御前様には、日暮里御屋敷へ御立退被遊ひ。

——國典類抄田久保



廿七日 ○享保五年晴。

一、午上刻日本橋南二丁目より出火、南風強烈、下谷上野迄夜中大火、寅刻鎮ル。

廿八日

一、大和尚御登城月次御禮出御無之由、靈屋焼失故也。

一、下谷邊に火事見廻、治右衛門使者被仰付、上野御門主其外大名旗本御調志之方見舞被仰付、高德寺類焼。  
——金地院記録

三月廿七日 ○享保五年。烈風、小松川邊御成有之。今日午刻過、日本橋南三丁目薄屋

町より出火、御中邸遠板打ひ處、風筋不宜に付、觸拍子木被仰付、三之手御人數御上邸に被遣、中川式部押出ひ處、本郷口御門より御出馬に付、御跡に付、茶屋町より御先に乗出、多胡源五左衛門長屋要人御纏奉行御大小將村上左衛門三十八人頭山下源五大夫、御先手富田主税、武藤庄兵衛、御家老中川式部、水手與力罷越、御急に付、騎馬之前後無構驅付、段々及大火、上野大猷院様御佛殿御類焼、廣德寺并桂松院上野覺王院へ、御持弓頭村田縫殿右衛門、御先手小堀左兵衛に御人數御渡被遣、御使番坂井八右衛門指添被遣ひ得共、右三ヶ寺共類焼、御上邸一二之手相揃、吉治公前御行列に、御邸内御乗通、御下知夜に入、段々火

も遠く、御屋敷御氣遣も無之に付、御人數に兵糧被下、三之手御人數、戌刻過御返、亥刻前御歸館、南御門より御出、御先騎馬御使番富永數馬、御先手伊藤平太夫、御集奉行御近習番高島善太夫、定番頭大野木舍人、御使番渡邊傳藏、御表小將御番頭水原清左衛門、物頭並松尾縫殿組頭並中村典膳、御跡騎馬、右火事翌廿八日卯刻鎮火。  
——政鄰記

基熙公記續談海、享保通鑑寛政重修諸家譜、有徳院殿御實紀、東叡山志料、續日本王代一覽ノ類略ス。

〔參考〕 享保五年三月廿七日火災ノ日、將軍吉宗方ニ葛西ニ放鷹ス。

廿七日 ○享保五年三月。葛西の邊に御放鷹あり、御みつから鶴一を狩得給ふ。けふ午の刻はかり、小菅村の伊奈半左衛門忠達が別墅に渡らせ給ひしほど、通町中橋の邊に火起りて、南の風烈しく、日本橋傳馬町、柳原、淺草、下谷の邊に焼ひろこり、東叡山車坂下の僧院に火移りしかは、やがて大猷院殿靈廟に延焼し、坂本、金杉、箕輪の市街にも及びて、子の刻過る比ほひ、漸火はやみぬ。よて東叡山には、水野和泉守忠之、少老大久保長門守教寛寺社奉行松平對馬守近禎、土井伊豫守利意、大目付横田備中守由松、目付小笠原平兵衛常春



馳むかひ、指揮を傳へて消防せしめ、日光門跡のもとへは、使番石野八太夫  
 範種御使にまいる。此災により、かへさせ給ふ御道の警衛とて、本多中務大  
 輔忠良・稻葉丹後守正知・土井甲斐守和知奉はりて、家人をひきゐて、兩國橋  
 永代橋のほとりにはせむかふ。又けふの供奉にもれし兩番の士、みな騎馬  
 して、道々にはせ集る。さて御狩場にては、火災のさま見て參るへしとて、小  
 菅の御憩息所より徒士を兩國の橋までつかはされしに、久世大和守重之  
 御船をむかへ奉らんとて、この所にはせ參り、目付渡邊外記永倫もて、火災  
 のさまを聞えあげしかば、綾瀬の橋より御船に召れ、大川の流れにしたが  
 ひ、永代橋の邊にて上らせられ、茅場町より中橋の市街を過ぎ、鍛冶橋の門  
 を經てかへりいらせ給ふ。御道の警衛せし輩は、士卒をまとひ、其所々にて  
 拜伏し、馳せつきたる兩番の士は馬より下りて御かへりの供奉せしとな  
 り。日記。遠御  
 成一件。

——有徳院殿御實紀

本多中務大輔良<sup>○忠</sup>は總州古河城主也。享保年中江戸詰の砌、川筋御成先ニ  
 テ、出火之事アリ。因茲還御ノ御道筋急固メ被仰出、御使番馬ヲ飛シテ諸家  
 へ急奉書ヲ持參ス。家々ニハ御奉書到來スルト否、待設タル人數の面々ノ

蒙仰タル持口へ繰出シ、其河岸河岸ヲ警衛ス。斯テ川御座ニテ還御成處ニ、  
 河岸ニハ家々ノ纏ヲ立、其下ニ人數ヲ備テ、御舟近クナレハ、上下共ニ平伏  
 ス。是ヲ上覽有テ、段々川筋ヲ還御成ル處ニ、遙向ノ河岸ニ纏ハ無ク吹貫計  
 立タル固場アリ。公<sup>○徳川  
 吉宗</sup>御覽アリテ、アレハ誰カ固場ト御尋也。本多中務  
 大輔カ持場也ト申上ル。偕其邊へ御舟近付シカハ、中書牀机ヲ離レ岸端ニ  
 出テ、自身計平伏シ、總人數ハ後ノ方ニ嚴重ニ相備テ、一人モ平伏セス、御舟  
 ヲ守リ詰テ、スハト云ハ、ト待設タル勢ヒ也。此體ヲ遙ニ上覽有テ、御機嫌  
 麗ク、サスカ中務ハ家柄也ト譽サセ給ヒシトカヤ。其後間モナク中務大輔  
 ニ老中ヲ仰付ラル。或人此吹貫ノ事ヲ稱美シテ、實ニ纏ハ火方ノ具也、警固ノ印  
 ナレハ、火方ト差別セラレシ事、尤家柄ノ嗜、格別也ト感畢。

——翁草

忠良<sup>○本多</sup>享保五年三月二十七日葛西に遊獵したまふとき、日本橋邊よ  
 り失火ありて、火勢いよく烈し。これにより、忠良に奉書を下され、すみや  
 かに出馬し、老中久世大和守重之と相議し、人衆をひきゐて、戎具をしたか  
 へて兩國橋をまもる。已に還御ほどちかきに及ひて、火を避のかれむとす  
 るものとも充滿して、橋を渡らむとす。忠良御道警固の輩に告げるは、目前



に死傷せむこと、見るにしのびず、後日御咎あらば、忠良其罪にあたらむとて、こと／＼くかの衆人をわたらしむ。二十八日營にめされ、きのふ火ありしとき、忠良兩國橋を守りて、其はからひよろしく、御船よりも台覽ありしところ、こと／＼く御むねにかなへり、これつねに意を用ふるのいたすところなりと稱譽せらる。

—寛政重修諸家譜

基熙公記、御徒方萬年記、有徳院殿御實紀附録、異説區々、世説海談、流芳録等ニモ、此時ノ事見ユ。○幕府カ柳原佐久間町、神田紺屋町ノ市街ヲ撒シ、之ヲ火除地トシ、神田川堤ニ柳ヲ植エタルハ、此災ノ結果也。

七月十九日火災

二、七月十九日火災 顛末左ノ如シ。

十九日○享保五年七月。

夜中橋南鞘町カ出火、三十間堀御門之中町屋ニ而芝口迄焼ル。

—柳營日次記

一、七月十九日○享保五年。

同日亥中刻、中橋邊カ出火ニ付、増火消大名衆八人被仰付、御奉書御使本御番山岡傳五郎組御徒相勤。

—御徒方萬年記

十九日○享保五年七月。

一、亥ノ下刻日本橋サヤ町カ出火、三十間堀通新橋見付ニテ火鎮、二丁餘ニ十  
四町斗。

—金地院記録

七月十九日○享保五年。亥下刻、江戸南鞘町二丁目ヨリ出火、北風、一丁目迄、松川町二丁目、塗師町、鈴木町、稻葉町、常盤町二丁目、具足町、スミ町、柳町、材木町七丁目八丁目、傳馬町二丁目ヨリ四丁目迄、竹町、桶町一丁目半丁焼、大工町、鍛冶町、疊町、紺屋町、弓町、新肴町、彌左衛門町、鍋町、數寄屋町、尾張町、銀座町、卅軒堀一丁目ヨリ八丁目迄焼、廿日明六ツ時火留ル。凡幅二丁長サ拾三丁。

—月堂見聞集

續談海年代炎上鑑等異事ナケレハ略ス。

〔附記〕

附記

享保五年  
八月後火災

十四日○享保五年八月。晴

一、今曉増上寺前失火、建長圓覺宿坊類焼。

—金地院記録

六日○享保五年十一月。

巳中刻、鐵炮洲築地金六町ヨリ出火、同所飯田町ニテ火鎮。

—柳營日次記

六年○享保六年火災正月八日庚午○庚午、三正綜覽。吳服町○市内日本橋區。火有リ、延焼

霸都時代ノ火災



正月八日  
火災

正月廿八日  
日火災

二月七日  
火災

二月九日  
火災

三月三日  
火災

三月四日  
大火

十二月十日  
日火災

シテ築地京橋區ニ至ル。柳營日次記。御徒方萬年記。月堂見年(紀元二三八一年)正月○庚寅、三正綜覽。麻布善福寺門前火ヲ失シ、芝愛宕附近ニ延燒ス。○柳營日次記。御徒方萬年記。月堂見年(紀元二三八一年)○戊戌、三正綜覽。四谷

中殿町四谷區出火、飛火赤坂今井谷市內邊ヲ燒テ麻布三間屋市

内麻布區ニ至ル。○柳營日次記。百弍錄。萬年記。月堂見年(紀元二三八一年)○甲子、三正綜覽。九日庚子○享保六年(紀元二三八一)二月○庚子、三正綜覽。四

谷傳馬町四谷區火有リ。延燒品川武藏國荏原郡ニ達ス。○柳營日次記。百弍錄。萬年記。月堂見年(紀元二三八一年)○甲子、三正綜覽。神田三河町市內失火、下谷

淺草市千住武藏國南豐島郡等ヲ延燒ス。○御徒方萬年記。月堂見年(紀元二三八一年)○甲子、三正綜覽。江戶砂子年代炎上鑑。後中

四日乙丑○享保六年(紀元二三八一)三月○乙丑、三正綜覽。牛込拂方町市內火有リ、小石川本

郷市ヲ燒キ、道灌山武藏國北豐島郡ニ及ブ。燒死三百餘人、傳通院市內小

亦炎ニ罹ル。○柳營日次記。御徒方萬年記。基熙公記。後中此春六回ノ火災ニ

燒失スル所屋舎十四萬一千三百餘戸、燒死二千百餘人ニ及ブ

ト云フ。○兼山祕策。承寬雜十二月十日丙寅○享保六年(紀元二三八一)三月○丙寅、三正綜覽。神田永

富町市內出火シ、築地市內ニ延燒シ、本所市內出火シ、深川市內

區川ニ延燒ス。○享保日錄。柳營日錄。萬年記。土屋筆記。續談海。月堂見年(紀元二三八一)三月○乙丑、三正綜覽。

享保六年火災 享保年間ハ、江戸市中殊ニ火災多キ時ノ一ニシテ、當時ノ一問

題ト爲リタルノミナラス、市街及防火警察上ノ制度等ニ改易ヲ加フル所極メ

テ多シ。○市街篇政治六年春亦火災多ク、重ナル者實ニ六回ニ及フ。

一、正月八日火災 顛末左ノ如シ。

八日○享保六年正月一、已下刻、吳服橋邊方出火、鐵炮洲南本郷町海手ニ申中刻火鎮。

正月八日○享保六年已中刻、吳服町邊方出火ニ付、増火消大名五人被仰付、御奉書

御使番江原與右衛門組御徒勤之。

御徒方萬年記

六九九

享保六年火災事蹟

正月八日火災



目より七丁目迄不殘、小松町・川瀬石町・南油町・新右衛門町一丁目二丁目、薄屋町・くれ正町・下横町一丁目より二丁目、南横町一丁目、中橋廣小路南側、なか町一丁目二丁目、桶町新道一丁目、桶町一丁目二丁目、松川町一丁目、鍛冶町一丁目二丁目、疊町一丁目新道より南廣小路際迄、塗師町・稻葉町・鈴木町・具足町・鍋町・柳町・竹町一丁目二丁目、夫より東へ堀を越し、木挽町一丁目・紀州様○徳川宗直御屋敷・新土庄・佐守様・伊達遠江守様○村燒、夫より築地の方へ燒、南八丁堀一丁目より三丁目迄燒、四丁目は残り、五丁目より、鐵砲洲・松平和泉守様○乘燒東港町・舟松町一丁目より三丁目迄やけ、稻荷橋燒、同稻荷社やけ、湊橋、夫より北八丁堀一丁目より五丁目迄表通、幸町・平澤町・同心町・山名中務様燒、夫より東堀を越し、東港町やけ、龜島橋、向川口町・南新町通迄やけ、西の下刻迄いまだ火とまり不申、大工町三井御用所、金銀引替所も類燒仕、凡幅五六町程に長さ一里程の由也、此奥に大名屋敷有之。

正月八日、江戸火事書付の内落申分、

吳服町一丁目新道彌次兵衛店・佐次兵衛宅より出火、大名御旗元屋敷五十ヶ所、南八丁堀本多主膳正○康敏・中川内膳正○久忠・井伊掃部頭○直惟・松平和泉守・津

田半三郎・北八丁堀松平日向守・鳥井丹波守○忠利・本多遠江守○武正・吉良左京小濱志摩守・同十郎左衛門・木村養雲・神尾德之助・山名伊豆守・菅沼甚左衛門・日向靱負・伊丹覺右衛門・靈岸島向井將監・御役屋敷・築地新庄右衛門・加々爪數馬・紀州御藏屋敷・伊達和泉守・高野惣八・山下伊右衛門・小川文庵・桑山源七・松平内匠・牧野幸之助・小笠原八左衛門・天野彌左衛門・松平大炊頭○池田繼政・奥平大膳大夫○昌春・五島兵部堀助右衛門・水野主膳正○近真・松平藤十郎・大川兵庫・宮原市正堀主税・本目讚岐守・原田庄八・天野三郎兵衛・津田十五郎・鶉殿甚右衛門・堀七郎兵衛・建部十郎左衛門・小堀萬之助・川口源右衛門・山名三左衛門・西尾與惣兵衛、合五十ヶ所外に町組與力衆、同同心衆、町數八十九町、稻荷橋・高橋是は稻荷橋と筋違にかゝりたるは・稻荷社、右も類燒、凡幅六町半に廿三町程。——月堂見聞集

一、正月十八日○八日敷・日本橋口道々出火、依る奉書御火消。

同日八町堀御屋敷燒失。

正月八日○享保六年・檜物町、邸有池魚災。

此外續談海續日本王代一覽年代炎上鑑其他ニモ此災見ユ。

二、正月廿八日火災 顛末左ノ如シ。

——中邑世紀祕說

——渭水見聞錄



廿八日○享保六年正月

一、子下刻、麻布一本松善福寺門前より出火、愛宕下片桐石見守○貞御使番倉橋内匠屋敷○卯中刻火鎮○柳營日録、麻布善福寺前町屋方出火、麻布西久保增中刻鎮、寺近邊まで焼失、阿部豊後守屋敷も此時焼失、辰ノ

柳營日次記

一、正月廿七日○享保六年

夜子刻、飯倉町筋出火ニ付、増火消大名六名被仰付、御奉書出、御使本番江原與右衛門組御徒勤之。

御徒方萬年記

正月廿七日○享保六年

子刻麻布善福寺門前出火、南風、麻布長坂片カワ、松平越中守殿○定紀州様京極若狭○高戸澤上總介○政小笠原右京、稻葉能登、秋田主水○頼本多彈正○忠海士○下豊後、西ノ窪土器町、愛宕ノ下ウラ町ニテ止ル。此外御旗本屋敷多ク焼。凡ハ、四五町、長サ卅餘町計。

百弍錄○編年史料收

正月廿七日○享保六年

子ノ刻ヨリ廿八日辰ノ刻迄、江戸麻布善福寺門前ヨリ出火、同長坂片側、大久保伊之助殿、松平越中守殿、大納言様御小役人衆屋敷、京極若狭守殿、戸澤上總守殿、小笠原右近殿○忠内藤采女殿、稻葉能登守殿、秋田主

水殿、本田彈正殿、西久保仙石信濃守殿○政ハ残り申ハ。土器町臺馬場三郎右衛門殿、安部壹岐守殿、松平孫太夫殿、愛宕下切通ニテ留ル。富山町安部豊後守殿、切通坂上清龍寺野瀬重次郎殿、天徳寺ハ残り申ハ。但シ裏門前寺内五六軒西ノ久保神谷町二丁限、愛宕ノ下ウラニテ焼留ル。長サ一里ニ横四五丁計燒ケ申ハテ靜謐、其後此ノ飛火残りルヤ、又ハ自火ニテルヤ、又々燃出、片桐石見守殿○貞御屋鋪邊燒失仕ハ。

月堂見聞集

廿八日○享保六年正月

一、昨夜子刻、麻布善福寺門前々出火、西風強烈、辰當院門前に燒、危急之火難防止、京都に急飛申付、急火防止當院無難之段件々申遣、書案左。

急飛啓呈、昨夜子刻、麻布善福寺門前々出火、西風強烈、市兵衛町に火移、西久保通り々愛宕下通、當院近所土器町々今掃除町に移り、藏松は防止、板塀は不殘類燒、同勢門防止のき口燒通り、表門通り兩側板塀不殘燒、門前在家不殘、光寶寺共類燒、松月庵、碧雲軒漸に防止、院内飛火とも隨分防之ハ。尤阿豊後守殿○正同壹岐守殿、松平孫太夫殿、馬場宮内殿、三方門外悉燒通りハ。至極危急之場各々相働、不思議に遁ハ。當院も極る類燒と於當院さへ申ハ間、



其地に相聞に氣遣可被申<sub>レ</sub>。先早速可申遣旨仰<sub>レ</sub>。大和尚御案泰、今日御登城被遊<sub>レ</sub>。院内上下無恙相働<sub>レ</sub>。未火止内、如斯に<sub>レ</sub>以上。

正月廿八日

竹岡治右衛門  
忍首座  
團西堂

桂堂座元

眞首座

平賀清兵衛殿

金地院類焼ヶ所。

表門通西側

一、板塀

三十七間壹尺

内二十八間半類焼、八間四尺引崩。

町境

一、板塀

拾間類焼。

同横通

一、土塀腰板

五間半引崩内壹間之戸口有。

裏門通

一、土塀腰板

三十間内四間焼殘。

一、板塀

拾八間内壹間戸口有。

一、板塀

五十間半類焼、八間四尺引崩。

一、土塀

貳十六間類焼、五間半引崩。

都合九十六間四尺。

—金地院記録

續談海ニハ、同<sub>年</sub>正月<sub>六</sub>廿七日晴、西風強夜八ッ時麻布火元善福寺門前大工平

右衛門店三右衛門より出火、愛宕下迄焼るト有リ。年代炎上鑑略ス。

三、二月七日火災 顛末左ノ如シ。

二月七日<sub>〇享保六年</sub>

今巳ノ上刻、四ッ谷中殿町<sub>方</sub>出火、今井赤坂百姓町、六本木、麻布一本松邊迄焼失、戌之刻火鎮。 —柳營日録

二月七日<sub>〇享保六年</sub>巳刻、四谷中殿町ヨリ出火、鮫ヶ橋紀州様、夫ヨリ赤坂今井谷

へ飛火、吉川左京、坪内能登松、平民部、森川出羽<sub>〇俊</sub>麻生日カ窪鳥井丹波、桑山

信濃宮下町、坂本町一本松へ焼ヌケ、雜式町有馬隼人、松平新十郎、秋月長門守

弘<sub>〇種</sub>三軒屋鍋島丹波、伊達伊織、戸田信濃、戸川玄蕃、米澤出羽<sub>〇政</sub>毛利甲斐<sub>〇匡</sub>

霸都時代ノ火災

七〇五

二月七日  
火災



廣。同飛彈京極壹岐○高。青山大膳○成。凡幅四五丁長サ卅丁、申下刻過留ル。

——百弋錄○編年史料收。

麻布御屋敷之次第

一、寛永十三年以來、御火難之儀、一向無御座ハ事。

但御本門御長屋内長屋之儀者、享保六年丑二月七日四半時、四ッ谷仲殿町ハ出火、北風ニて、風並惡敷、燒失之儀有之、尤委敷儀ハ、享保五六諸事小々之控ニ相見ハ付、略之。

付、御本門ハ西ノ方御長屋之儀ハ、右之節燒失ニ付、同六年江戸御參府之

上、作事被仰付ハ由、相見ハ事。

——邱○萩藩。

七日○享保六。晝北風ニる、四谷中藤町ハ出火、十番河岸ニる燒留、當山ニ御奉書火消衆大久保加賀守殿○忠。溝口信濃守殿○直。牧野幸之助殿○貞。伊達修理亮殿○田村。本多大膳正殿○主膳正。其外十人、火消衆五頭、惣火消之松平出羽守殿○宣。寺社奉行牧野因幡守殿○英。御目付衆稻葉丹宮殿、鈴木伊兵衛殿被相詰ハ。

——増上寺日鑑

天享吾妻鑑萬年記、月堂見聞集、年代炎上鑑ノ類、略ス。讀談海ニハ、二月七日○享保六

二月九日  
火災

年。西北風、晝四半時、四ッ谷仲殿町火元蔭山數馬組同心堀太左衛門屋敷借地、小普譜大島肥前守組岩佐源左衛門○萬年記、岩佐彌五衛門宅。より出火、青山宿芝箕田迄燒、七ッ時消ル。下有リ。

四、二月九日火災 顛末左ノ如シ。

九日○享保六

一、未刻、四ッ谷忍町○享保日錄、傳馬町ニ作ル。末ハ出火、右馬町、左門町、寺町、千日谷、鮫ヶ橋、喰違尾州屋敷、赤坂火消屋敷近所、松平安藝守○淺野吉長。屋敷下之谷まで、麻布谷町ハ狸穴脇、西久保土器町、新堀、三田芝迄燒ル。西北風也。丑刻火鎮。

——柳營日次記

二月九日○享保六年。午ノ下刻、四ッ谷より出火、彼邊悉燒、赤坂邊、谷町、麻布臺、芝新堀邊、三田筋より品川迄燒亡、丑之上刻火鎮。此時竹中彦八郎屋鋪類燒。

——柳營日錄

一、二月九日○享保六年

未中刻、四ッ谷忍町ハ出火ニ付、増火消大名拾人被仰付、御奉書出。御使本番朽木五左衛門組御徒勤之。

——御徒方萬年記

霸都時代ノ火災



一、同日○享保六年二月九日八時過、四谷大番町々出火、芝高輪迄燒失。當山に御奉書火消衆與平大膳大夫殿○昌龜井隱岐守殿○親。十人火消衆松平半左衛門殿、藤掛民部殿、其外大勢、御老中戸田山城守殿○忠。若御老中大久保長門守殿○重。寺社奉行衆土井伊豫守殿○利。松平豐前守殿、牧野因幡守殿○成。御目付衆三宅大學頭殿、高田忠右衛門殿被相詰、通元院別る危故、被相防○通。通元院用事門并稻荷社、戸川兵庫殿境矢來三十間程燒失。

——増上寺日鑑

一、同○享保六年二月九日今日出火左之通。

四谷ヲシ町一丁目近江屋六兵衛火元、ヲシ町三丁目燒、糺町十三丁目一丁目北側殘、傳馬町一丁目ヨリ燒、馬殿町、南寺町、左門殿町、鮫カ橋ノ臺、四谷堀通り、尾張殿○德川板塀燒留ル。赤坂諏訪甚四郎屋布に火飛、夫ヨリ掃除町、東谷町中通リ南へ燒、谷町臺へ火飛、谷町寺町不殘、市兵衛臺、西ノ久保八幡、同所坂下去月廿七日燒跡小屋掛二軒燒ル。加セン坊谷不殘、土器町新堀中ノ橋迄ハ不殘燒、麻布長坂上、三田小屋町山カへ火飛、二町程燒、三田東寺町、聖坂下同坂上二町程燒、臺町不殘、西イサラコ町不殘、芝牛町、東田町九丁目、高畷松平薩摩守下屋布ニテ鎮ル。

——天享吾妻鑑

二月九日○享保六年午刻、糺町六丁目○四谷誤敷。出火、四谷赤坂紀州様松平安藝黒田

肥前、夫ヨリ麻布市兵衛町權田原、カリマメ町、白カ窪芝三田へ燒、酉刻迄止リ

不申、火口三四ニ成ル。

——百弍錄○編年史料收

二月九日○享保六年麻布御屋鋪御類燒。出火○四谷東永屋○八ツ時四谷御門外

——中邑世紀祕說

支封丹波守殿長坂邸

——備藩邸考

享保六年二月九日、此邸火災アリ。

萬年記ニハ、未刻四谷大木戸邊出火、至青山赤坂、麻布、芝、白銀、伊佐良子、燒失、亥刻消ト有リ。續談海、同九日○享保六年二月戌亥風、晝八時四谷忍町火元大屋近江や六兵衛店又右衛門より出火、芝品川宿入口ニ鎮ル。夜八ツ時也。ニ作ル。月堂見聞集、年代炎上鑑、續日本王代一覽ノ類、略ス。

五、三月三日大火 顛末左ノ如シ。

三月三日○享保六年

一、巳刻、三河町より出火、飯田町、昌平橋筋違橋内外、柳原神田明神下、湯島天神下、池端上野廣小路、東叡山仁王門炎上、上野下、東下谷、鳥越邊、淺草觀音寺内、幡

——霸都時代ノ火災

七〇九



隨院近所山崎町切手町坂本千住迄燒夜戌刻鎮。南西風烈。

柳營日記

一、三月三日〇享保六年。

已下刻三河町邊方出火之付、増火消大名四人被仰付、御奉書出、御使本番曾我權之丞組御徒勤之。

朱書

右三河町四丁目方出火、南風強、須田町鍋町柳原邊、神田旅籠町邊、同神明社地、妻戀邊湯島天神社地、下谷筋不殘、坂本、金杉邊、淺草東本願寺邊、夫々橋場總泉寺邊まで類燒。

右火事之由、御徒組屋敷類燒之事、御番所日帳には委は記無之、御徒方書留之内方記置之。

下谷御徒組屋敷類燒如左〇姓名略。

右都合三百四十四人。但、日帳之ハ三百四十六人登記有之。

内、組合貳十五人。右下谷御徒組屋敷、去子三月二十七日中橋方之火事にて類燒之處、期月末滿之又類燒ナリ。

三月四日御徒方御番所日帳

左之通

昨三日出火之付、下谷組御徒衆組頭衆共之三百四十六人類燒、且又今四日出火〇下文ヲ見ヨ。之付、牛込組御徒衆組頭衆とも之九十人被致類燒也。大勢之類燒故、御番休之義不能成也。之付、日數三十日、本御番之節ハ朝夕御夜食共之、且亦加御番ハ御夜食御臺所被下也。様之仕度旨、今日御同役中御寄合御相談之上、書付相認、長門守殿〇大久保教寬。に差上申也。

一、類燒之御組々、御番休不能成也、段銘々可被仰渡〇存也。

一、御組々類燒之段爲御届、最早御支配方にハ參問敷旨、今日御寄合也、御同役中被仰合也。依之拙者も不能越也。

一、今日殿中相替御沙汰不承也。

追啓、昨三日下谷組御徒衆與頭衆二十五人、平組三百二十一人、今四日牛込組御徒衆與頭衆六人、平組八十四人類燒之書付、部屋之差置申也。其趣長門守殿にも書付差上申也。且又今日小右衛門殿詰御番計之助拙者相勤也、問如此御座也。

右之通、同役中に藤四郎被致廻狀也。

彌都時代ノ火災



右之通日帳に記有之、林藤四郎助詰番也。

御徒方萬年記

三月三日○享保六年午の上刻、江戸神田三河町三丁目邊より出火、南風強く神田  
 兩町鍋町新石町須田町桶町連雀町筋違の見付迄焼。夫より見付の外、松平伊  
 豆守殿○信太田備中守殿○資土井甲斐守殿○利松平對馬守殿○近本多唐  
 之助殿○忠屋敷焼神田明神下通りより天神通り、兩社頭無別條、社内不殘燒。  
 天神下板倉讚岐守殿○昌上屋敷、建部丹波守殿○政屋敷やけ、池の端不殘燒。  
 通り、此間大名旗本屋敷焼。南は柳原藤堂和泉守殿○高同備前守殿○藤堂宗  
 對馬守殿○義小出信濃守殿○英此外大分焼け申。惣る下谷廣小路黒門も  
 焼申。堀左京亮殿○直石川宗十郎殿○總小笠原遠江守殿○忠岩城伊豫守  
 殿○秀立花飛驒守殿○鑑下谷の屋敷やけ、聖堂は残り、湯島天神、高德寺前上  
 野黒門前、山下町、金杉、夫より山谷千壽大橋迄不殘類焼。淺草寺町通不殘、御堂  
 誓願寺報恩寺、此外寺大分焼申。淺草通りは無別條、觀音後通り焼出、じやり  
 場田町あさち邊迄焼、夜九ツ時分にとまり申。一町つゞきにもりひて、凡  
 十四五里程も類焼仕。 — 月堂見聞集  
 一同○享保六年三月三日

一、巳之中刻、三河町出火有之、火元六兵衛、同所道三町片輪半分焼、新白銀町一  
 丁目新道共ニ、雉子町一丁目、神田堅大工町二丁目新道共ニ、新石町一丁目、神  
 田鍋町新道共、黒門町二丁目、連雀町一丁目、柳町三丁目新道共ニ、平長町二丁目、金  
 田周防守倉橋八十郎、小宮山武平次、岡丈庵中條平介、山田立甫、山本善甫、鳥居  
 久大夫、蜷川式部、近藤宮内、松平對馬守、土井甲斐守、太田備中守、松平伊豆守、馬  
 場安清、正平橋橋、燒留ル。本多唐之介、同人向屋布、本多五郎右衛門、松平圖書、一  
 柳主税、溝口宮内、堀左京亮、大關信濃守○增小笠原右近將監○忠岩城伊與守、  
 戸田右近、石川主殿頭、井上筑後守○正湯島横町一丁目二丁目迄、神田明神社  
 計殘、芝崎宮内、神田金澤町、同朋町、同御臺所町、小出兵庫原田良阿彌、神谷平  
 右衛門、福原刑部、渡邊平十郎、芦野左門内、藤下總守○正金田小兵衛、玉蟲左兵  
 衛、和田彦兵衛、建部丹波守○政酒井越前守○忠酒井小平次、藤枝若狹守、島田  
 又三郎、酒井大藏、妻戀町新道共ニ、天神臺三組町新道共、湯島天神門前町新道  
 共二丁目、同天神假小屋、井地内共ニ、同石坂町、井切通、シ坂下迄、竹村伊三郎、三澤  
 庄兵衛、小堀主殿、立花出雲守、渥美武左衛門、樋口幸右衛門、吉岡權右衛門、牛窪  
 讚岐守、石川宇右衛門、中村庄五郎、小笠原權九郎、板坂讚岐守、井戸久右衛門、松



平萬右衛門赤井久右衛門千葉兵部門奈伊左衛門高田道葛池之端同朋町三丁新道共ニ、小玉源大夫山岡忠右衛門瀧川久三郎池之端中町二丁新道共ニ、カヤ町二丁上野黒門前町屋兩頬廣小路橋燒落ル。仁王門黒門共ニ、竹町二丁肴店共、上野ノ内慈性院洛蓮院正法院本多久五郎組屋布土井平三郎組屋布下谷御切手町同具足町松風伊左衛門組屋敷佐山庄兵衛組屋布武藏孫太夫組屋布米高半左衛門組屋布小林吉大夫組屋敷靜蓮寺坂本町谷村共ニ、金杉町四丁箕輪町二丁通新町六丁小塚原天王町千住大橋迄橋向川端一丁程不殘三谷町一丁淺草田町三丁慶奥寺幸龍寺門前井町屋共ニ、日輪寺前町共ニ、天嶽寺稱往院門前井ニ町共ニ東光院井町共ニ、海善寺光閑寺曹源寺長徳院源空寺西生寺田原町三丁目西光寺報恩寺誓願寺東門跡寺中二ヶ寺板倉甲斐守屋布少燒燈明寺本多唐之助下屋敷少殘ル。西照寺町共ニ、永昌寺宗源寺町共ニ、淨林寺正安寺正福院東口院埋堀町新光明寺榮藏寺誓孝寺善慶寺妙福寺連光寺蜜藏院觀藏院光仙院榮源寺阿部川町八丁新道共ニ、宗圓寺本龍寺平安寺本明寺成龍院慶大寺萬善寺三筋町一丁松平齋宮戸口藤五郎松平兵庫向井兵庫組屋布本多彈正少弼○忠通宗對馬守小島町佐竹右京大夫○義峰

宮本藤三郎鈴木新之丞磯田藤大夫芥川長永井戸新藏組屋敷小出信濃守野田三郎左衛門松前志摩守松平下總守○忠雅屋敷東方少燒花藏院町屋共、立花飛驒守松平織之助細井九介天野丹後守善立寺法養寺羽田藤左衛門右河清左衛門坂本九右衛門組屋布板倉筑後守組屋布鳳谷寺小石川辻番屋敷小澤伊兵衛小田道立杉源左衛門組屋敷本多伊與守組屋布細井半左衛門皆川左京水野壹岐守組屋布加藤遠江守中川三郎兵衛大島源七郎松平甚兵衛組屋布金田惣八郎組屋敷中山主水組屋布石川四郎右衛門松波甚兵衛犬塚永二柴田三左衛門組屋布山岡傳五郎組屋布長田三右衛門組屋布長者町中小路共ニ、吉田庄兵衛藤堂和泉守上中下屋布牧野新平組屋布生駒殿野村休盛藤堂佐渡守向屋布太田原頼母大久保清三郎野々山新兵衛松永町三丁新道共、

大法○享保六年三十八町程。橫十五町程。

天享吾妻鑑

三月三日○享保六年今年初弔御登城。今日午刻三河町方出火、風烈敷千住町端迄七十町餘燒失。上野仁王門黒門廣徳寺塔頭左之方不殘、長門守様御下邸去年之燒跡、井上筑後殿立花殿佐竹殿等類燒。右火事ニ付、御上邸○所爲入、長門守様御上邸ハ、兩度御見廻、廣徳寺○所爲藤田求馬武藤庄兵衛を以、御人數被遣、御使



番富永數馬被指添。然る處途中燒立難通。ハニ付、本郷に相廻。ハ由、聖堂危く、伊藤平大夫之高島善大夫差添、御人數被遣、藤田等も聖堂に參。ハ様被仰出。ハ由申來。ハ付、何も罷越、茅町にハ、御近所火消。ハ手合、富田主税御人數召連罷越、長門守様之方防之、暮頃御中邸に御歸館之。

——政鄰記○金澤藩。

同○享保。六辛丑年三月三日祐元御歩行頭勤中日記

一、巳之刻、三河町ハ出火、風富士南之る、御上屋敷無殘、御類燒、屋形樣、御前樣、淺草智清院樣、御殿に御引取被遊。ハ御家中も大方淺草に引取申。ハ今日之出火、淺草邊ハ橋場、小塚原、迪千住迄類燒申。ハ總泉寺も燒申。ハ

——國典類抄○久保田藩。

續談海ニハ、同○享保。三月三日富士南風吹、九ツ時三河町四丁目新道大屋荒物屋甚之丞店、鳶三郎より出火、神田邊、下谷へ燒行、上野山門并黒門類燒、夫より山下通り、千住橋迄燒、晝七ツ時鎮る。ハ下見ユ。

六、三月四日大火。顛末左ノ如シ。

三月四日大火

三月四日○享保六年。

辰下刻、牛込木津屋町ハ出火、牛込若宮、津久戸、牛込御門外、牛天神、立慶橋、小日

向、小石川傳通院不殘、炎上、丸山、白山、本郷末森、川宿、駒込、千駄木、谷中邊、又赤城、小日向、簞笥町、白山御殿跡、氷川大塚邊不殘、燒、申下刻鎮火。

——柳營日次記

三月四日○享保六年。辰下刻、牛込筋出火。ハ付、増火消、大名五人被仰付、御奉書出、御使本番向井兵庫組に之助、小出助四郎組御徒勤之。又増火消、大名二人被仰付、御奉書出、御徒右同斷。

右類燒組當番之節、御臺所被下。ハ儀、御供番組も被下。ハ之由、御徒方書留有之。

此三月四日牛込火事。ハ有之ハ、牛込木津屋町ハ出火、牛込御徒町邊、小日向馬場邊、龍慶橋邊、小石川筋類燒、傳通院境内之る怪我人大勢有之、小石川御殿跡邊、巢鴨丸山邊、千駄木御鷹部屋邊類燒、根津谷中邊迄燒、夫ハ飛火、尾久村迄燒。此時牛込三組御徒方不殘、類燒、本郷丸山下之る長田三右衛門組四人、金田總八郎組五人。此日之類燒、御徒方都合九十九人、内組頭六人。昨今當日之火事。ハ之類燒、御徒方都合四百四拾三人。

但此時御徒方十九組之節也。總人數五百七拾人、内殘人數百貳拾七人也。

霸都時代ノ火災



御徒方萬年記

同年○享保六 四日、御中邸御類焼。朝辰下刻、市谷町々出火、南烈風、追付御上邸に可被爲入旨之る、御出之處、早竹町に火移、御通難被遊、護國寺前々西勝寺前、左内坂々御堀端、水戸様前々御上邸に被爲入。御上邸ハ、追分御門まで焼、外御別條無之。御中邸ハ、八時頃焼失也。傳通院富士社本根津等焼失す。寵姫様ハ、御下邸に御立退、九日迄被爲御座。御兩殿様御中邸危由、於御上邸被聞召、御急被爲入。得共、はや御類焼之跡に。御文庫ハ無御別條、其外ハ少も不殘焼失す。七時頃御上邸に御歸、尤今夜々御中屋敷之在住人不殘、御上邸向寄々々同居す。御長屋早速渡。様之被仰出、今夜々取懸り、夫々御小屋札相渡之。

政隣記○金澤藩。

四日○享保六晴。

一、巳刻、牛込神樂坂邊々出火、築土明神邊々小日向之方に焼出、小石川邊傳通院前、東ハ本郷根津邊迄焼失、申下刻火鎮。

金地院雜記

同年○享保六 四日巳の刻、江戸牛込かぐら坂邊より出火、南風強く肴店酒井修理殿房○忠下屋敷、板倉讚岐守殿信○昌さんさきの中屋敷、阿部伊勢守殿福○正丸

山の下屋敷、米倉丹後守殿照○昌牛込の外中屋敷、土井大炊頭殿實○利すがも下屋敷、加賀守殿綱○前田染井の中屋敷、藤堂和泉守殿敏○高染井屋敷焼失。夫より赤木明神井御旗本衆數多焼。夫より小日向立慶橋、萬年門十郎殿、越智彌三右衛門殿、坂本常町坪内玄蕃殿、各務甚五衛門殿、小石川へかゝり、水戸様宗○徳川御屋敷少し焼残り。夫より後通り、牛天神宮傳通院本堂庫裡不殘、焼表門より奥迄死人卒三人、寺内にて死人數百人在之。其外山の内にて死人大分在之。由風聞仕。夫より御簞笥町水戸播磨守殿頼○松平上屋敷、安藤對馬守殿信○友。下屋敷、小石川馬場近所宮城三左衛門殿、小野久米五郎殿、舟越兵庫殿、春日町、白山權現宮、吹上げ丸山、大塚駒込迄やけ、此間屋敷寺方夥數焼。本郷松平加賀守殿、無別條、駒込吉祥寺、酒井阿波守殿本○親下屋敷、巢鴨根津へ焼通り、夫より谷中三崎道權山の端迄焼、右之火事筋之屋敷方町々寺々夥數焼。根津權現は社計残り、町屋不殘、焼申。西、中後南風強くをやみ無之。故、如此に御座。晝の七ツ半時分に留り申。一町づゝつゞけは、十里餘も焼申。

月堂見聞集

同年○享保六 四日、富士南風大に吹き、四ツ時牛込御納戸町火元わしや長兵衛



より出火、小日向筋小石川焼通り、傳通院寺内焼死人三百六十人餘有之、夫此○  
字敷。白山通り・三崎・日堀迄焼、暮六ツ時鎮る。

續談海

略。上。四日。○享保六。五ツ半、半込邊、出火、臺御殿焼失、西御使役長屋後通天  
神坂下迄焼失、臺天神坂方、御守殿御門脇御長屋焼、富坂上御長屋一切殘立  
切御藏殘、坂ノ上御長屋三通殘ル。傳通院不殘、廻、駒込御屋敷之内御長屋燒裏  
御門、表御門、御殿無別條之由、養仙院様みよ様、石川近江守○總。御迎、被、參、御  
城へ御入之由、殿様御送り平川口迄御同道之由、本清院様小石川御屋しきへ  
御入被遊、由、大學様○松平。播磨様○松平。備前守、主水正屋敷焼申、由、兩日  
○享保六年三。共、強キ南風之由、火事未具ニ不相知、不可○此間、脱、由。

河方筆記○編年  
史料收。

年代炎上鑑ニハ、此時傳通院ニ無縁塚ヲ築クコトヲ記ス。

〔參考〕兼山祕策ニ、

火消役之衆へ被仰出、モ、兎角大風之時分、火ヲ消不申、何町程之脇ニヒカヘ  
ル様ニトノ御命令有之、其ヲ背ルへハ御罰責ニル故、此度ナト火ニカマヒ  
不申、前々ハ風下ハ力ニ不及ルへ共、脇ヲ防、火口廣カリ不申故、此度

之様ニハ無之、此度ハ火ニカマヒ不申故、火廣カリルテ、幅廣ニ吹付ル故、

大分人モ焼死申、四月十三日、○  
享保六年書。

享保六年春ノ火災六回ノ被害高ニ關シ、諸書傳フル所左ノ如シ。參看シテ其大  
要ヲ知ル可シ。

三月十日辛未、天陰、又見日影爲雨、不降、及晚晴。

東武去冬○享保  
五年。十二月廿七日以後、又正月○享保  
六年。以來、至今月三日四日、大火

出來、大概城外所々、東西南北其道及五六里、歟、如何々々。

三月十七日戊寅、天晴風聊吹、有餘寒氣。

自關東有便風、三日四日○享保六  
年三月。大火、去年以來燒亡、江戸城外大概燒失、江戸

三分ニシテ二分燒失、五十年以來未曾有云々、五日後雨聊下、仍風不吹、先靜謐

之由也、九日之書狀也、諸人不安心云々、嗚呼々々。

火事彼是依有要事、調書狀、今日遣飛了。

四月九日巳刻、天曉來時々雨下、又見日影、午後屬霽了。

自關東長之朝臣令上京、天英院彌無事、殊大樹御懇切之體云々、阿巳君亦彌息  
災云々、江戸中大火事、於城内委細指圖有之處、江戸中十二シテ七分燒、且又諸



大名以下至幡本、困窮不便之至、言語道斷、云々。又死人不<sub>レ</sub>知其數、大概及千歟、云云。此外事等多端、可記之條、略了。嗚呼々々。

——基熙公記○編年史料收。

當春○享保六年。六度之<sub>レ</sub>火事、燒跡橫幅一町ニ長サ八十九里十三町、家數合十四萬千三百六十軒。

内

武家百石以上之面々、醫師共ニ七千四百十五軒。

寺社小宮共ニ五百六十ヶ所。

陪臣屋鋪町屋共ニ十三萬三千七百二十軒。

右六度之<sub>レ</sub>火事、死人二千百七人。

内

男千五百十六人、女三百三十人、子供八十一人、僧百八十人。

五年以來二度類燒之面々、拜借金被仰付。大小御切米取七千六百十三人。此知

承寬襍錄ニハ、當年○享保六年。之火事ニテ燒失之分、武家屋敷七千三百十五軒、寺社

二百三十七ヶ所、總家數十三萬三千七百七軒、燒死人二千百七人、五ヶ年以來類

燒五千石以下拜借之人數二千六百七十三人、江戸中七分程燒失ト見テ、續談海

ニハ、二月七日九日○享保六年。之燒跡、橫幅一町ニ積リ、十二里半。三月三日四日之燒

跡、橫幅一町ニ積リ、六十二里十三町。武士屋鋪都合七千三百五十七軒、内、千九百

領屋鋪無之、借地之町家數十三萬三千七百二十拾軒。寺社千二百廿七ヶ所。死人二千

百七人ト有リ。亦以テ被害ノ甚大ナリシヲ推ス可シ。

〔參考〕武野八代集ニ、

一、正月○享保六年。八日吳服町より築地迄燒失。同十四日、芝同朋町より海手迄。

同廿日、品川新町燒。同廿七日、麻布より愛宕下迄。二月七日、四谷より麻布迄。

同九日、四谷より芝高輪迄。三月三日、三河町より千住大橋迄。同四日、牛込よ

り染飯迄燒失。右何れ大火。幅貳町ニ積リ、長サ貳拾壹里。江戸初る以來大火、

十人死四萬人。

落首

火消衆火事は消いで肝を消す、なんでもくく江戸はござらぬ。

なんでもくくといふはやり歌去年方謠ふ○中略。

狂歌

革羽織皆著ぬものはなかりけり、風立火事を待し夕暮。

朝都時代ノ火災



見渡せば町も屋敷も此ころは、藏の戸まへをぬりし夕暮。

七、十二月十日火災 其顛末左ノ如シ。

十二月十日<sup>○享保六年</sup>午刻、永富町より出火、鎌倉河岸、白銀町、鍛冶町、本町、石町、傳馬町、日本橋近邊、四日市、八丁堀、築地迄焼失、申刻鎮、同夜本所方、深川迄焼、早朝方北西吹。

——享保日録

十日<sup>○享保六年十二月</sup>午ノ中刻、神田、永富丁二丁目ヨリ出火、西北之風烈シク、三河町、鎌倉河岸、紺屋町、白銀町、石町、本町、四丁目迄不殘、日本橋筋、牧野、因幡守<sup>○英屋敷裏門ヨリ</sup>内不殘、燒失。但裏門長屋殘ル。常盤橋外、河岸不殘、中橋筋、南傳馬丁、茅場町、八丁堀邊ニテ屋敷方少々類燒、靈巖島邊町屋敷多燒失。同所舟松丁二丁目ニテ夜西ノ中刻鎮。

——柳營日録

享保六年丑年十二月十日晝八ッ時、江戸火事之覺

永富町出火、西北烈風、寒氣殊甚。

一、三河町々一丁目計。

一、鎌倉河岸不殘、中橋廣小路にて御堀端ハ留る。一説、また先まてとも申は。

一、通り町ハ、鍛冶町二町めハ吹出し、京橋の一町前迄兩かわ。

一、本町、穀町、白銀町不殘、鐵炮町迄。

一、伊勢町、瀬戸物町邊、兩替町、駿河町、品川町近邊、堺町邊ハ、無何事。

一、茅場町、靈岩島、南北八丁堀、木挽町、築地<sup>但木引丁ハ殘ル。</sup>西本願寺裏、通海端迄、一面

食之押ス。

一、本材木町、卅間堀通燒。

一、日本橋左右前後、一字も殘らず。

一、小網町、小新堀などすらりと。

一、土手藏、四日市ノハ無恙、白銀町ノハ鳥有となる。

一、茨城大左衛門出店も燒ル。

一、惣して橋ハ一ツも不殘、焚死者十餘人有之由。

以上、十二月廿一日寫之。

——土屋筆記<sup>○編年史料收。</sup>

十二月十日<sup>○享保六年</sup>晝九ッ過、江戸神田、永富町より出火、西北風、横大工町、乗物町、鎌倉河岸、白銀町、通り石町、本町一丁目より四丁目迄、十間店、室町一丁目より三丁目、兩替町、駿河町、さや町、品川町、日本橋一丁目より中橋迄、吳服町、川岸通りは残り、夫よりかやば町、本材木町、靈巖寺、島鐵炮洲迄燒貫ル。本舟町、いせ



町米川岸、小舟町切、金後藤は焼、吳服後藤は残る。

一月堂見聞集

十日○享保六風。

一、神田三崎町火出、自午半刻至晡時火止。

——金地院記録

萬年記續談海年代炎上鑑、武江年表ノ類、異事ナシ。

享保七年火災

七年壬寅○享保○紀元正月廿一日丁未○丁未○三小石川餌差町○市川出火、臺所町○市川二飛火シ、延燒田安門○市川外ニ至ル。○柳營

正月廿一日火災

二月五日庚申○享保七年○紀元二三八番町堀端○市川松平甚四郎宅火ヲ失シ、小川町○市川二飛火シ、

十二月六日火災

延テ本郷元町弓町○市川ニ及ブ。○柳營日次記。河方筆。續談海年代炎上鑑。續日本王代一覽。二月六日丁巳○享保七年○紀元二三八神田新白銀町○市川火有リ、鎌

倉河岸○市川ニ延燒ス。○柳營日次記。柳營日錄。天享吾妻鑑。月堂見聞集。續談海年代炎上鑑。武江年表。續日本王代一覽。

享保七年火災 重ナル者三回有リ。

一、正月廿一日火災 願末左ノ如シ。

廿一日○享保七

酉刻、小石川餌差町火出、御臺所町へ飛、小川町飯田町雉子橋外迄燒失。御供揃、不殘御座敷に揃申比。

廿二日

御小姓組番頭 稻葉下野守

一、昨夜大火之付、水戸殿○徳川上使之被遣之。

御目付 平岡市右衛門 仙波七郎左衛門

大久保市郎右衛門 御使 番

一、右昨夜火事之付、御前に被召出、御尋有之。

二十五日

岡部内膳正○長松平周防守○康青山大膳亮○幸井伊兵部少輔○直

真田伊豆守○幸青山下野守○俊

右、去ル廿一日出火之節、御殿向防之御用之立、御機嫌之被思召比旨、老中列座

山城守○戸田申渡之。——柳營日次記

正月二十一日○享保酉ノ刻過、小石川餌差町ヨリ出火、北風烈敷、彼邊町屋燒

失、水戸殿御屋鋪裏門長屋少々類燒。夫ヨリ小川町へ飛火、屋鋪方餘程類燒、飯

幕府時代ノ火災



田町坂中迄焼出、御用屋鋪御長屋并雉子橋御門御堀端迄焼失、同夜子ノ刻鎮、且又左之面々御城内火消被仰付之。

井伊掃部頭○直酒井雅樂頭○親真田伊豆守○道松平周防守○康青山

大膳亮○幸松井左兵衛督○直脇坂淡路守○安

大廣間 松平大和守 御玄關 青山因幡守

御舞臺 井伊兵部少輔 御數寄屋岡部内膳守

右之通、所々へ人數相詰ル。且又御書院御小姓組當番之御番衆御白書院并大廣間へ罷出ル。中奥御小姓衆ハ御黒書院へ被出、何モ火之粉防之由。

——柳營日録

享保七年正月二十一日暮六ツ時、小石川餌差町ヨリ出火、及大火、飯田町御堀端清水御門外迄焼失、風筋惡敷、御城内殿中へ火ノコ來リルニ付、公方様上々様方御退去御用意之處、子刻過火鎮リ故、其儀無御座也。

——承寛襟録

正月二十一日○享保七年

酉中刻、小石川上餌指町カ出火、及大火、増火消十八人被仰付、御奉書出、御使本

番向井兵庫組御徒勤之。尤不足ニ付、加番中山權兵衛組一人加り勤之。右御使御徒二十四人、御湯漬斷、御目付鈴木伊兵衛ハ兵庫申達相濟。

正月二十一日御徒御番所日帳之内

二明組カ長田三右衛門組

右者、大廣間西之方御縁頼火之粉拂申也。

助御供小出助四郎組

右者御舞臺御屋根に上り、火之粉拂申也。井伊兵部少輔人數代り上り申也。ニ付、助四郎組ハ御舞臺前御白砂火之粉拂申也。

加御番中山權兵衛組

右者、御腰物奉行三宅彌市被參、御腰物方御納戸に差越也様と被申聞、七人差遣申也。相殘ル御人、御老中口御屋根に上り、火之粉拂申也。右之人數不足ニ付。

加明組カ朽木五郎左衛門組

右加番組に十人相加り、火之粉拂申也。右之趣共、御目付衆カ向井兵庫に被申聞也。右之通り相勤申也。御徒方萬年記



一、正月廿一日〇享保七年小石川餌指町より出火、及大火ハ付登城、固人數御城に招呼、二之丸御舞臺并御本丸御廣敷に火之粉參ハ付、人數相懸爲防ハ様上意ニ付、則相防せ、御別條無御座、人數引取申ハ。

一、同月廿三日、一昨夜出火之節、早速登城御城内に火之粉參ハ付、火防御用被仰出ハ處、精出骨折御機嫌思召ハ由、御懇之上意之趣、戸田山城守殿被相達ハ。

〇井伊直惟譜。

— 寛政呈譜

廿一日〇享保七年烈風。

一、酉刻、餌指糺町三ヶ所ハ出火、子刻火止。

— 金地院記錄

基熙公記〇編年史料收。正月廿七日〇享保七年ノ條ニハ、自天英院〇徳川家宣夫人近衛氏。文書來、去二

十一日薄暮本丸戌亥間火事出、風烈、火粉甚危、西丸尤烈、然漸寅刻火消。本丸西丸無難、大慶之由也。ト見エ、河方筆記ニハ、於江戸、廿一日暮時ハ上餌指町壘屋ハ出火、臺御長屋、谷御長屋、望月五郎左衛門長屋、小細工所御長屋、瓦御書院御小性長屋、七川の方の南側一並燒失之由、其外同時ニ御臺所町はたもと屋鋪ハ出火、きじ橋筋、飯田町邊も燒失ハた之由、同夜九ツ時、下谷長者町ハ出火、十町計も燒ハた之由、二十二日之朝之狀、同役ハ之遣す。ト有リ、年代炎上鑑ニハ、左ノ如

シ。

一、享保七壬寅正月廿一日酉ノ刻、小石川上餌差町ハ出火、武家町家共燒、北風強、水戸殿御屋形後迄燒、此火先は止り、飛火にて御臺所町南はづれ少々、丹羽五郎左衛門、水野因幡守赤井五郎作溝口式部類燒、水野壹岐守屋敷邊、飯田町世繼稻荷之宮下ハ、御堀端迄燒、近藤隼人高井飛驒守類燒、竹橋外迄、飯田町下橋ハ東は小川町一ツ橋外明地ニ而止り、夜子ノ刻鎮る。

續談海略ス。若夫月堂見聞集ニ、正月廿一日〇享保七年夜、江戸小日向隆慶橋の邊より出火、番町、麴町邊燒貫、小旗本大分類燒、凡長ニ廿五六町に、幅所により五町三町ハの不同在ハ之ハト見ユルハ異聞也。續日本王代一覽ノ所傳ハ、略柳營日次記ニ同ジ。

二、二月五日火災 顛末左ノ如シ。

五日〇享保七年

一、巳刻、壹番町御堀端松平甚四郎屋敷ハ出火、小川町へ飛火、水道橋外本郷元町御弓町燒失、午下刻鎮ル。

— 柳營日次記

二月五日〇享保七年巳刻、大風雨、江戸麴町一丁目邊より出火、一番町御堀端松平

彌都時代ノ火災

七三一



甚九郎殿邊、但し松平阿波守殿半燒。夫より飯田町臺へ燒出、下へさがり、町方不殘、猿樂町邊燒、御臺所筋小川町筋、稻荷小路の内屋敷方、水道橋の外迄、水戸様○徳川宗堯同讚岐守様○松平頼豐無別條、石丸數馬殿、大澤帶刀殿、飛火にて少々燒、其外本郷御弓町杯へも飛火にて、長屋十間計燒、米津周防守殿○田御類燒、火事最中大雨ふり出、火自然と靜る、未の刻に一月堂見聞集

一、同年○享保七年二月五日辰ノ下刻、壹番町御堀端松平甚九郎宅より出火、西南風強、向角松平阿波守長屋に付、半分過燒、飯田町に飛火にて、稻荷前後もちの木坂邊武家、先日之燒残り分、亦燒場の小屋かけも燒、川勝能登守屋敷邊、御臺所町、小川町、大森三次、曾根源藏などの側より、水道橋之内、小林十三郎、小川奎左衛門邊、稻荷小路迄、土手の方皆燒ル。水道橋外は飛々燒ル。此時分大雨ふり出し、得共、先日之出火を多く燒申ハ。亥ノ刻前別る大雨故鎮る。

一、年代炎上鑑  
享保七寅二月八日、快晴。去る五日、於江戸辰刻番丁邊出火、飛火飯田丁出火、御臺所丁、小川町邊、いなり丁、するが臺下燒失。飛火石丸數馬内家燒失。御弓町飛火、本郷三丁目邊燒失、御屋しき風下、南風強く吹、九ツ比北ニ風替、大雨急ニ降

火鎮りぬ由。下町邊にも出火有之ぬ由きた之由。——河方筆記○編年史料收

金地院記録、五日○享保七年二月南風一、辰下刻、飯田町邊出火、午刻火消。ト記ス、續談海ニハ、同○享保七年二月五日、富士南風強、朝五ツ半時、田安御門外松平勘九郎屋敷より出火、少時通小雨ふる。小川町類火、晝九ツ時消る。ニ作ル。前田家譜ハ云フ、享保七年二月五日飯田町火アリ、是ノ日大風火ヲ飛シ、本郷御弓町米津因幡守邸ヲ燒ク。我カ救火隊急ニ赴キ之ヲ撲滅ス。八日大將軍水野和泉守ヲ命ヲ傳ヘシメ曰、去日ノ火本郷ヲ衝ク、乃チ直チニ之ヲ救ヒ、其災府下ニ蒙ルヲ免レシムルモノ、實ニ某シ救火隊ノ力ニ之レ頼ル、然リ其人力ヲ出シ卒然ノ用ニ應スルモノ、某シ平生訓練ノ素アルニ由ル、我レ甚タ之レヲ嘉スト。是ニ於テ綱紀○前田隊長淺加敬卿脇田重通ノ二人ニ金帛ヲ與ヘ、其勞ヲ賞シ、隊卒ニ物ヲ與フル差アリ。

三、十二月六日火災 顛末左ノ如シ。

六日○享保七年十二月

夜酉下○柳營日録刻、新白銀町々出火、子刻鎮ル。○柳營日録ニハ、町家十餘燒失、亥之刻鎮ル。

柳營日次記○柳營日録略 七三三

十二月六日火災

關都時代ノ火災



一、同○享保七年六月六日

一、今夜出火。火元新銀町大屋武兵衛店米ツキノヨシ。夫ヨリ雉子町一町横大工町一丁蠟燭町二丁永富町二丁三河町壹丁目田町二丁目迄焼火。

右出火ニ付、左之通防、

松平中務大輔屋敷へ

増山對馬守屋敷へ

黒田豊前守屋敷へ

右之面々、人数入防之。

十二月六日○享保七年。暮六半時、江戸神田新白銀町より出火、折節北風にて、夫より三河町三丁目二丁目一丁目、蠟燭町、田町、永富町、鎌倉河岸焼切、裏切焼とまり。

鎌倉河岸土藏作切にて、皆々火留り申上、已上。

金地院記録ニハ、六日○享保七年十二月。風一、初更神田筋火災、四時過消ト有リ。年代炎上鑑續日本王代一覽ノ類ハ、皆火元ヲ新白壁町トシ、武江年表ハ新銀町トス。續談海ニハ三河町三丁目より出火ト有リ。孰カ是ナルヲ知ラス。

海ニハ三河町三丁目より出火ト有リ。孰カ是ナルヲ知ラス。

八年癸卯○享保八年○紀元三三三八年。二月十六日丙寅○丙寅三正綜覽。赤坂傳馬町二丁目

海ニハ三河町三丁目より出火ト有リ。孰カ是ナルヲ知ラス。

堀田伊豆守

蜂須賀隆岐守

伊東信濃守

溝口信濃守

丹羽左京大夫

内藤伊賀守

天享吾妻鑑

月堂見聞集

享保八年火災

二月十六日火災

三月七日火災

十月廿四日火災

十二月五日火災

十二月九日火災

享保八年火災

享保八年火災

享保八年火災

享保八年火災

享保八年火災

享保八年火災

享保八年火災

享保八年火災

享保八年火災

享保八年火災

○市内。火有リ、麻布○市内。ノ一部、飯倉○市内。三田、白銀、芝海手○市内。

マデ延焼ス。○柳營日次記。月堂見聞集。三月七日丙戌○享保八年○紀元三三三八

浅草山之宿町○市内。出火、延焼有リ。○天享吾妻鑑。十月廿四日庚午○享保八年○紀元三三三八

芝愛宕下○市内。出火、延焼海岸ニ達ス。○柳營日次記。年○庚午、三正綜覽。芝區。出火、延焼海岸ニ達ス。○柳營日次記。年

十二月五日庚戌○享保八年○紀元三三三八。牛込天神町○市内。出

火、延焼一番町堀端○市内。ニ及ブ。○柳營日次記。月堂見聞集。讀談海。百

日甲子○享保八年○紀元三三三八。牛込山伏町○市内。火ヲ失シ、拂方町○市

附近ニ延焼ス。○柳營日次記。讀談海。年代炎上鑑。

享保八年火災 重ナル火災五回有リ。

一、二月十六日火災 八、

十六日○享保八年

卯刻過、赤坂傳馬町二丁目より出火、氷川後より築地松平安藝守脇谷町麻布

一兵衛町、狸穴、長坂、土器町、三田、白銀、芝海手迄焼る。——柳營日次記

同○享保八年。十六日、江戸赤坂傳馬町より出火、北西大風にて日川明神之下、夫

都都時代ノ火災



より内新町一丁目赤坂築地中町屋敷方不殘、麻布南赤坂近所不殘、今井坂寺町不殘、麻布六本木一本松市兵衛町南久保町芝三田觀音之町にて火留る、凡十二時計、類燒御屋敷方

真田出羽守殿○幸相馬讚岐守殿○尊淺野土佐守殿○長三河守上リ屋敷

島山次郎四郎殿松平駿河守殿大久保加賀守殿○忠五島大和守殿○盛戸

川玄蕃殿京極壹岐守殿○高鳥居右近殿○忠有馬宮内殿能勢惣十郎殿織

田監物殿○秀戸田靱負殿奈須右京殿松平左近殿甲府様衆不殘、京極若狹

守殿○高南部長門殿青木右衛門殿岡田監物殿間鍋下總守殿○詮松平土

佐守殿○山内松平淡路守殿○蜂須水野和泉守殿○忠松平隱岐守殿○定

松平主殿頭殿○忠織田左京殿織田助四郎殿水野左門殿板倉下總守殿以

上。

總燒跡幅七町ニ長サ一里半餘。

一、二月十六日○享保赤坂傳馬町二丁目方出火、麻布南部坂御屋敷御類燒、早

速御届有之。卯刻出火、未刻鎮火トアリ。

一、同廿一日、右御屋敷坪敷左之通御書出、

覺

松平安藝守○淺野

麻布南部坂御借被置ハ御屋敷所、去ル十六日火事之節、家作燒失、左之通、

一、八百拾九坪貳合貳勺 但棟數貳拾六棟

右者居宅之分燒失、家下坪數。 但棟數拾五棟

一、千百五拾三坪 右者惣長屋并門又者番所等共ニ燒失、家下坪數。

一、拾六坪 右者土藏貳ヶ所燒失坪數。

土藏燒失坪數

惣合千九百八拾八坪貳合五勺。

同所燒殘ハ坪數左之通、

一、三拾六坪 土藏三ヶ所

一、貳坪半 番所二ヶ所

外ニ稻荷小社 壹ヶ所

右之通御座ハ以上。

二月廿一日

松平安藝守留守居 江藤兵衛

侯爵淺野家回答

支封丹波守殿長坂邸

朝都時代ノ火災



同保○享八年二月十六日、又類焼ス。

——備藩邸考

二月十六日○享保八年。赤坂ヨリ出火、或三丁目。芝御屋鋪南長屋百廿間類焼。

——御當家年代略記○高知藩。

二月十六日○享保八年。赤坂出火、麻布御屋鋪○相馬氏。表御門通長屋六十間焼失。表通長屋七十間。

同所向屋敷不殘焼失。

——中邑世紀祕説

二月十六日○享保八年。江戸麻布邸○仙臺藩。延焼。

——東藩史稿

三月七日  
火災

二、三月七日火災 左ノ如シ。

一、同年○享保八年三月九日

去ル七日之夜八半時之出火、淺草山之宿町左側酒屋井筒屋七郎兵衛店火元伊勢屋彌兵衛。山ノ宿町半丁致焼失、小出信濃守下屋布裏門番所焼、聖天町裏通り、瓦屋町二町程瓦屋共不殘焼ル。今戸町片側一丁計、今戸橋ハ殘ル。寺三ヶ所、聖天町表通り四丁、金龍山聖天本堂焼、寺中茶屋凡不殘焼、土手向山野鳥越町貳丁、溜メ團左衛門屋布構之内一丁餘焼、豎八丁、横三丁程。

——天享吾妻鑑

附記

享保八年  
四月火災

三月七日○享保八年。江戸聖天町より出火、金龍山の聖天の宮焼、船宿不殘焼、さんや町二丁目迄にて留る。  
——月堂見聞集

金地院記録ニモ、此災見ユ。

〔附記〕 月堂見聞集記ス、

四月廿二日(○享保八年)江戸小船町二丁目三丁目焼失。(○金地院記録ニハ、廿三日陰、夜前小舟町出火ニ付、牧野周防守殿へ爲御見廻、紹首座被遣下有り。柳營日記記ニモ見ユ。)

十月廿四  
日火災

三、十月廿四日火災 ハ、

一、辰刻、愛宕下酒井右京亮○忠武。カ出火、神明通海手迄焼、午刻鎮。

——柳營日記記

十月廿四日○享保八年。卯刻、江戸愛宕下酒井右京殿御屋敷より出火、葉山伊豆守殿、仁木因幡守殿、中川内膳正殿中やしき増上寺三島谷同門前三島町、神明前宮計殘、正源寺ばし南岸の通金森出雲守殿○頼吉。松平右衛門督殿○池田吉泰。御濱屋敷、永井伊賀守殿○直陳。松平大和守殿○基知。大久保加賀守殿○忠方。加藤和泉守○直陳。翻都時代ノ火災